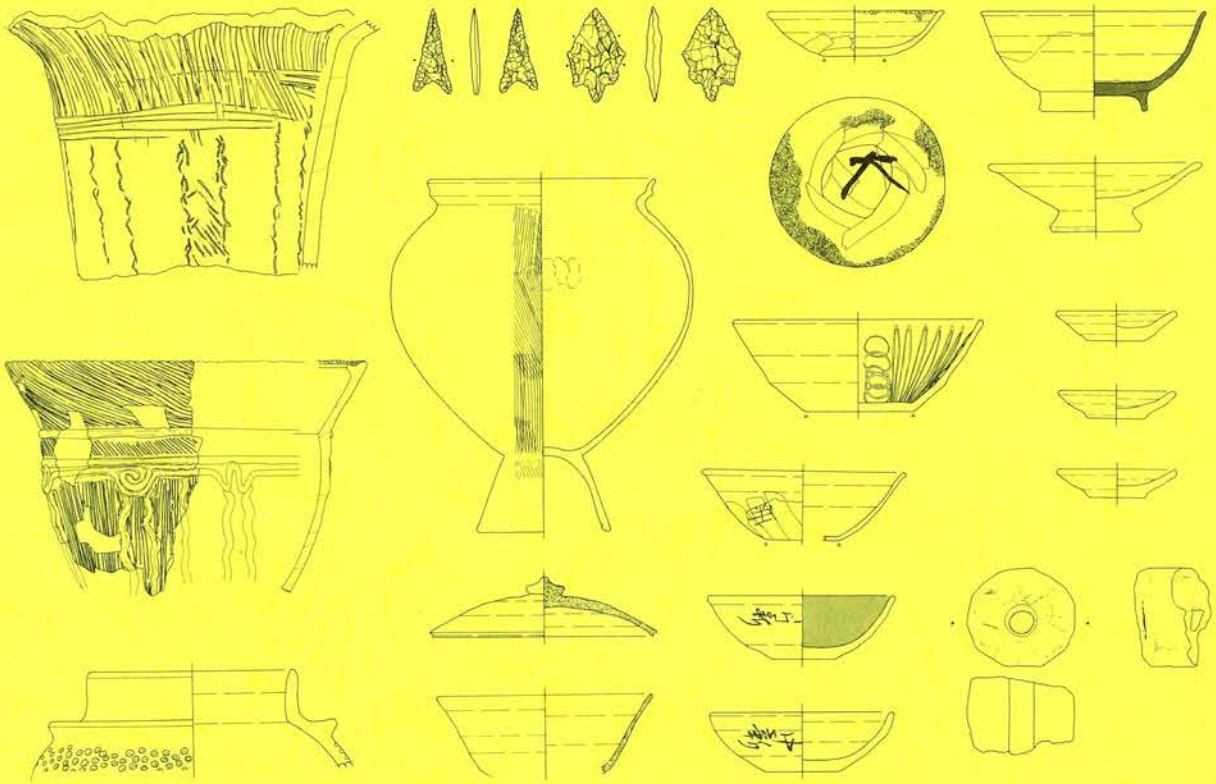
村之内II・III遺跡
高台・中谷井遺跡

県営圃場整備事業に伴う縄文時代・平安時代の
集落遺跡の発掘調査報告書



1995

山梨県明野村教育委員会
峡北土地改良事務所

村之内II・III遺跡
高台・中谷井遺跡

むらのうち　たかだい　なかたにい

県営圃場整備事業に伴う縄文時代・平安時代の
集落遺跡の発掘調査報告書

1995

山梨県明野村教育委員会
峡北土地改良事務所

序

平成５年度に明野村では、県営圃場整備事業村之内工区および永井工区の施工が予定されました。この圃場整備事業に先立ち、３カ所で埋蔵文化財の発掘調査が明野村教育委員会により実施されました。この調査報告書には村之内II・III遺跡、高台・中谷井遺跡発掘調査の成果が収められています。

高台・中谷井遺跡周辺にはいくつかの縄文時代の遺跡があることが以前から知られていました。現在の明野小学校、明野中学校が建設された際にも、縄文時代の住居跡が発見されたと聞いております。また、遺跡がある永井地区には永井七池と呼ばれた湧水が点在し、かつては生活・農業用水として利用されておりました。縄文時代のはるか昔から、この湧水を人々が利用し集落を営んでいたわけです。

また、村之内II・III遺跡は圃場整備事業に先立つこと１年前に実施した試掘調査によりその存在が確認されました。茅ヶ岳山麓に所領を有したといわれる小笠原長清とほぼ同時代の平安時代末の集落ということに加え、県内でも類例の少ない、小鍛冶遺構が発見された遺跡でもあります。茅ヶ岳山麓の古代史に新たな知見が加えられたわけで、興味の尽きることはありません。

発掘調査にあたっては圃場整備施工区の関係者に有形、無形のご迷惑をおかけいたしました。お詫び申し上げるとともにご協力に深く感謝いたします。また、山梨県学術文化課、峡北土地改良事務所のみなさまには、多方面にわたりご指導、ご教示を賜りましたことを御礼申し上げます。最後に小雨が続くぐずついた夏に、濡れることもいとわず発掘調査に参加してくださった発掘作業員のみなさまのご苦労をねぎらい、御礼申し上げます。

平成７年３月31日

明野村教育委員会教育長　深　澤　正　彦

例　言

1　本報告書は、山梨県北巨摩郡明野村上手地内に所在した村之内II・III遺跡および高台・中谷井遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は1993年６月７日より同年９月16日まで現地での発掘調査をおこない、1994年４月１日より1995年３月31日まで遺物の整理、報告書作成作業を行った。

3　発掘調査にあたった組織は次のとおりである。

調査主体　明野村教育委員会　教育長　深澤正彦

調査担当者　明野村教育委員会社会教育係文化財担当　佐野隆

調査補助員　吉田光男

調査事務局　明野村教育委員会

4　本書の執筆･編集は佐野が行った。遺構、遺物の実測は佐野、吉田、筒井、清水（さ）、入戸野（宏）が行った。本書中の遺構、遺物の写真は佐野が撮影した。

5　本書作成にあたって次の方々に多くのご指導、ご教示を頂いた。ここにご芳名を記して感謝したい。(敬称略)
雨宮正樹、伊藤公明、今福利恵、櫛原功一、小宮山隆、杉本充、瀬田正明、高橋みゆき、竹田眞人、萩原光雄、平野修、保坂康夫

6　本文中の注、参照文献はすべて各章末にまとめた。

7　本遺跡の出土品および諸記録はすべて、明野村教育委員会が保管している。

8　調査参加者（敬称略）

阿部恵子、石渡節子、今村憲一、長田貞子、大崎喜久江、小林佳月、小松原千津、坂本依子、清水昭子、清水さゆり、清水みゆき、清水祐至、篠原愛子、鈴木晶子、筒井つや子、西川大、入戸野きぬよ、入戸野たかじ、入戸野つるじ、入戸野朝夫、入戸野宏、入戸野みず子、橋本隆廣、日比野真由、平賀あさじ、福田和久、水森広徳、三井啓介、三井とも子、三塚てつ子、皆川一子、宮川寛、守屋真弓

凡　例

1　本文中の土師器胎土は次のとおり器種別に分類した。分類は肉眼観察による主観的なものであり、土器によっては異なる器種の胎土分類に近いものがある。そのような場合には器種にこだわらずもっとも近い胎土質分類にあてはめた。

坏　Ａ１類　赤色粒子が混じるキメの細かい緻密な胎土質で、色調は赤褐色もしくは明赤褐色。いわゆる甲斐型坏の胎土である。

Ａ２類　Ａ１類とほぼ同様の胎土質であるが、焼成が悪く色調が明黄褐色。
Ａ３類　赤色粒子が僅かに混じるが石英、長石の粒子が目立つややざらついてキメの粗い胎土質で、色調は暗褐色。北巨摩地方の在地生産土師器の可能性が考えられる。
Ａ４類　赤色粒子が僅かに混じるが石英、長石、雲母の小粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調は赤褐色。甲斐型ＸⅢ期頃の坏によくみられる。
Ａ５類　Ａ１と同様の鉱物粒子を含むがキメが粗くざらついた胎土質で、色調は赤褐色もしくは明赤褐色。北巨摩地方の在地生産土師器の可能性が考えられる。

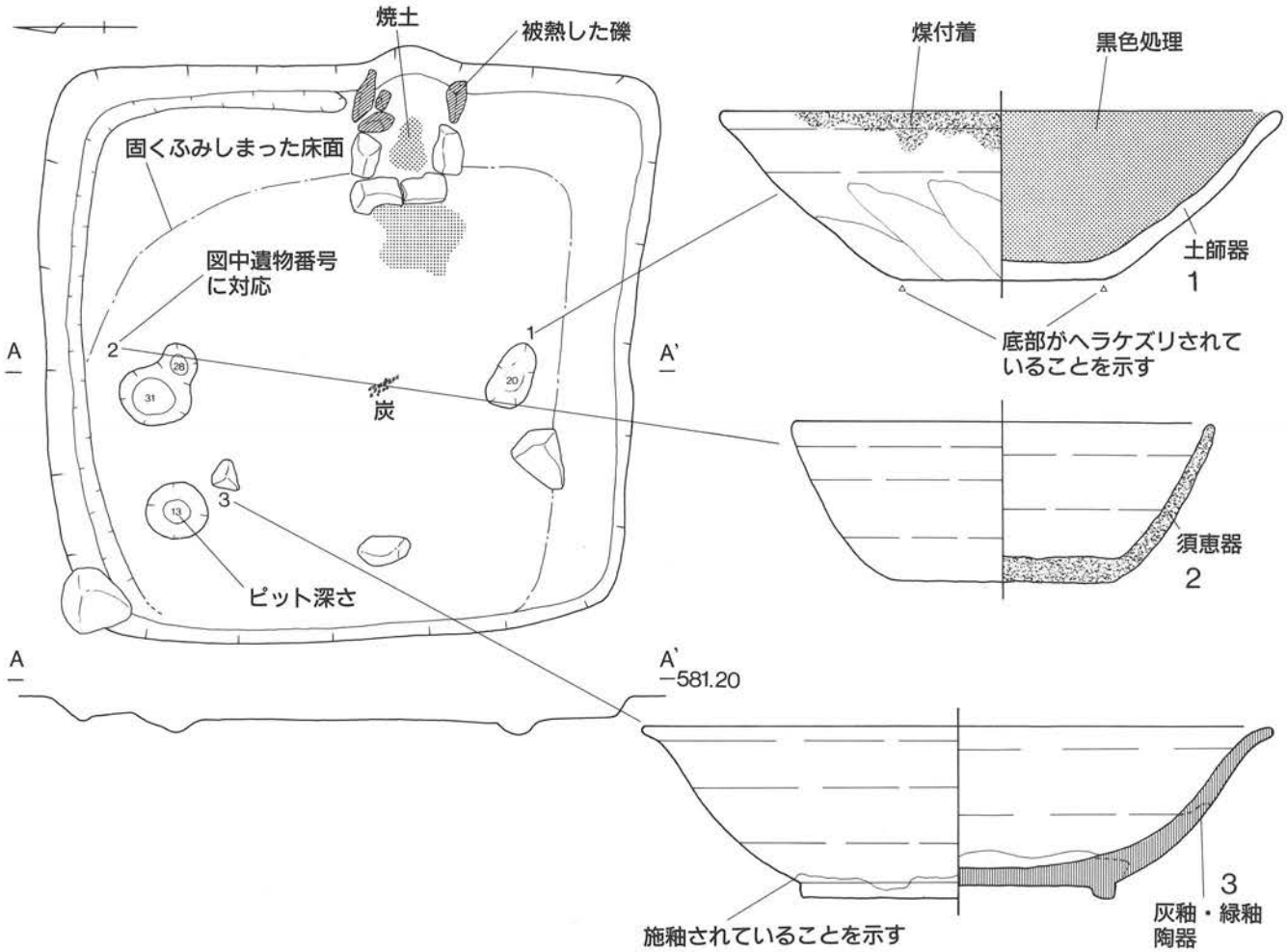
甕　Ｂ１類　雲母、長石、石英粒子が混じるざらついたキメの粗い胎土質で、色調は暗赤褐色もしくは暗褐色。いわゆる甲斐型甕の胎土質である。
Ｂ２類　Ｂ１類と同様の胎土質であるが、色調は黒色。
Ｂ３類　雲母、長石、石英の小粒子と僅かに赤色粒子が混じるキメの細かい胎土質で、色調は黄褐色。北巨摩地方の在地生産土師器の可能性が考えられる。

非甲斐型坏
Ｃ１類　雲母粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調は乳白色もしくは乳灰色。現長野県域で生産されたと思われる土師器。
Ｃ２類　雲母粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調は赤褐色もしくは暗赤褐色。
Ｃ３類　雲母、長石、石英粒子とごく僅かの赤色粒子が混じるややキメの粗い胎土質で、色調は暗赤褐色。
Ｃ４類　雲母、長石粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの粗い胎土質で、色調は黄橙色。
Ｃ５類　Ｃ４類と同様の胎土質でややキメが細かい。色調はにぶい黄橙色。

ロクロ整形甕
Ｄ１類　雲母、長石、石英の大きめの粒子が混じるキメのやや粗い胎土質で、色調は浅黄橙色。
Ｄ２類　雲母、長石、石英粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調はにぶい黄橙色。
Ｄ３類　雲母、長石、石英の小粒子と僅かの赤色粒子が混じるキメの細かい胎土質で、色調は暗赤褐色。
Ｄ４類　Ｄ３類と同様の胎土質で色調は黒色。

土師質土器
Ｅ１類　雲母、長石、石英粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調は暗赤褐色。甕Ｂ１類胎土のキメを細かくしたような胎土質である。
Ｅ２類　雲母、長石、石英粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの粗い胎土質で、色調は赤褐色もしくは黄褐色。

２　本書挿図中にある数字、記号、スクリーントーンの意味は以下のとおりである。



本文目次

村之内II・III遺跡

第1章　遺跡をとりまく環境 …… 2
　1　遺跡の地理的環境 …… 2
　2　遺跡の歴史的環境 …… 2

第2章　調査に至る経緯と発掘経過 …… 3

第3章　縄文時代の遺構と遺物 …… 6
　1　縄文時代の遺構 …… 6
　2　縄文時代の遺物 …… 6

第4章　平安時代の遺構と遺物 …… 8
　1　平安時代の遺構と遺物 …… 8

第5章　その他の時期の遺構と遺物 …… 32

高台・中谷井遺跡

第1章　遺跡をとりまく環境 …… 44
　1　遺跡の地理的環境 …… 44
　2　遺跡の歴史的環境 …… 44

第2章　調査に至る経緯と発掘経過 …… 46

第3章　縄文時代の遺構と遺物 …… 46
　1　遺構と遺物 …… 46
　2　遺構外出土遺物 …… 48

第4章　平安時代の遺構と遺物 …… 52
　1　平安時代の遺構と遺物 …… 52
　2　遺構外出土遺物 …… 65

第5章　その他の時期の遺構と遺物 …… 65

第6章　ま　と　め …… 74

参考文献 …… 75

図版目次

村之内II・III遺跡

第1図　村之内II・III遺跡位置図 …… 4
第2図　村之内工区・調査区及び試掘坑位置図 …… 4
第3図　平安時代遺跡位置図 …… 5
第4図　縄文時代の遺物 …… 7
第5図　1号住居跡及び出土遺物 …… 9
第6図　1号住居跡出土遺物 ……10
第7図　2号住居跡及び出土遺物 ……10
第8図　3号住居跡及び出土遺物 ……12
第9図　4号住居跡及び出土遺物 ……13
第10図　4号住居跡出土遺物 ……14
第11図　4号住居跡出土遺物 ……15
第12図　4号住居跡出土遺物 ……16
第13図　5号住居跡及び出土遺物 ……20
第14図　6号住居跡及び出土遺物 ……21
第15図　6号住居跡出土遺物 ……22
第16図　6号住居跡出土遺物 ……23
第17図　7号住居跡及び出土遺物 ……24
第18図　8号住居跡及び出土遺物 ……25
第19図　9号住居跡及び出土遺物 ……26
第20図　10号住居跡及び出土遺物 ……27
第21図　11号住居跡及び出土遺物 ……32
第22図　11号住居跡出土遺物 ……33
第23図　12号住居跡 ……33
第24図　12号住居跡出土遺物 ……34
第25図　13,14号住居跡及び出土遺物 ……34
第26図　15号住居跡及び出土遺物 ……35
第27図　16号住居跡及び出土遺物 ……36
第28図　17号住居跡及び出土遺物 ……36
第29図　18～22号住居跡及び出土遺物 ……37
第30図　1号住居跡及び出土遺物 ……38
第31図　1号住居跡出土遺物 ……39
第32図　2号住居跡及び出土遺物 ……40
第33図　溝状遺構及び遺構外出土遺物 ……41
第34図　土坑・ピット位置図 ……42

高台・中谷井遺跡

第1図　周辺の縄文時代遺跡位置図 ……45
第2図　永井工区・調査区及び試掘坑位置図 ……45
第3図　16号住居跡及び出土遺物 ……47
第4図　遺構外出土遺物 ……49
第5図　遺構外出土遺物 ……50
第6図　遺構外出土遺物 ……51
第7図　2号住居跡及び出土遺物 ……54
第8図　3号住居跡及び出土遺物 ……55
第9図　4号住居跡及び出土遺物 ……56
第10図　4号住居跡出土遺物 ……57
第11図　5号住居跡及び出土遺物 ……57
第12図　6号住居跡及び出土遺物 ……59
第13図　6号住居跡出土遺物 ……60
第14図　7、8号住居跡及び出土遺物 ……60
第15図　9号住居跡及び出土遺物 ……61
第16図　10号住居跡 ……61
第17図　10号住居跡出土遺物 ……62
第18図　11号住居跡及び出土遺物 ……66
第19図　11号住居跡出土遺物 ……67
第20図　12,13号住居跡 ……67
第21図　12号住居跡出土遺物 ……68
第22図　12号住居跡出土遺物 ……69
第23図　13号住居跡出土遺物 ……70
第24図　遺構外出土遺物 ……71
第25図　その他の時期の遺構と遺物 ……72
第26図　土坑位置図 ……73

写真図版目次

村之内Ⅱ遺跡

村之内Ⅱ・Ⅲ遺跡全景 ……78
1号住居 ……79・80
2号住居 ……79・80
3号住居 ……80
4号住居 ……81・82・89
5号住居 ……82
6号住居 ……83
7号住居 ……84
8号住居 ……84
9号住居 ……85・86・89
10号住居 ……85・86
11号住居 ……86
12号住居 ……87・89
13号住居 ……87
14号住居 ……88
15号住居 ……88・89
17号住居 ……89
18号住居 ……89
19号住居 ……89

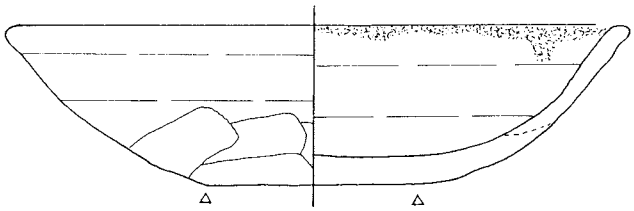
村之内Ⅲ遺跡

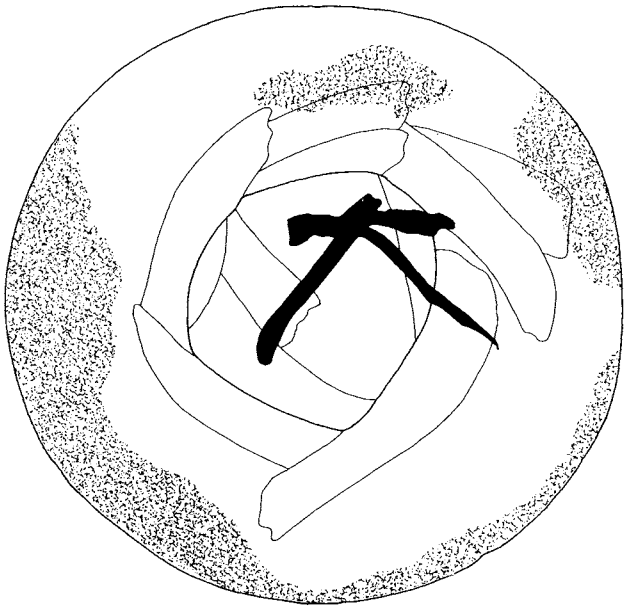
1号住居 ……90・91
2号住居 ……92
溝状遺構 ……92・93
埋設土器 ……93
遺構外出土遺物 ……93

高台・中谷井遺跡

高台・中谷井遺跡全景 ……94
16号住居 ……95
縄文時代の土器・石器 ……96・97
2号住居 ……98・99
3号住居 ……99・108
4号住居 ……99
5号住居 ……100・101
6号住居 ……100・101
8号住居 ……101
9号住居 ……101
10号住居 ……102・103・108
11号住居 ……103
12号住居 ……104～108
13号住居 ……104～107
土坑 ……107・108

村之内II・III遺跡





第１章　遺跡をとりまく環境

１　遺跡の地理的環境（第１図、写真１）

明野村は東に茅ヶ岳（標高1703m）、金ヶ岳（標高1764m）を望み、西は秩父山系より流れ出る塩川の断崖により区画された南北15km、東西８kmほどの茅ヶ岳山麓に位置する。茅ヶ岳山麓には、小河川が形成した谷が東西に数多くのびているが、現在水流のある河川は北から、湯沢川、栃沢川、正楽寺川などがあるだけである。いずれも小河川であり、古来、農業用水の便に苦しんだ土地柄である。しかし、茅ヶ岳山麓には南北に連なる湧泉列があり、そのうちのいくつかは現在も清水をたたえている。遺跡の多くもこれらの小河川、湧泉の近くに分布する（佐野1993）。

村之内II・III遺跡は茅ヶ岳山麓の西端を塩川が切り取るように形成した３枚の段丘面のうちの中位段丘（神取面）上に位置し、標高は492m～497mほどで、栃沢川左岸にあたる。遺跡周辺は東からの土石流や栃沢川の開析により段丘崖が浸食されなだらかな傾斜面になっている。塩川との現比高差は約30m、栃沢川との現比高差は約10mである。

本遺跡から東へ600mほど離れた、同じ栃沢川左岸には縄文時代中期から平安時代の遺跡である桑森遺跡があり、本遺跡の調査に先立ち実施された試掘調査では縄文時代前期後半の遺物も少量ながら発見されている。これらのことから、本遺跡周辺の地形は縄文時代前期後半頃までにはある程度安定し、人々が生活の場として選択し得たことが推測される。また、遺跡周辺にはつい最近まで湧水があったといわれ、栃沢川と並んで生活用水として利用されたと思われる。

２　遺跡の歴史的環境（第３図）

本遺跡周辺の平安時代の遺跡分布をみると、本遺跡から南西方向、藤井平には宮ノ前遺跡をはじめとする平安時代の遺跡が濃厚に分布する。宮ノ前遺跡は奈良・平安時代の住居跡423軒が検出された集落遺跡で、藤井平における条里制水田の形成過程までが把握された。また、宮ノ前第２遺跡では白鳳期の寺院跡が発見されている。
塩川の氾濫により形成された平坦な藤井平は、その地理的条件より奈良時代から平安時代全般を通じて巨摩郡北西部の一中心として位置づけられていたと思われる。

藤井平北端部は現須玉町大豆生田から若神子にかけての塩川と須玉川により形成された平坦部へと連続しており、北および西側は八ヶ岳の噴火活動により形成された山麓台地に比高30mの崖を介して接している。若神子の平坦部を見おろす台地上には牧監の館ともいわれる官衙的要素をもつ湯沢遺跡や土師器焼成遺構が検出された大小久保遺跡などがある。中世初頭では政治的拠点として営まれた若神子城がある。

茅ヶ岳山麓はこの藤井平北端部と塩川を挟んで接している。茅ヶ岳山麓にも平安時代の遺跡が点在し、これまでに明野村だけでも10遺跡が発掘調査されている。さらに穂坂牧を私牧化した小笠原の牧を管理したとされる小笠原長清居館跡と伝えられる中世期の土塁、馬倹場跡がある。

藤井平を囲む八ヶ岳南麓および茅ヶ岳山麓には平安時代中頃、９世紀代から10世紀代に属するとされる遺跡数が非常に多い。その背景に公権力による計画集落の形成や官牧の設置などにともない集落が急増したとする説（末木1986、萩原1986、岡本1990）がある。

しかし、それら集落が廃絶される10世紀末以降の遺跡数は多くなく、中世への移行期の検討はあまり進んでい

ない。現北巨摩郡下で発掘調査がなされた平安時代の遺跡のうち10世紀後半以降の遺構遺物がみられるのは、韮崎市宮ノ前遺跡、中田小学校遺跡、中道遺跡、金山遺跡、須玉町中尾城遺跡、武川村宮間田遺跡、白州町新居道上遺跡、上北田遺跡、大泉村寺所遺跡、木ノ下・大坪遺跡、城下遺跡などがある（注１）

平安時代巨摩郡に属した八ヶ岳南麓と茅ヶ岳山麓、藤井平周辺は甲斐源氏勃興の中心地としての位置づけが考えられるだけに、平安時代末から中世初頭の資料の蓄積とその検討が待たれる。

注１　11世紀以降としたのは甲斐型土器編年XII期以降の遺物を出土する遺構がある遺跡を挙げた。既に報告書の刊行されているものは、報告書中の時期判定に準じた。

第２章　調査に至る経緯と発掘経過

明野村では平成５年度に県営圃場整備事業村之内工区の施工が計画されていた。そのため、明野村教育委員会では平成４年12月、工区内の埋蔵文化財包蔵地の所在を確認するための試掘調査を工区全域で行った（第２図)。村之内工区東端は、縄文時代と平安時代の集落遺跡である桑森遺跡と工区外水田と畑を挟んで接しており、試掘調査に際して工区東部で埋蔵文化財の発掘調査が必要とされるのではという予想をもって臨んだ。

ところが、試掘調査の結果、桑森遺跡の範囲は工区まで及んでいないことが確認され、同時に工区西端で平安時代から中世と思われる遺構と遺物が集中して検出される区域が確認された。また、南側工区でも同様に住居跡が検出されたことから、前者を村之内II遺跡、後者を村之内III遺跡として遺跡の発見を文化庁に届け出た。

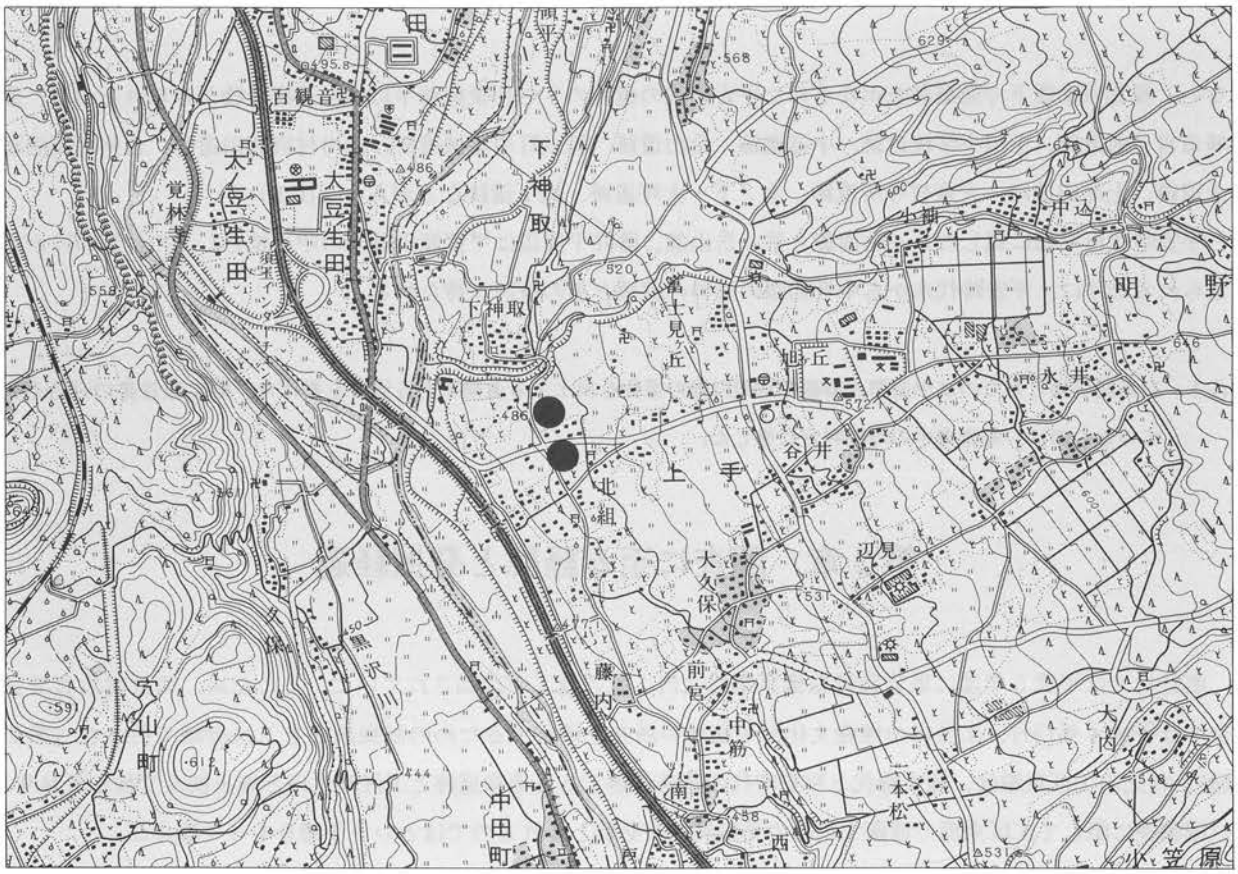
村之内II・III遺跡は広い涸沢を挟んで同一集落を形成していたと思われるが、土地改変により現在の包蔵地は100メートル以上離れているために別個の遺跡として扱うこととした。

以上の結果を受けて、平成５年５月峡北土地改良事務所と明野村教育委員会で工事施工に先立ち、発掘調査を実施するために協議をもち、現地での調査期間を平成５年６月より８月31日とし、整理報告作業は平成６年度に実施すること、現地の発掘調査費は413万円とする発掘調査委託契約及び発掘調査経費負担協定を平成５年６月３日付けで締結した。

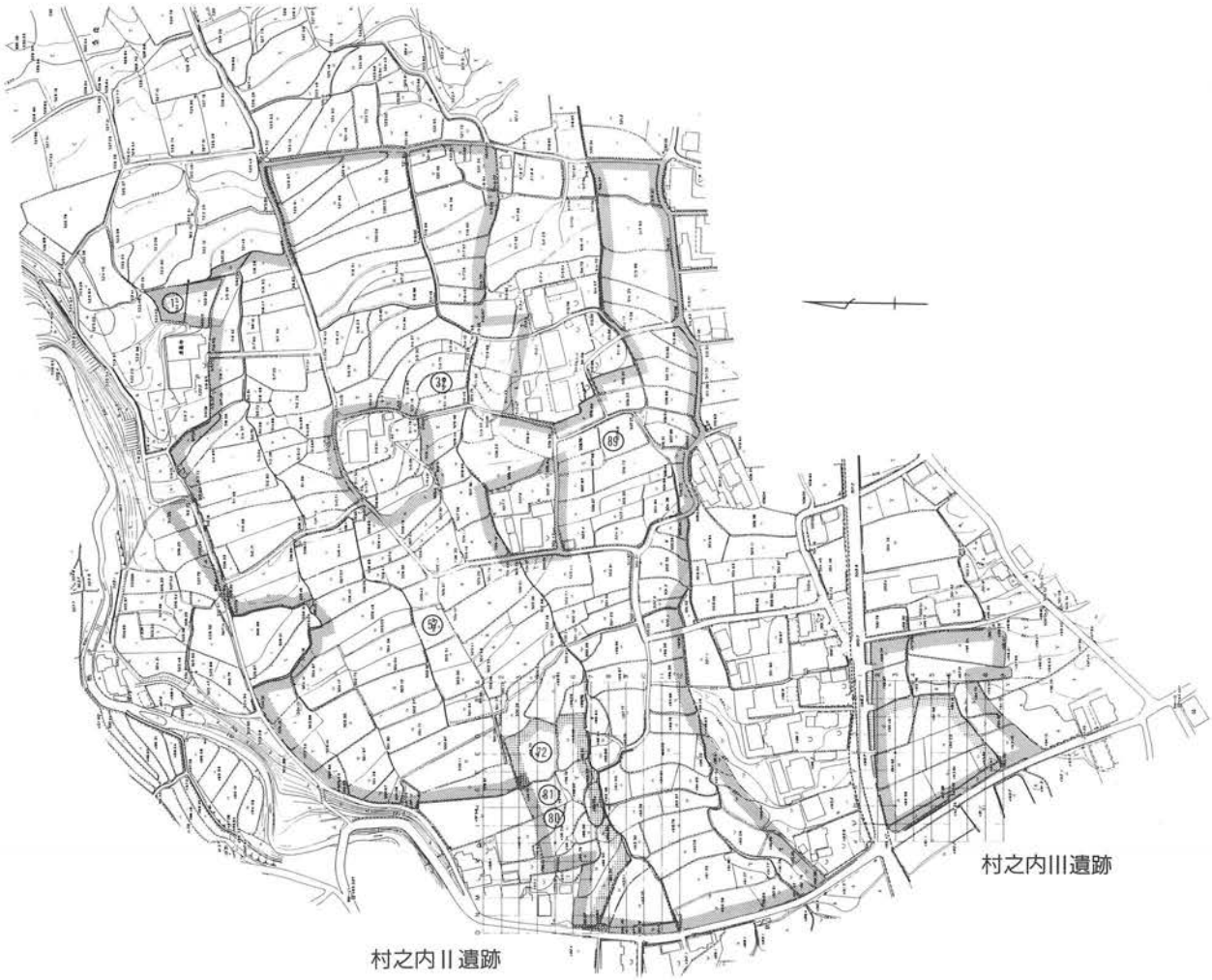
現地での発掘調査は平成５年５月20日より重機による表土剝ぎ作業を開始し、作業員による精査、遺構調査は６月７日より始めた。調査対象範囲は、試掘調査結果をもとに遺構が土地改変による削平を免れた範囲を想定し決定した。その結果、村之内II遺跡は4、100㎡、村之内III遺跡は3、500㎡を調査することとなった。

平成５年の夏は雨が多くぐずついた天気が続いた。それでも村之内II・III遺跡の調査中はまだ晴れる日が多かった。そのため、調査は順調に進行し村之内III遺跡では、明野村で初めての鍛冶遺構を検出するなどの成果を得、７月17日には調査をほぼ終了し７月19日俯瞰写真を撮影して完了した。その間、６月27日には遺跡見学会を開き、地元施工区の地権者を始めとする多くの方々に発掘調査の成果を見学してもらった。

調査により得られた資料、遺物の整理作業は、平成６年６月８日に整理作業のための調査委託契約及び調査経費負担協定を峡北土地改良事務所と明野村教育委員会とのあいだで締結し着手した。平成６年度、明野村教育委員会では５件の発掘調査を実施し多忙を極め、整理作業は順調に進んだとはいいがたい。また、遺跡からの出土遺物は土器小片が多く、それらをできる限り資料化しようと心がけたため整理作業は遅れがちであった。整理作業が完了し、報告書原稿を印刷作業に入稿できたのは平成７年３月に入ってからである。



第1図　村之内II・III遺跡位置図(1/25,000)



第2図　村之内工区・調査区及び試掘坑位置図(1/5,000)

第３図　平安時代遺跡位置図(1/100,000)

周辺の平安時代遺跡

１中尾城跡	２湯沢遺跡	３大小久保遺跡	４若神子城跡	５宮後遺跡
６諏訪原遺跡	７薬師堂遺跡･中村道祖神遺跡	８北原遺跡	９梅の木遺跡	10腰巻遺跡
11大豆生田遺跡	12神取遺跡	13桑森遺跡	14普門寺遺跡	15村之内II・III遺跡
16高台中谷井遺跡	17屋敷添遺跡	18中道遺跡	19伝小笠原氏館跡	20中田小学校遺跡
21前田遺跡	22金山遺跡	23宮ノ前第２遺跡	24駒井遺跡	25宮ノ前遺跡
26北後田遺跡	27堂の前遺跡	28北下条遺跡	29後田遺跡	30宮間田遺跡
31新居道上遺跡				

第３章　縄文時代の遺構と遺物

1　縄文時代の遺構

村之内II・III遺跡では縄文時代中期初頭の埋設土器１基と土坑３基が検出されたほか、縄文時代と明確に位置づけられる遺構は検出されなかった。土坑は第４章で報告してある。

第４図－１に示した埋設土器（写真16）はM－８グリッド、14号住居跡床下より検出された、縄文時代中期初頭五領ヶ台式の深鉢である。正位で、胴下半部が失われた状態で埋設されていた。口縁部が欠けているのは14号住居竪穴を掘り込む際に破壊されたものか、当初より失われた状態であったのかわからない。

2　縄文時代の遺物（第４図、写真16）

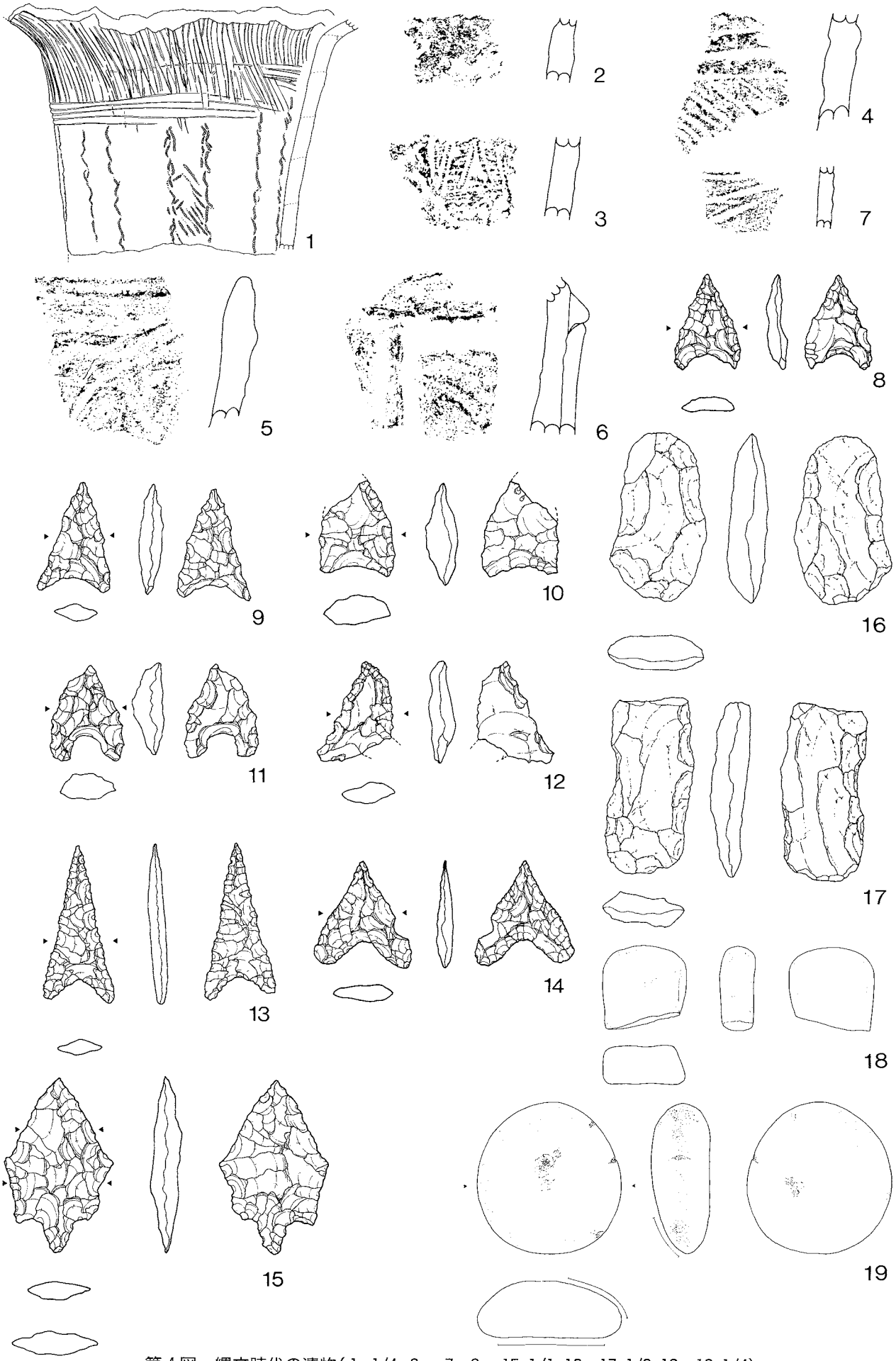
第４図に縄文時代に属する遺構外出土遺物と試掘調査で得られた遺物を掲載した。出土位置と観察所見は第１表と第２表にまとめた。

第１表　土器

図版番号	出土位置	胎土質・色調	観察所見	推定時期
2	８住覆土	繊維が混入する		縄文時代早期末葉
3	９住覆土	長石粒子が目立つ 赤褐色	削りに近い深い刻みと押し引きにより施文する	縄文時代前期末葉十三菩提式
4	９住覆土	長石、雲母粒子が目立つ ざらついた胎土黒褐色	半截竹管による刻みを隆線に施し、平行沈線を施文	縄文時代中期初頭五領ヶ台式
5	８住覆土	長石粒子が目立つがややキメの細かい胎土黄褐色	口縁直下に低い幅広隆帯を貼り付け下に沈線を施文　器内面に擦痕あり	縄文時代中期末葉～後期初頭
6	８住覆土	長石粒子が目立つ ざらついた胎土黄褐色	断面三角形の隆帯をＴ字状に貼り付ける　器内面に擦痕あり	縄文時代後期前半
7	15住覆土	長石、雲母粒子が目立つ ざらついた胎土 暗赤褐色	浅い幅広沈線を施文	縄文時代後期～晩期？

第２表　石器

図版番号	出土位置	石材質	重　さ	図版番号	出土位置	石材質	重　さ	推定時期　備考
8	６住覆土	黒曜石	0.58㌘	14	ＴＰ32	黒曜石	0.65㌘	
9	９住覆土	黒曜石	0.83㌘	15	18住覆土	黒曜石	1.55㌘	縄文時代晩期
10	11住覆土	黒曜石	1.2㌘	16	６住覆土	頁岩	125㌘	
11	不　　明	黒曜石	1.1㌘	17	ＴＰ81	頁岩	110㌘	
12	15住覆土	黒曜石	1.05㌘	18	９住覆土	安山岩	200㌘	全面に擦痕あり
13	村之内III　溝状遺構	黒曜石	0.8㌘	19	３住覆土	安山岩	700㌘	├─┤部擦痕あり



第４図　縄文時代の遺物(1 1/4, 2～7, 8～15 1/1, 16～17 1/3, 18～19 1/4)

第４章　平安時代の遺構と遺物

１　平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は、村之内II遺跡で住居跡22軒、村之内III遺跡で２軒が検出された。村之内III遺跡１号住居跡は、羽口、鉄滓の出土から平安時代末の鍛冶遺構と考えられる。両遺跡で検出された住居跡は、概して土地改変による削平を受けて遺存状態が悪く、竪穴掘り込みは数センチから10センチ程度にしか残っていない。また、カマドについても僅かな礫と焼土、浅い掘り込みなどからカマドであることを判断した。従ってここに報告する住居跡実測図には、一部を除いて住居断面と覆土セクション、カマド実測図を省略した。

出土遺物は床面出土遺物を優先して図下し報告した。ただし床面がはっきりしない住居は、カマド焼土の高さを床面推定高として、床面出土遺物を想定した。

遺構の時期は甲斐型土器集成グループ（1992）、森原（1994）の編年により床面出土遺物をもとに推定した。

村之内II遺跡

１号住居跡（第５図、第６図、写真２・３）

遺構の概要　５ｍ×4.2ｍのややいびつな方形の平面形をもつ住居跡で、東壁南寄りにカマドをもつ。竪穴掘り込みは10cmほどが残るが、固くしまった床面は検出されなかった。

カマドの概要　東壁南寄りに焼土と赤変した礫が検出されたため、カマドと判断した。

出土遺物　１は推定口径12.5cmの甲斐型小型甕で、胎土はＢ１類。２は推定口径17.7cmの甲斐型小型甕で、胎土はＢ１類。３は推定口径22cmの土師器鉢で、胴下半部は回転ヘラ削りされる。胎土はＣ３類だが色調は乳白色。４は推定口径19cmの甲斐型小型甕で、外面はハケメ、内面はナデで調整される。胎土はＢ１類。５は推定口径27.6cmの甲斐型甕で、外面ハケメ、内面はナデで調整される。胎土はＢ１類。

遺構の時期　甕が遺物の主体であるため、甲斐型Ｘ～XII期、９世紀後半から10世紀中頃までの幅で考えておく。

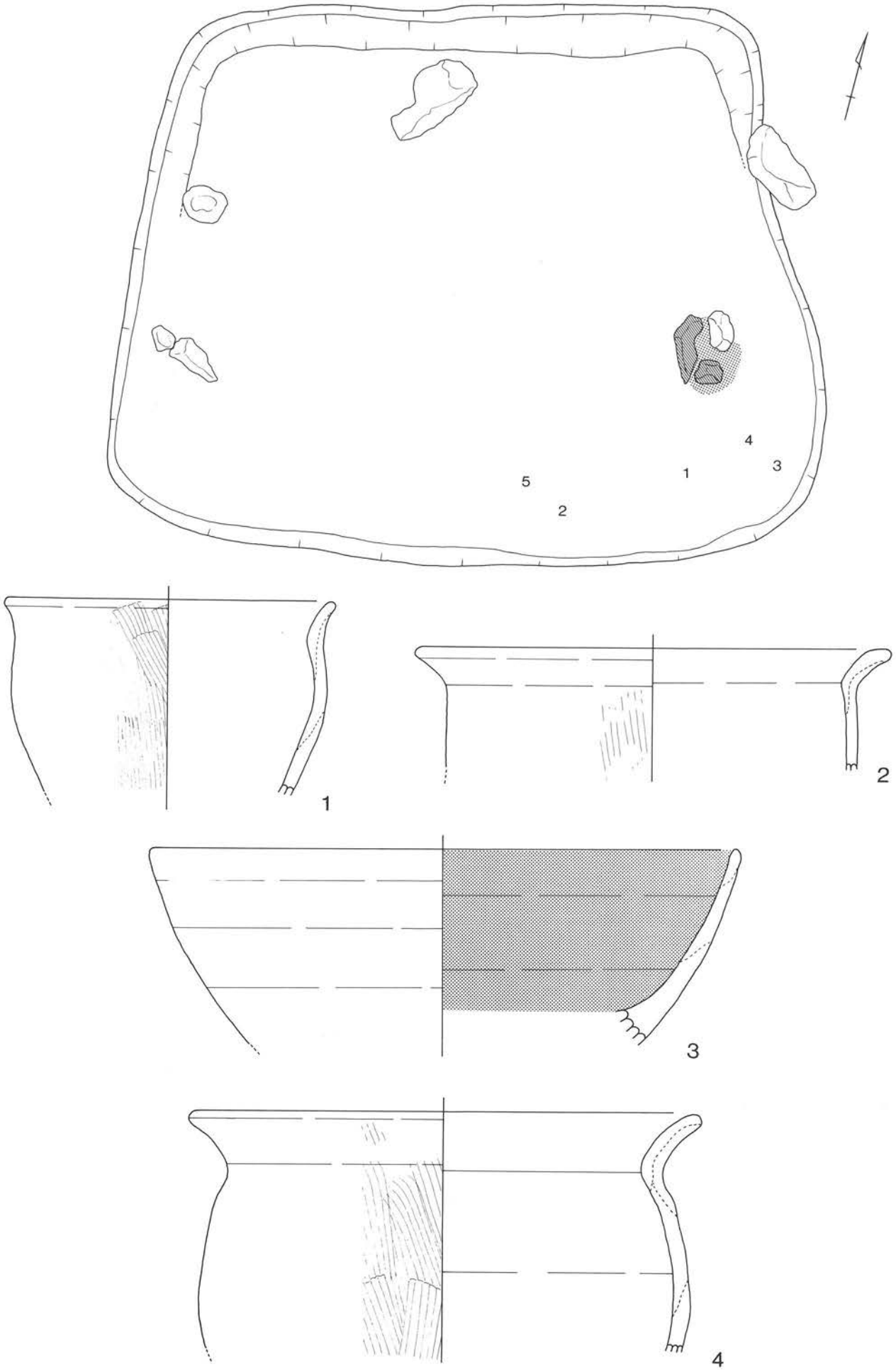
２号住居（第７図、写真２・３）

遺構の概要　１号住居西隣で検出された。４ｍ×4.4ｍの方形の平面形だったと考えられる。南側は削平され、床面は検出されなかった。周溝が検出された。

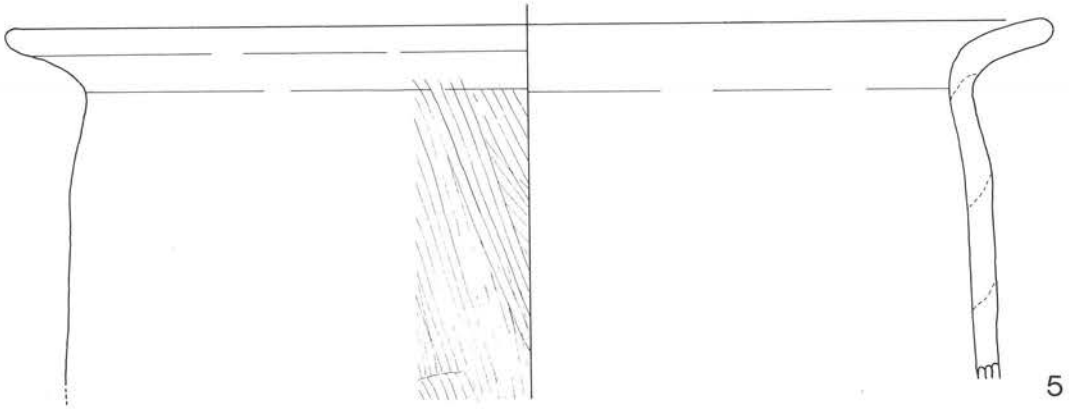
カマドの概要　住居中央で焼土が検出された。壁から離れておりカマドとは考えにくいが、東壁中央あたりにカマドがあったとも考えられる。

出土遺物　１は住居中央の焼土中から出土した甲斐型小型甕で、口径10.5cm、器高８cmの完形品である。胎土はＢ１類。外面ハケメ、内面はナデ調整のみ。２は推定口径26cmの甲斐型甕で、外面ハケメ、内面はナデ調整のみ。胎土はＢ１類。３も甲斐型甕で推定口径27.2cm。内外面ハケメ調整。胎土はＢ１類。

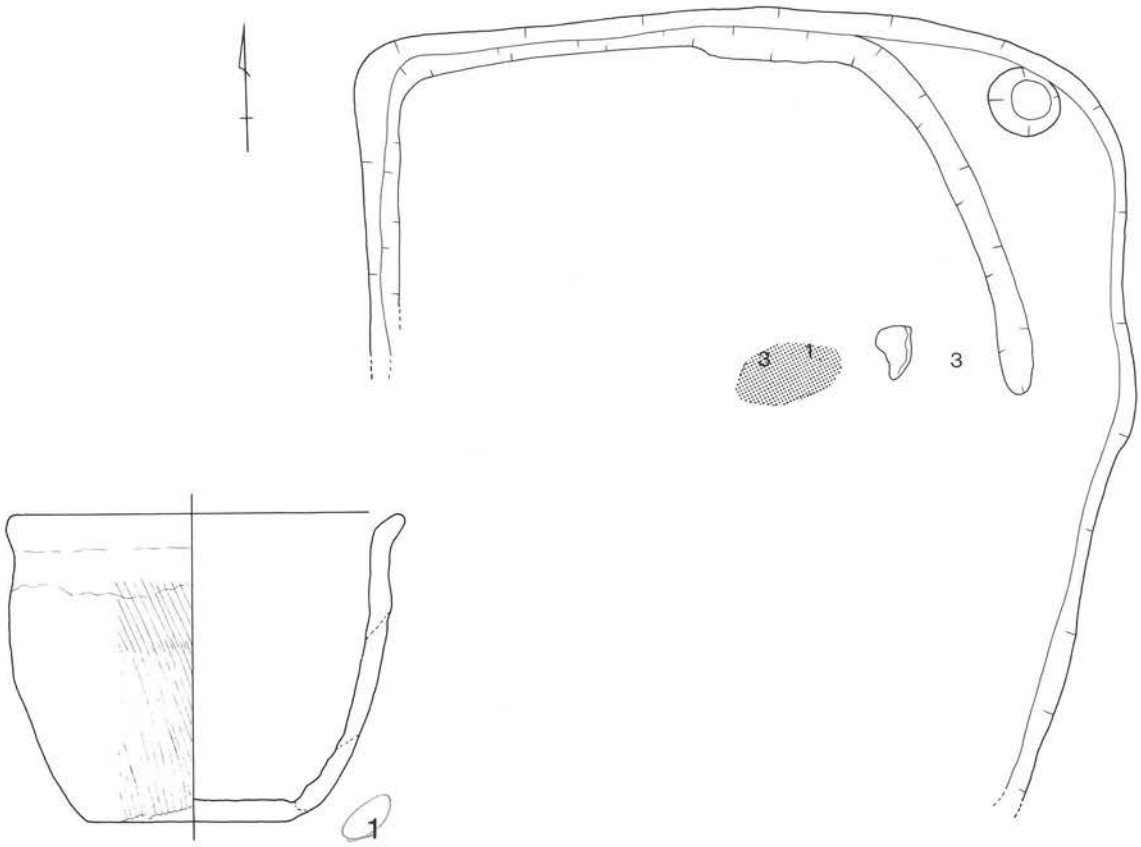
遺構の時期　遺物が少なくはっきりしないが、坏、皿の小器片には底部が全面ヘラ削りされるものがあり、内面に暗文をもつもの、口唇部が肥厚するものがないことから甲斐型VIII～Ｘ期、９世紀前半から後半と推定できる。

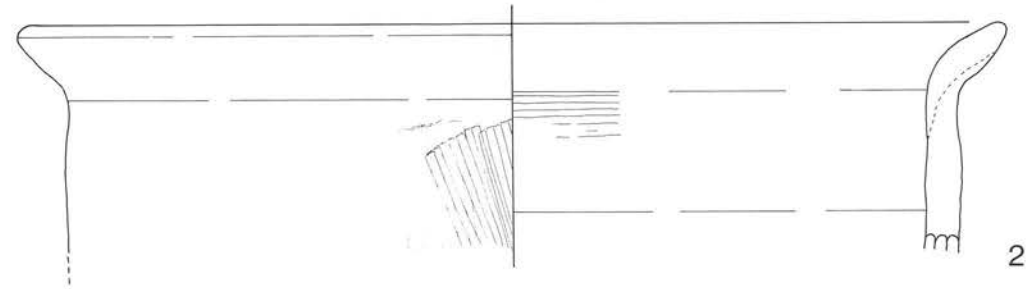


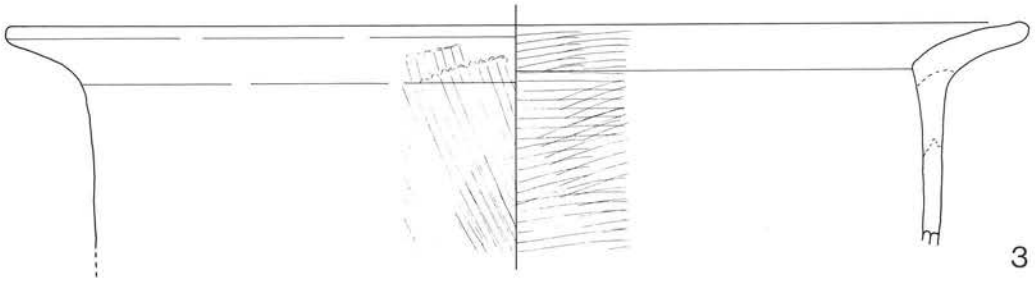
第５図　１号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第６図　１号住居跡出土遺物(1/2)







第７図　２号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)

3号住居（第8図、写真3）

遺構の概要　3.9m×3.5mの方形の平面形をもつ住居跡で、床面が全面で良好に検出された。周溝が北東隅で検出された。住居内の土坑は後世のものと思われる。

カマドの概要　東壁南よりに焼土と浅い掘り込みが検出された。カマドを構築した石材は残っていない。

出土遺物　1は推定口径15.5cmの甲斐型小型甕の小器片で、内外面ハケメ調整。内面の口縁屈曲部は真っ黒に焦げついている。胎土はB1類。2は推定口径25cmの甲斐型甕で、内外面ともハケメ調整。口縁が4分の1周する器片である。胎土はB1類。

遺構の時期　遺物が少なく、上記2個体の甕をもとに推測すれば甲斐型Ⅷ～X期、9世紀前半から後半頃と思われる。

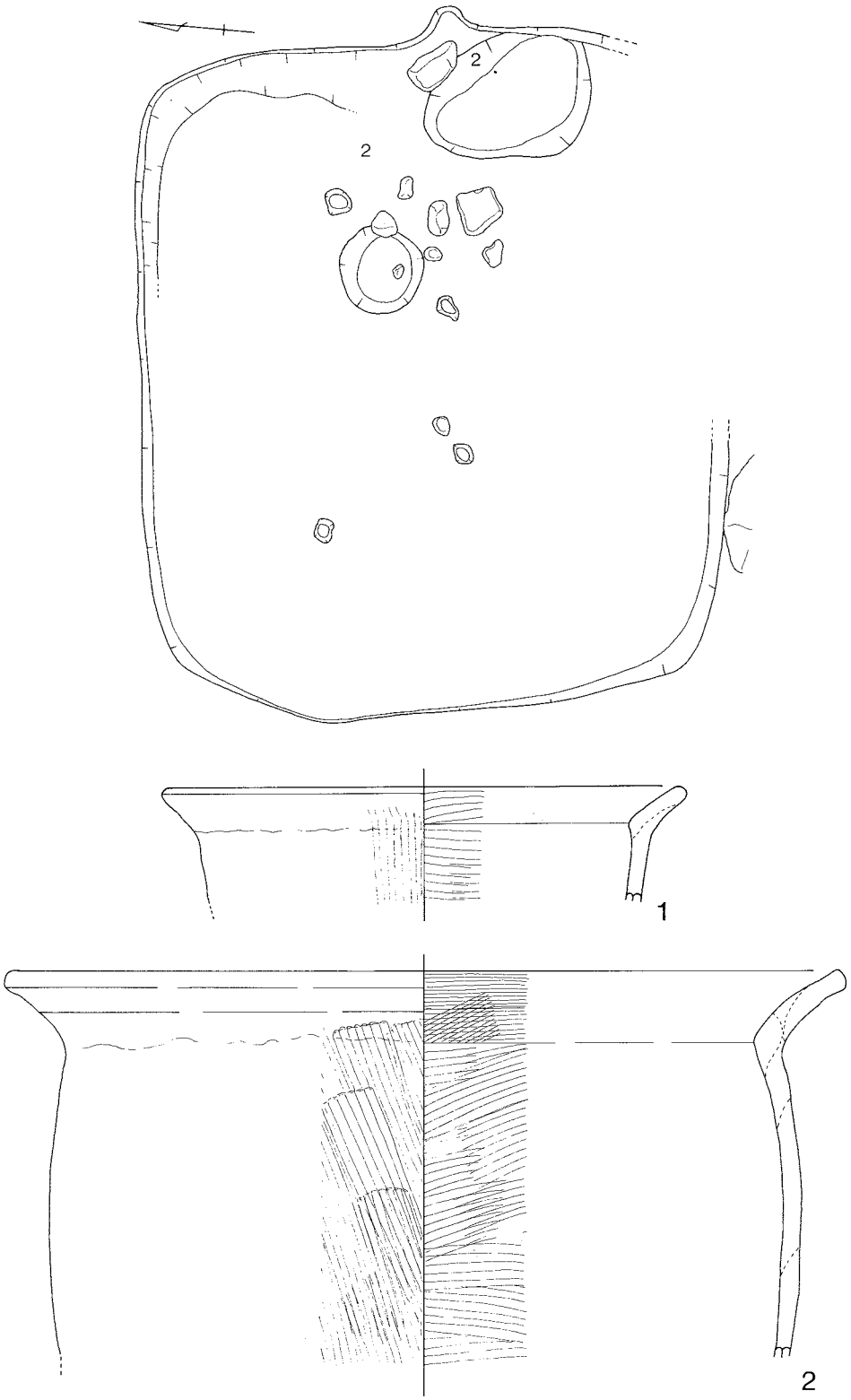
4号住居（第9図～第12図、写真4・5・12）

遺構の概要　4.9m×4.7mの方形の平面形をもつ。床面は住居中央で良好に検出され、異なる高さで3枚が検出された。周溝は検出されなかった。住居内には地山の礫が露出しており、南西隅は平面形が確認できなかった。

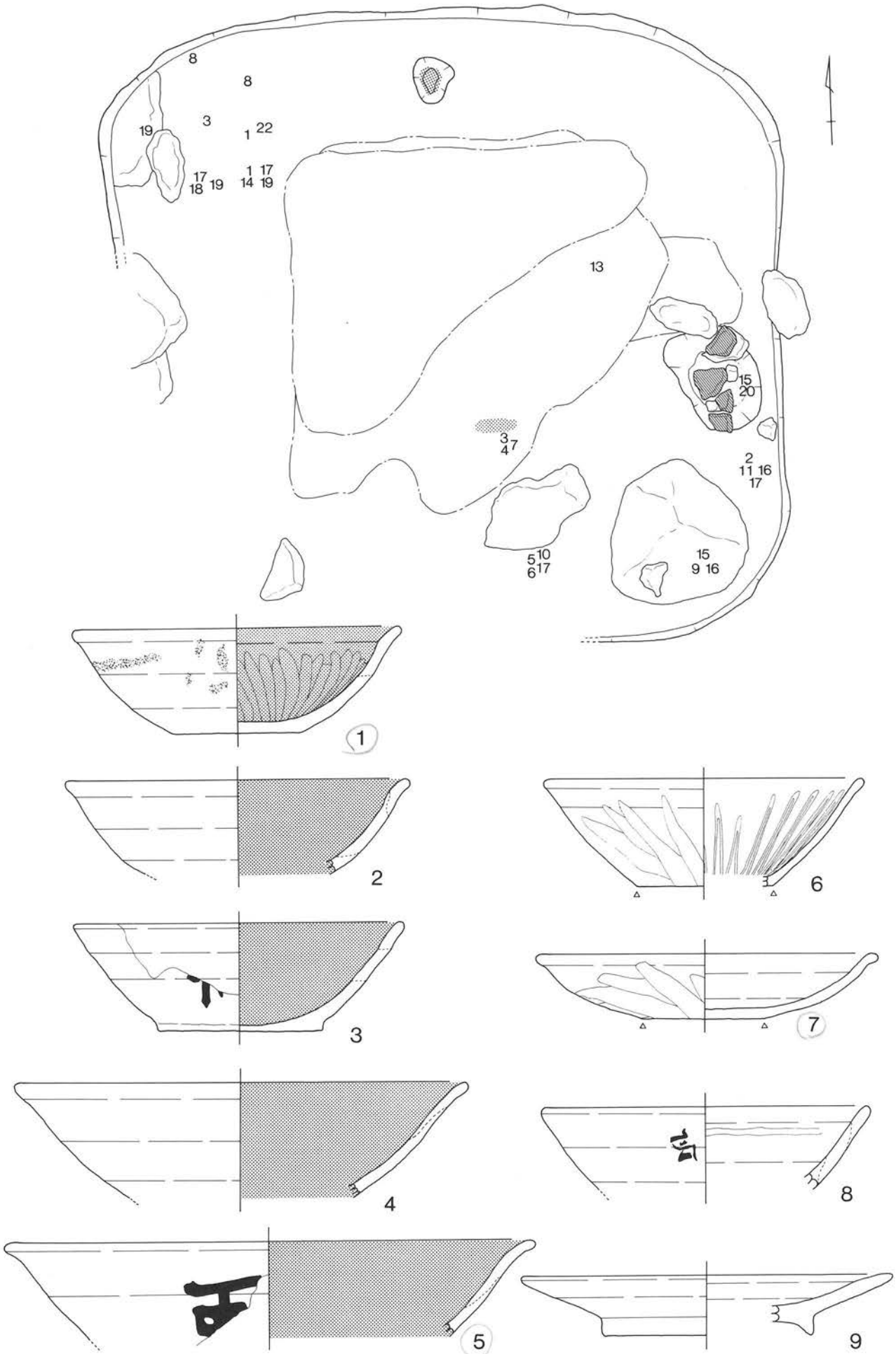
カマドの概要　東壁南寄りに焼土と赤変した礫、掘り込みが検出された。これが一番高い床面に伴うカマドと考えられる。さらに、北壁中央の2枚目の床面高上で小ピットと焼土が検出された。これは2枚目の床面に伴うカマドと推定される。

出土遺物　1は推定口径12.4cm、器高4cm、底径4.8cmの坏である。外面はナデ調整、内面は黒色処理され、みこみ部から口縁部にかけて放射状の磨き痕がある。胎土はC4類。2は推定口径13cm、胎土はC4類。3は12.5cmで、器高4.1cm、底径6.2cm、胎土はC3類。4は口径17.2cm、5は口径20cm。胎土はいずれもC4類。2から5はいずれも内外面ナデ調整、内面黒色処理される。4が4分の1個体分の比較的大きな器片である以外はいずれも小器片である。3、5、8には墨書がみられるが、読みは不明である。6は推定口径12cm、器高4cmの甲斐型坏で、5分の1個体分の小片である。外面はナデに下半部ヘラ削り調整、内面には放射状暗文が施される。底部はヘラ削り。胎土はA1類。7は甲斐型皿で推定口径12.9cm、器高2.5cm。ほぼ完形品で、外面はナデに下半部ヘラ削り調整、内面はナデ調整のみ。底部はヘラ削りされる。胎土はA1類。8は口径12.5cm、胎土はC3類。9は高台付皿で、推定口径14cm、器高2.3cm、底径7.8cm。胎土はE1類。床面高より出土しているが、他の遺物よりも若干時期が新しいと思われる。10はカキメ調整のロクロ整形小型甕で、推定口径12cm。胎土D3類。2枚目床面高より出土している。11もカキメ調整のロクロ整形小型甕で、推定口径17.6cm。小器片のみの出土であるが、口縁部から底部まで各部位の器片が揃っている。胎土はD3類。内外面ともロクロナデのみの調整である。12、13もカキメ調整によるロクロ整形小型甕で、口径はそれぞれ19.2cm、17.2cm。胎土は12がD2類、13がD3類。14はナデ調整のロクロ整形小型甕で、推定口径17.5cm。胎土はB3類。8号住居カマド出土の器片と接合している。15は推定口径28cmの甲斐型甕で、小器片ばかりがカマド周辺より出土している。胎土はB1類。16も推定口径26cmの甲斐型甕で、口縁が4分の1周するやや大きめの器片である。胎土はB1類。17は推定口径29.5cmの口縁3分の1周の器片で胎土はB1類、18と19は推定口径34cmと28cmの甲斐型甕で胎土はともにB1類。小器片ばかりが出土した。20、21は底部片のみの甲斐型甕で胎土はB1類。いずれも小器片である。22は須恵器壺片で、推定口径23.7cm。もっとも下の床面高で出土した。

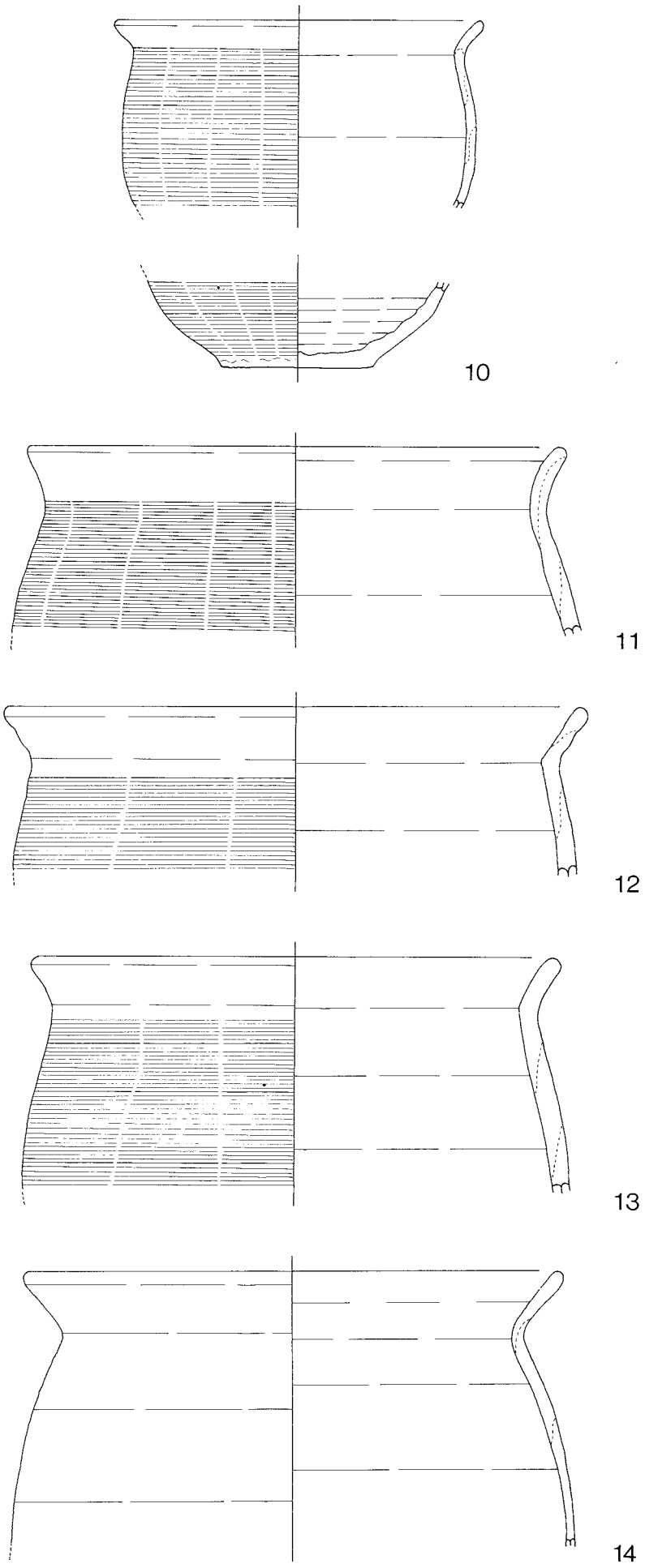
遺構の時期　もっとも高い１枚目の床面を生活面とする住居の時期は、甲斐型Ｘ～XI期、９世紀後半から10世紀前半と思われる。２枚目、３枚目の床面については、出土遺物が限られるため、時期の推定は難しい。



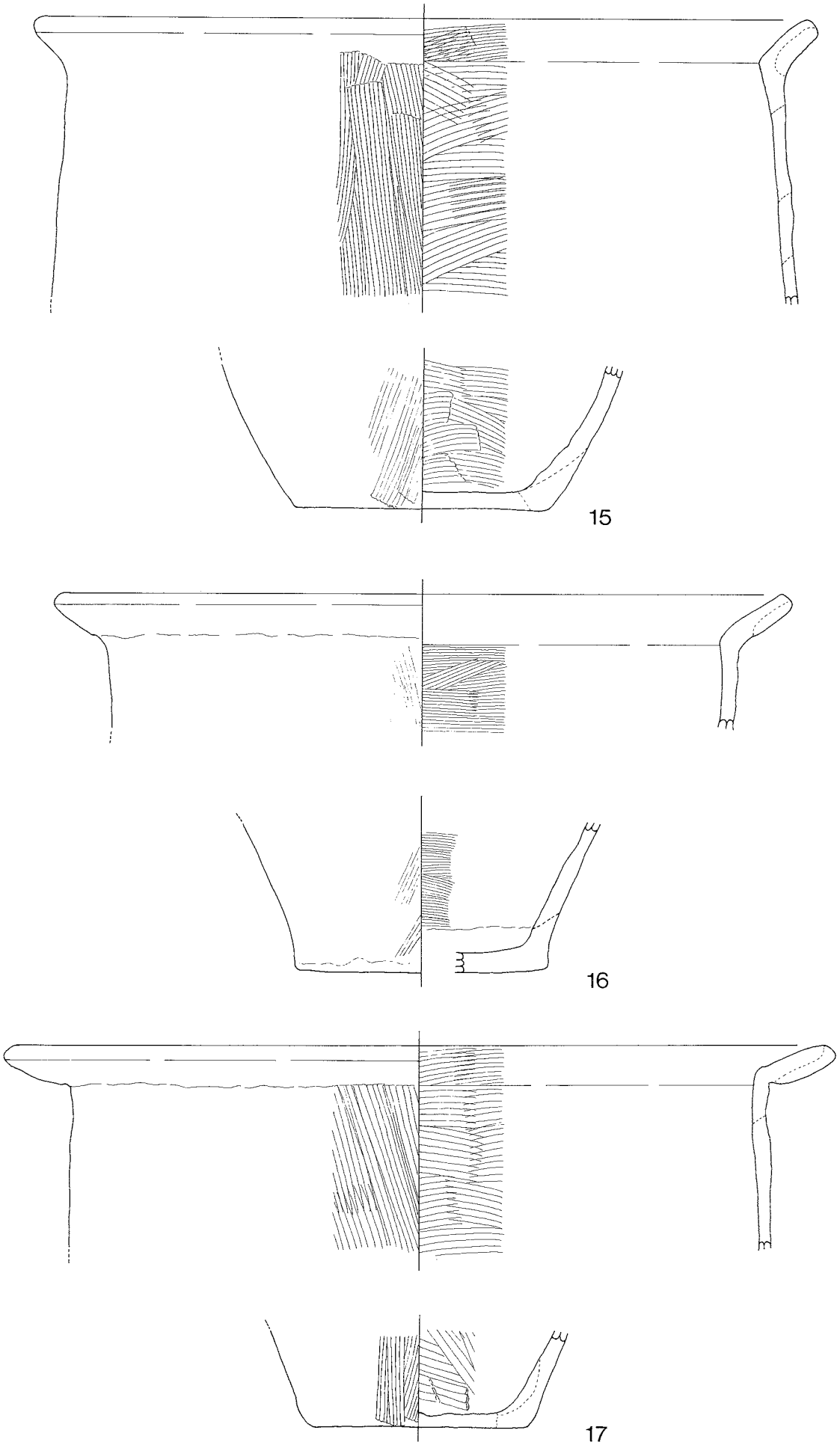
第８図　３号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



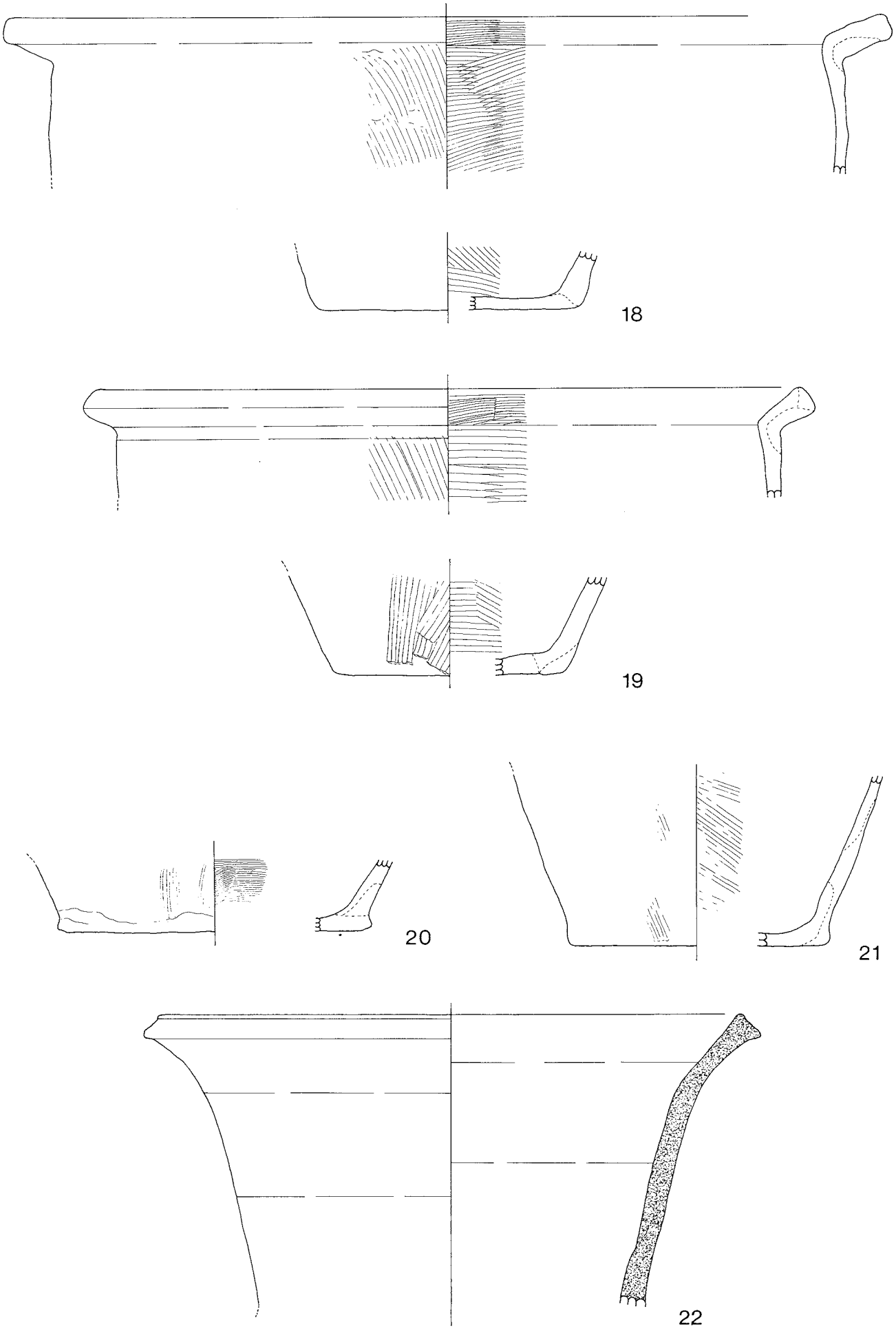
第９図　４号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第10図　4号住居跡出土遺物(1/2)



第11図　4号住居跡出土遺物(1/2)



第12図　4号住居跡出土遺物(1/2)

5号住居（第13図、写真5）

遺構の概要　推定3.1m×3.8mの方形の平面形をもつ住居跡で、西側には地山より露出する巨礫がある。床面は住居中央部で良好に検出されたが、周溝は検出されなかった。掘り込みは10cmほど残るのみである。7号住居に切られている。

カマドの概要　住居東南隅で赤変した礫と焼土が検出された。礫はカマドの原形をとどめておらず、重ねられるようにして検出された。礫はすべてが赤変しているわけではない。

出土遺物　1は推定口径17.6cmの坏小器片である。内面は黒色処理され、内外面ともナデ調整のみである。胎土はA5類。覆土より出土している。2は覆土より出土した推定口径12cmの土師質坏の小器片である。器壁はぼてっと厚手で、胎土はE2類。内外面ともナデ調整のみである。3は推定口径8cmの土師質坏の小器片で、覆土より出土している。内外面ともナデ調整のみ。胎土はE1類。4はほぼ完形の甲斐型皿で、住居中央部床面で逆さまになって出土した。口径は13.5cm、器高2.3cm。外面はナデ、下半部から底部は回転ヘラケズリされる。内面はナデ調整に渦巻き状の暗文がみられる。胎土はA1類。5は推定口径32cmの甲斐型甕の小器片で、カマドより出土している。胎土はB1類。6は甲斐型甕底部の小器片で、覆土より出土している。推定底径10cm。胎土はB1類。

遺構の時期　遺物は少ないが、4がもっとも信頼できる資料であり、甲斐型IX～X期、9世紀中頃から後半と思われる。

6号住居（第14図～第16図、写真6）

遺構の概要　5号住居を切る7号住居をさらに切るようにして検出されたが、地山が黒色土であるため、6号住居と7号住居との切り合い関係は7号住居内の焼土の分布状態から判断したものである。また、南壁は確認できなかった。周溝は検出されなかったが、固くしまった床面は点在している。住居内には小礫が散在しているが、赤変したものは2個しかみられなかった。

カマドの概要　東壁中央に掘り込みと赤変した礫、焼土が検出されたが、カマドは原形をとどめていない。

出土遺物　1はカマド内掘り込みより出土した甲斐型坏で、推定口径12.8cm、器高4.5cm。焼成が悪く胎土はA5類。外面下半と底部はヘラケズリされる。2はカマド右側より出土した甲斐型坏で、床面より20cmほど浮いた覆土内で出土した器片と、床面下で出土した器片が接合している。推定口径12cmの小器片で、口唇部はかなり肥厚している。外面下半はヘラケズリされている。胎土はA5類。3は甲斐型坏の5分の1個体分の器片で、推定口径12.5cm。胎土はA5類。4は推定口径15.5cm、器高4.7cmの甲斐型坏で、5分の1個体の器片である。焼成がやや悪く、胎土はA5類。外面下半と底部はヘラ削り、内面は黒色処理されているようであるが、真っ黒ではなく煤けた程度である。5は推定口径16cmの甲斐型坏で、6分の1個体の小器片である。口唇部はやや肥厚し、外面下半はヘラケズリされる。胎土はA1類。6は推定口径12cm、器高2.9cmの甲斐型皿で、2分の1個体の器片である。焼成が悪く、胎土はA5類。7は推定口径13.4cmの皿で、内面が黒色処理される。胎土はC4類。8も内面が黒色処理される坏小器片で、推定口径は13.6cm。胎土はC5類。9は推定口径13.4cmの小器片で、内面黒色処理される。胎土はC5類。10は推定口径15.8cmの坏小器片で、内面は黒色処理されている。胎土はC4類。11は内面を黒色処理した甲斐型坏で、推定口径15cmの小器片である。外面下半がヘラケズリされる。胎土はA5類。12は底部3分の1個体の器片で、内面が黒色処理される。外面下半と底部がヘラケズリされる。胎土はA1類。13は推定

口径16cm、器高5.5cm、底径6.2cmの坏で、４分の１個体分の器片である。内外面ともナデ調整され、底部は回転糸切り痕が残る。胎土はＣ１類。14は推定口径20cm、器高6.8cm、底径10cmの灰釉椀で、カマドより出土している。釉薬は漬け掛けされる。15も灰釉椀で、推定底径9.2cm。14と整形技法、胎土質がよく似ている。16は甲斐型小型甕の口縁部小器片である。胎土はＢ１類。17、18は須恵器甕小片である。19は甲斐型甕の小器片で、カマド右側覆土より出土した。胎土はＢ１類。20は甲斐型甕小器片で推定口径34cm。内面はナデ調整のみ。胎土はＢ１類。21は住居南東隅の覆土より出土した甲斐型甕の小器片で、推定口径33cm。胎土はＢ１類。22はカマドより出土した甲斐型甕で口縁部が３分の１周する器片である。推定口径29.6cm。胎土はＢ１類。23はカマドより出土した推定口径30cmの甲斐型甕小器片である。外面にはハケメがなく、縦方向のナデ調整のみらしい。胎土はＢ３類だが雲母粒子を含む。24はカマドより出土した甲斐型甕小器片で、推定口径30cm。胎土はＢ１類。25は推定口径28cmの甲斐型甕小器片で、口縁は肥厚している。胎土はＢ１類。20と25は両者とも底部がカマド内で出土し、体部が住居南壁沿いの覆土中より出土している。

遺構の時期　甲斐型XI～XII期の遺物が目立つことから、９世紀後半から10世紀前半と思われる。

７号住居（第17図、写真７）

遺構の概要　６号住居に切られる。５号住居の床面を切るように検出されたが、地山は黒色土であるため確認面で明確に切り合い関係が判定できたわけではない。７号住居のカマドは焼土を残して全く原形をとどめていないため、５号住居が７号住居を切っている可能性もある。

カマドの概要　東壁南寄りに焼土が検出された。この焼土の下から敷石を施した焚き口が検出された。

出土遺物　１はカマド左側の床上10cm高で出土した坏で、推定口径17cm。内面は黒色処理される。胎土はＡ５類。２はカマド手前の床面で出土した坏で、推定口径17.3cm。内面は黒色処理され、内外面ともナデ調整のみである。胎土はＣ４類。３は推定口径13cm、器高2.8cmの甲斐型皿で、カマドと東壁のあいだで出土した。外面下半から底部にかけてヘラケズリされる。内面の体部屈曲は比較的明瞭である。墨書があるが、読みは不明。胎土はＡ１類。４はカマド焼土内より出土した甲斐型甕である。胎土はＢ１類。５は２と同じ位置で出土したロクロ整形小型甕で、推定口径14.5cm。胎土でＢ３類。６は１とほぼ同じ位置で出土したロクロ整形甕の底部片で、底部は回転糸切り未調整。胎土はＢ３類。７はカマドと東壁のあいだで出土した甲斐型甕小器片である。胎土はＢ１類。

遺構の時期　甲斐型土師器は甲斐型Ｘ期、９世紀後半頃と思われる。

８号住居（第18図、写真７）

遺構の概要　削平のため、東側３分の１だけが検出された。固くしまった床面がカマド北側で検出された。周溝は検出されなかった。住居内のピットはいずれも後世のものと思われる。中世の遺物が出土し、住居内には赤変した礫が散在するため、中世の遺構が切っている可能性もあるが、そのような遺構は削平のためか検出されなかった。

カマドの概要　東壁南よりに焼土と赤変した礫が検出された。

出土遺物　１は推定口径28cmの甲斐型甕で、口縁部３分の１周の器片である。カマドより出土している。胎土はＢ１類。

遺構の時期　出土遺物が限られるため、時期の推定は困難であるが、１の甲斐型甕は甲斐型XI期頃と思われる。また、カマドより出土したロクロ整形小型甕の小器片が４号住居床面出土の小器片と接合していることから、９世紀後半から10世紀前半頃と考えておく。

９号住居（第19図、写真８・９・12）

遺構の概要　3.7m×3.7mの方形の平面形で、本遺跡中では掘り込みが比較的良好に検出された。固くしまった床面は残っていない。周溝が北壁側で検出された。住居内には小礫が散在しているが、赤変したものは見あたらない。

カマドの概要　東壁南寄りで掘り込みと焼土、赤変した礫が検出された。

出土遺物　２はカマド側で出土した甲斐型坏底部片で、体部下半から底部がヘラケズリされている。胎土はＡ３類。３は推定口径13cmの甲斐型坏小器片で、「国」の墨書がある。覆土より出土している。胎土はＡ１類。４は推定口径13cmの甲斐型皿の小器片で、口唇部が肥厚する。覆土より出土している。胎土はＡ４類。５は覆土より出土した甲斐型と思われる坏で、５分の１個体分の器片である。推定口径は15.2cm、内面が黒色処理される。口縁部の外反具合は若干甲斐型坏とは感じが違うように思われ、胎土もＡ１類だが色調は暗黄褐色でやや異質である。６はカマド左側床面高で出土したロクロ整形小型甕の４分の１個体分の器片で、推定口径17cm。胎土はＤ２類。７もカマドより出土したロクロ整形小型甕片で、胎土はＤ２類。８はカマド左側で出土した推定口径34cmの甲斐型甕小器片である。胎土はＢ１類。以上の遺物の他に８号住居で出土した内耳土器と同一個体と思われる内耳土器片が覆土で出土している。

遺構の時期　限られた遺物から推測すると９世紀末から10世紀中頃と思われる。

10号住居（第20図、写真８・９・12）

遺構の概要　東西10mの住居で、削平のため北側２分の１だけが検出された。11号住居を切る。中央部で固くしまった床面が検出された。周溝は検出されなかった。焼土と炭が散在しているが、被災住居を思わせるほどの量は検出されていない。

カマドの概要　住居北東隅で焼土と炭、礫が検出された。この位置にカマドが検出される例は本遺跡中、10号住居だけである。

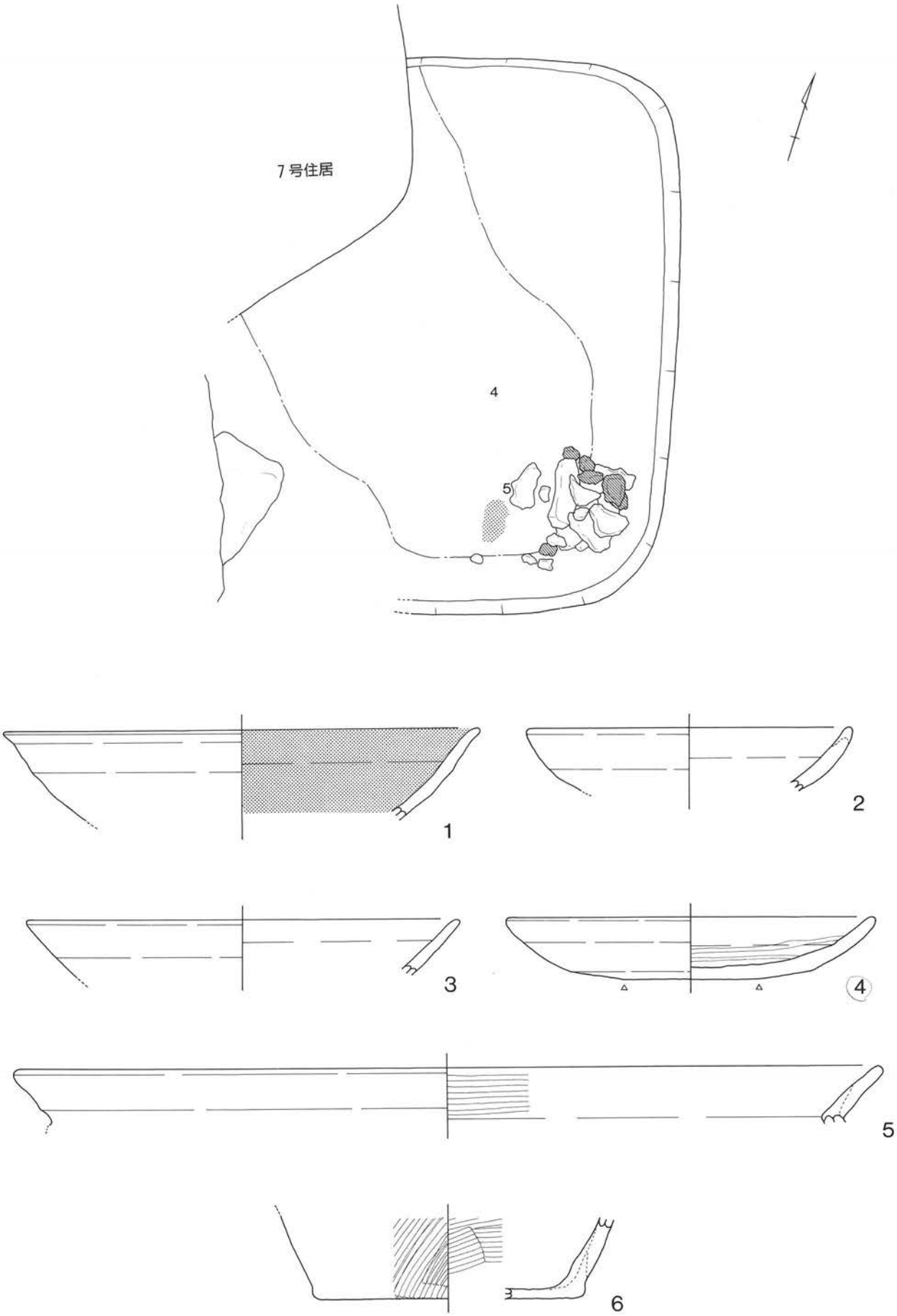
出土遺物　１はカマドより出土した土師質皿で３分の２個体の器片である。推定口径8.2cm、器高1.8cm、底径4.4cm。胎土はＥ１類。２は覆土より出土した甲斐型小型甕の小器片で、推定口径19cm。胎土はＢ１類。３はカマドより出土した推定口径29cmの甲斐型甕小器片である。胎土はＢ１類。

遺構の時期　覆土より出土している遺物は甲斐型VIII～Ｘ期頃と思われる小器片が多いが、１とカマドの特異な位置から平安時代末から中世初頭と考えたい。

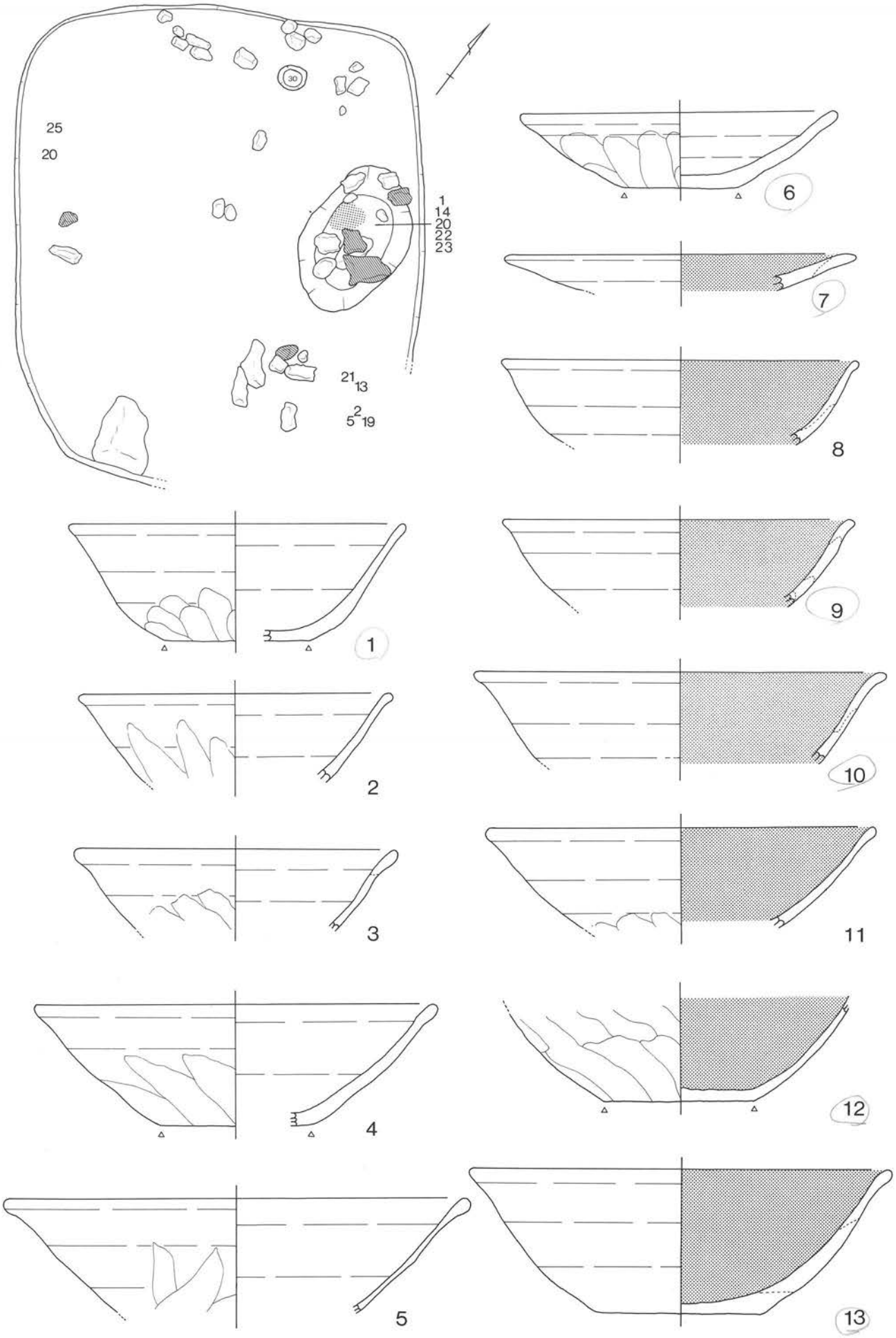
11号住居（第21図、第22図、写真９）

遺構の概要　東西3.7mのやや小型の住居で、11号住居に切られるが、南壁は明瞭に検出できなかった。北壁沿いには周溝が検出された。床面は全面に良好に残る。焼土と炭が散在するが床面より10cmほど浮いている。

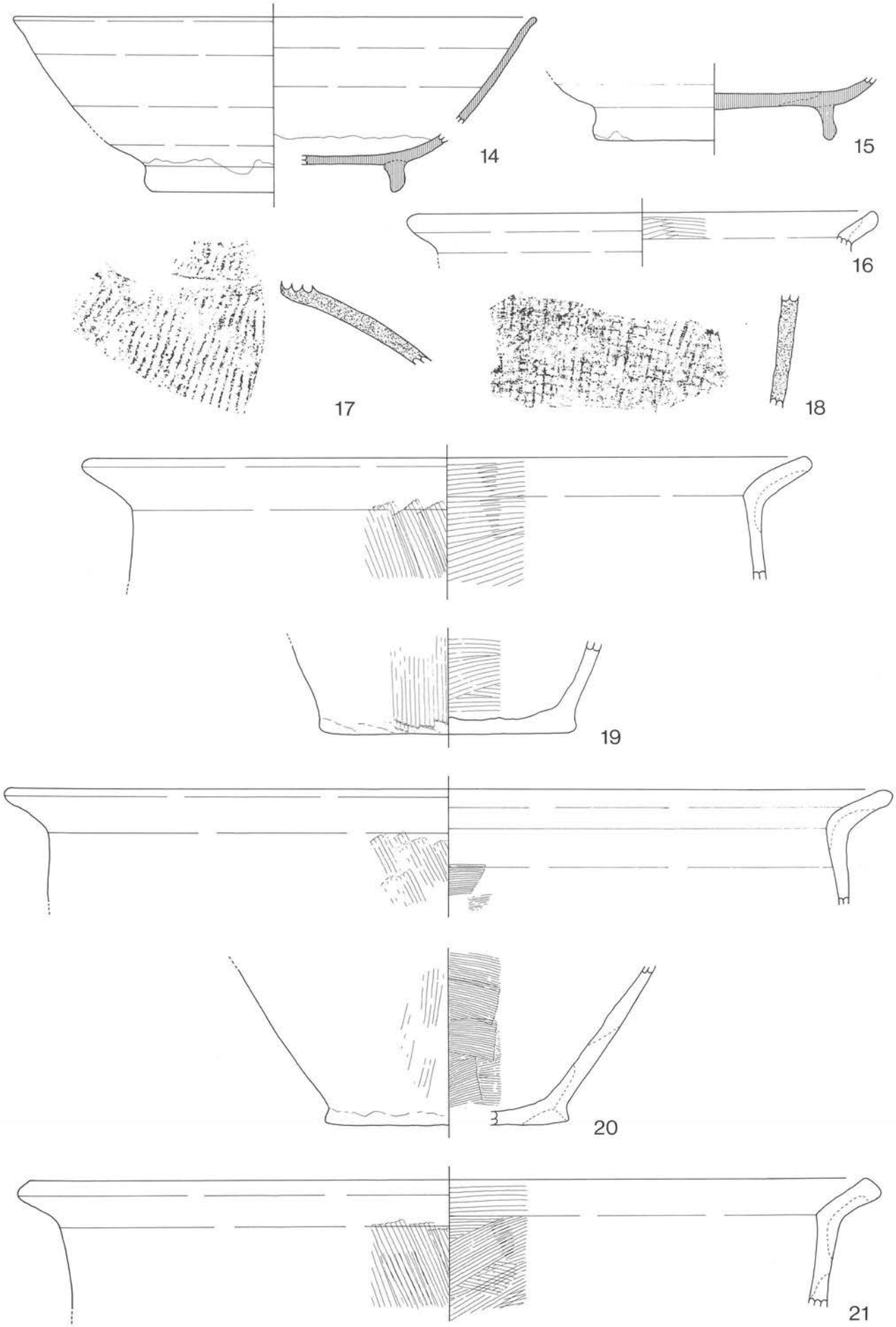
カマドの概要　東壁南寄りで焼土と礫が検出されたが、カマドは原形をとどめていない。礫は被熱した痕跡がみられないが偏平で長方形のものが多い。



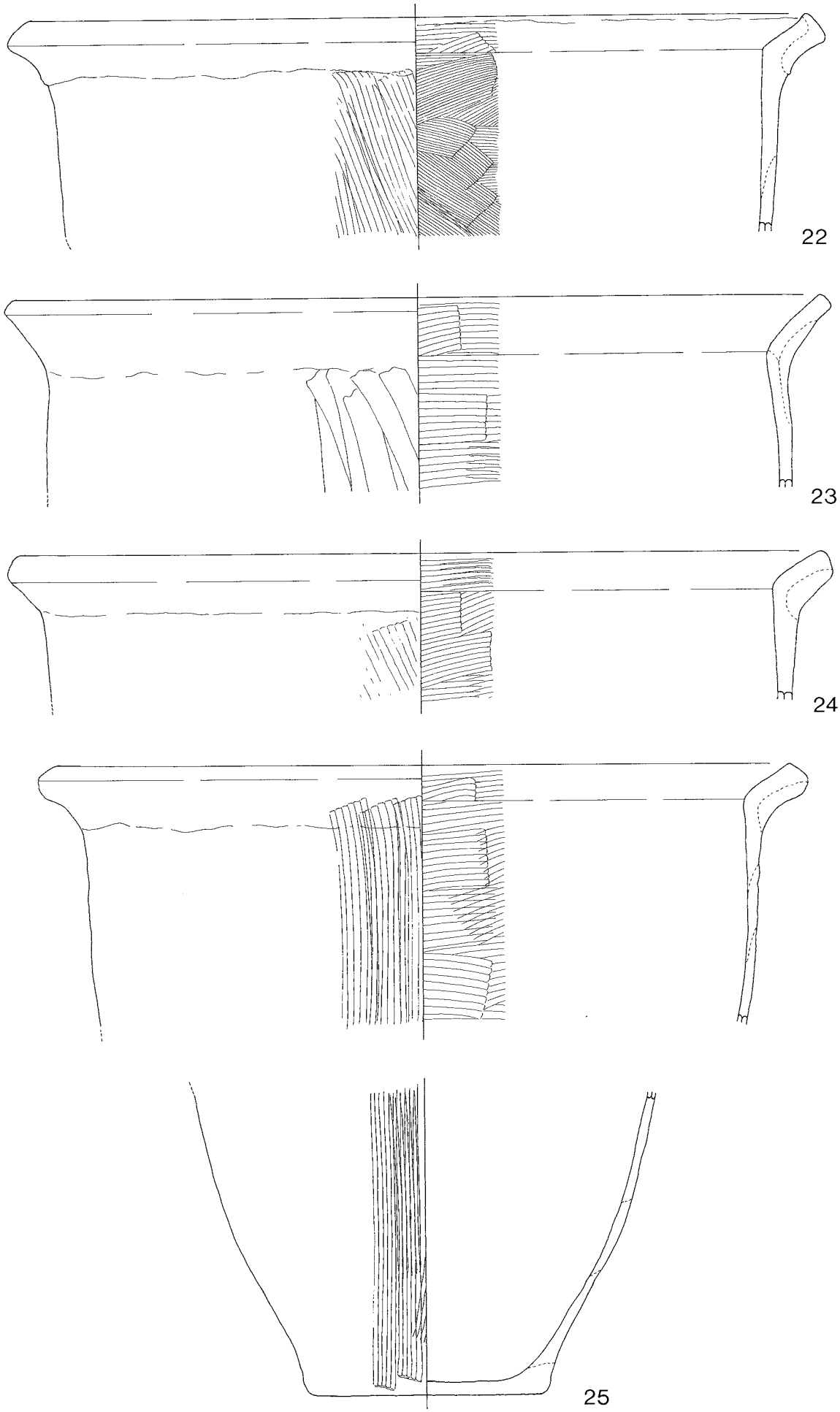
第13図　5号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



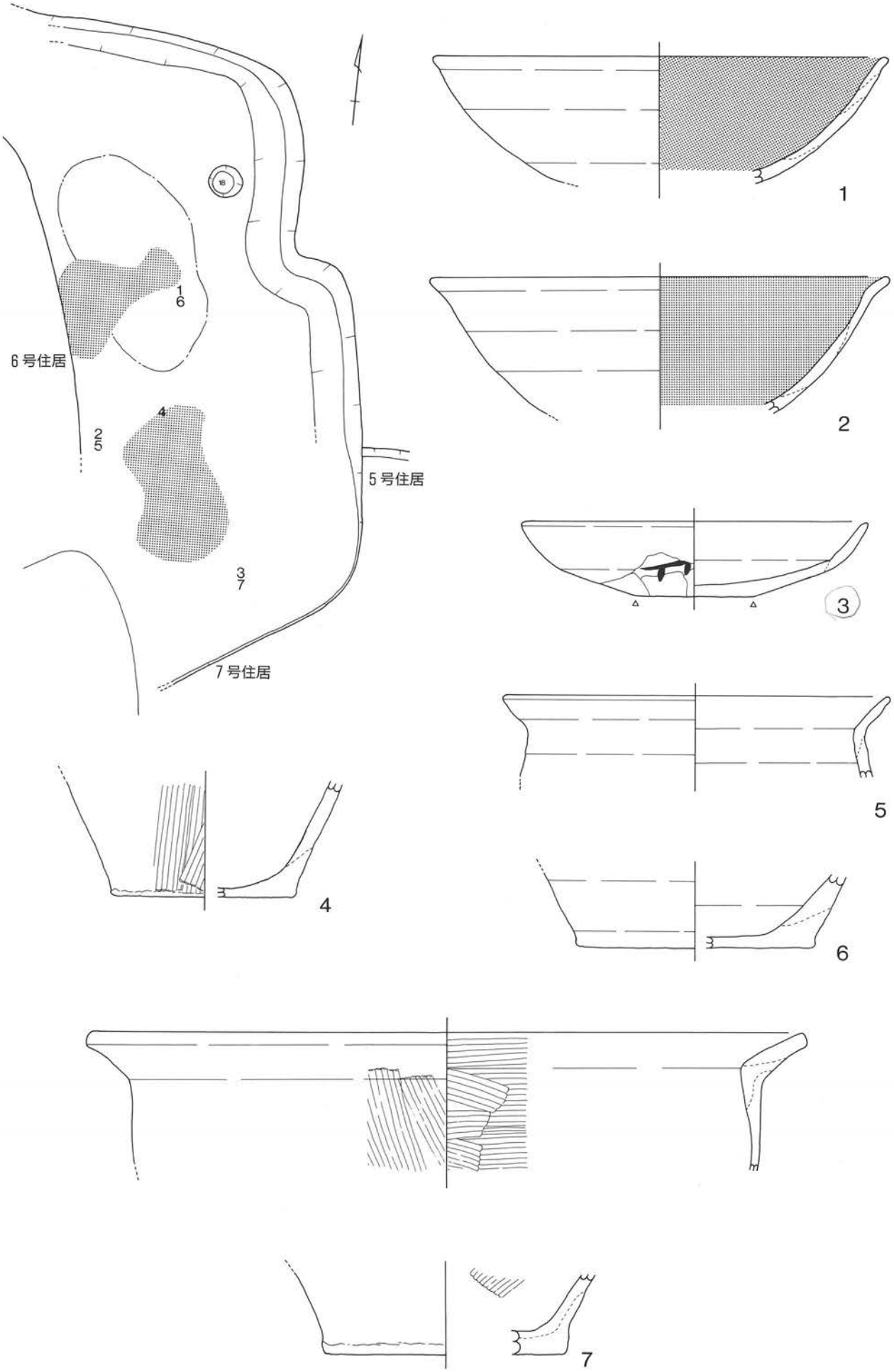
第14図　6号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



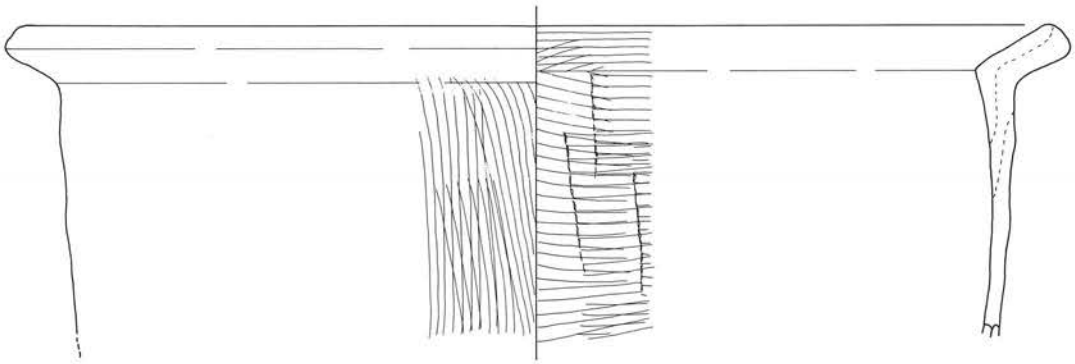
第15図　6号住居跡出土遺物(1/2)

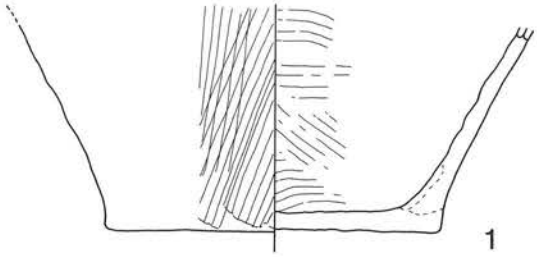


第16図　6号住居跡出土遺物(1/2)

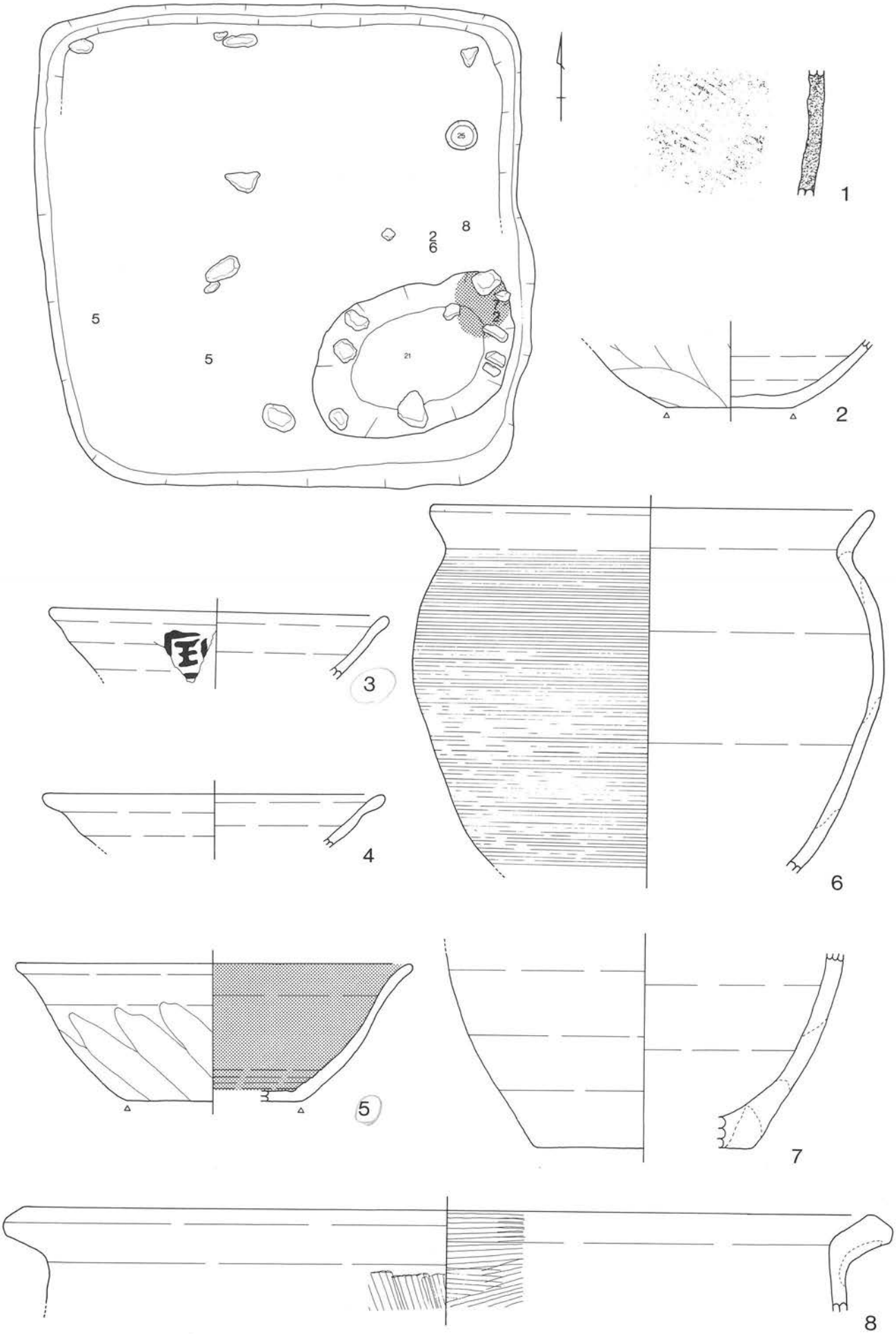


第17図　7号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)

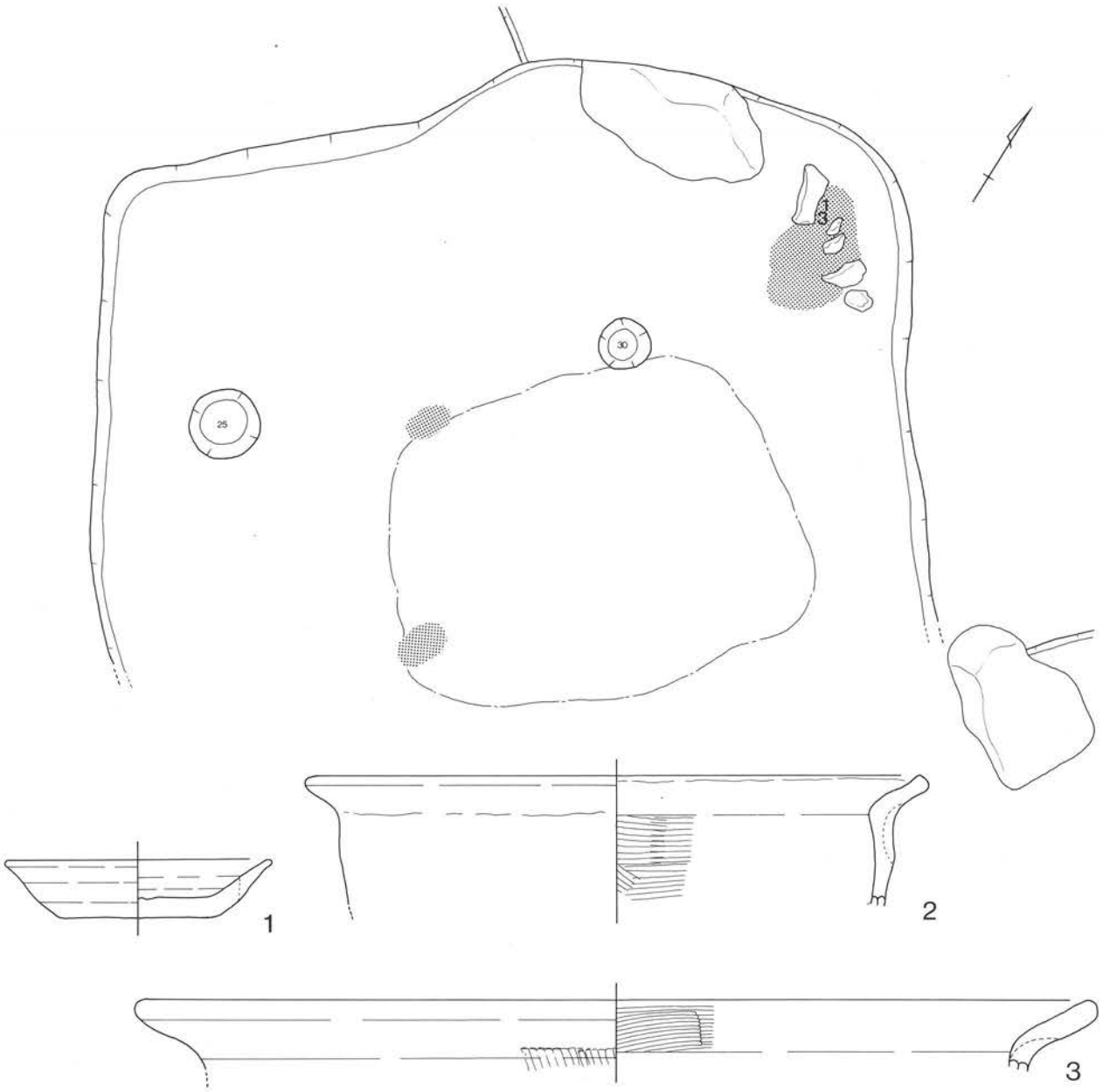




第18図　8号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第19図　9号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第20図　10号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)

出土遺物　1はカマド内焼土より出土した推定口径14.8cmの甲斐型坏の小器片で、外面下半はヘラケズリされる。胎土はＡ１類。２もカマドより出土した甲斐型皿の小器片で、推定口径14.8cm。外面下半はヘラケズリされる。口唇部は肥厚している。胎土はＡ１類。３は東壁沿いで出土した完形の坏で、口径12.7cm、器高4.2cm、底径5.5cm。内面は黒色処理され、底部は回転糸切り未調整。胎土はＣ５類。４も３と同位置で出土した坏で、口径12.6cm、器高4.5cm、底径５cm。整形技法は３と同様で、内面は黒色処理される。みこみ部から口縁にかけて放射状の縦方向の磨き痕がみられる。胎土はＣ２類。５はロクロ整形小型甕で出土位置は不明。推定口径17cmの小器片である。胎土はＤ３類。６はカマド焼土内より出土した甲斐型小型甕の小器片で、推定口径18cm。胎土はＢ１類。７はカマド手前の焼土より出土した推定口径34cmの甲斐型甕の小器片である。胎土はＢ３類だが色調は乳灰色。８は推定口径35cmの甲斐型甕の小器片である。胎土はＢ３類だが乳灰色。

遺構の時期　出土遺物は甲斐型XI期が多いことから９世紀末から10世紀前半と思われる。

12号住居（第23図、第24図、写真10・12）

遺構の概要　南側は後世の暗渠により破壊されている。また、西側は10号住居と接し、おそらく切られていると思われる。東壁沿いに僅かに周溝が検出された。北壁側には20cmほど高くなった棚状の面があるが、住居に直接属する施設なのか、それとも古い住居なのか判定できなかった。カマド手前の土坑は検出面上にカマドの焼土が散在しており、住居よりも以前のものである。固くしまった床面がカマド周辺で若干残っていた。

カマドの概要　東壁南寄りに浅い掘り込みと焼土が検出された。

出土遺物　１はカマドより出土した甲斐型坏の小器片で、推定口径16.2cm。内面には放射状の暗文がみられる。胎土はＡ１類。２は甲斐型坏の小器片で、読み不明の墨書がみられる。胎土はＡ１類。出土位置不明。３はカマドより出土した甲斐型小型甕で、推定口径16.6cm。口縁が３分の１周する器片である。胎土はＢ１類。４はカマドで出土した甲斐型甕の底部片で底径は9.2cm。胎土はＢ１類。

遺構の時期　限られた小器片をもとに推定すれば甲斐型Ｘ期前後、９世紀後半から10世紀前半と考えられる。

13号住居（第25図、写真10）

遺構の概要　住居中央を後世の暗渠により破壊され、南側を14号住居に切られる。東西６ｍのやや大型の方形の平面形をもつ住居で、固くしまった床面が全面で検出された。周溝がほぼ全周で検出された。炭と焼土が散在するが被災住居と判断するほどの量ではない。

カマドの概要　東壁南東隅に炭と焼土、礫が検出された。

出土遺物　１は住居内西側の小ピットより出土したロクロ整形甕小器片で、胎土はＥ１類。底部は回転糸切り未調整である。胎土質より考えると信州系のいわゆるロクロ整形甕ではなく、平安時代末から中世の土師質甕と思われる。

遺構の時期　出土遺物がごく少量のため、推定は難しい。１の胎土質よりすれば、平安時代末から中世と思われるが、住居構造から平安時代末、11世紀代としておきたい。

14号住居（第25図、写真11・12）

遺構の概要　北壁一部が遺構のように見えたが、地山が黒色土であるため確実に住居とは断定しきれない。13号住居を切る。周溝、床面は全く検出されなかった。縄文時代中期初頭、五領ヶ台式の深鉢が埋設されていた。

カマドの概要　東壁沿いに赤変した礫が一個出土しただけで、カマドらしい遺構は全く検出されなかった。

出土遺物　２は13号住居との境で出土した土師質小皿で、ほぼ完形である。口径は９cm、器高2.2cm、底径4.5cm。胎土はＥ１類。底部は回転糸切り未調整。

遺構の時期　14号住居が住居ではないとすれば、２は13号住居に属する遺物であろう。２は平安時代末、11世紀代と考えておく。

15号住居、竪穴状遺構（第26図、写真11・12）

遺構の概要　6.4m×5.6mのやや大型の住居で、西壁は住居状の竪穴遺構と削平のため、明瞭に検出されなか

った。床面は中央部で良好に残り、北壁沿いで周溝が検出された。住居中央の周溝状の溝と小ピットは本住居に属するものか判定できなかった。竪穴状遺構では炭、焼土、被熱した礫が検出されたが遺物は出土しなかった。

カマドの概要　南東隅に焼土が検出されたのみで、ほかにカマドらしい施設は検出されなかった。

出土遺物　１は土師質皿小器片で、胎土はＥ１類。２は推定口径14cmの灰釉椀の小器片で、カマドより出土している。釉薬は内面にだけ施され外面には施釉されていない。３はほぼ完形の土師質皿で、カマド焼土上で出土した。口径は14.8cm、器高4.6cm、底径5.8cm。胎土はＥ１類。５は３と同様の胎土質の土師質高台付皿もしくは坏の小器片である。４は灰釉椀で覆土より出土している。推定口径14cmで６の同一個体と考えられる底部片が住居内小ピットより出土している。

遺構の時期　土師質土器より推測すると平安時代末、10世紀末～11世紀後半と考えられよう。

16号住居（第27図）

遺構の概要　東西４ｍの方形の住居で、北半分は水路と石垣により破壊されている。床面は中央部で良好に残るが、周溝は検出されなかった。

カマドの概要　南東隅に焼土と礫が検出された。

出土遺物　１は住居西壁沿いで出土した灰釉椀で推定口径17.4cm、器高4.7cm、推定底径8.5cm。施釉は内面のみで外面にはまったく施釉されない。

遺構の時期　灰釉１点で判断すると平安時代末、11世紀前半と思われる。

17号住居（第28図、写真12）

遺構の概要　南北5.3mのややいびつな方形の住居で、西半は石垣と道路により破壊されている。床面は中央部で良好に残るが、周溝は検出されなかった。

カマドの概要　南東隅に焼土が検出された。

出土遺物　１は土師質小皿の２分の１個体片で、推定口径8.1cm、器高1.9cm、底径4.3cm。カマド手前の小ピット肩より出土している。胎土はＥ２類。２は土師質小皿で、カマド左側より出土。ほぼ完形である。口径は8.3cm、器高1.9cm、底径４cm。胎土はＥ１類。３も土師質小皿で口径8.2cm、器高２cm、底径3.8cm。住居中央床面上より出土している。胎土はＥ１類。５はほぼ完形の柱状高台付皿で、口径14.8cm、器高4.8cm、底径６cm。底部は回転糸切り未調整。胎土はＥ１類。４は土師質の鉢で底径9.6cm。胎土はＥ１類。

遺構の時期　11世紀後半～12世紀前半と思われる。

18号住居（第29図、写真12）

遺構の概要　南東隅だけが検出された。北半は後世の暗渠により破壊され、西半は道路と石垣により破壊されている。床面が南半で良好に残るが、周溝は検出されなかった。

カマドの概要　南東隅で焼土と掘り込み、赤変した礫が検出された。

出土遺物　１は坏の底部小器片で、住居内の小ピットより出土した。胎土はＣ１類。

遺構の時期　出土遺物はわずか１点のみで推測のしようもないが、カマドの位置を他の住居と比較して平安時代末と考えておく。

19号住居（第29図、写真12）

遺構の概要　方形の平面形が何となく見えたのだが、カマドらしい施設も床面も周溝も検出されず、住居であるかどうか判断できない。中央部に焼土が僅かに検出された。４号住居との切り合い関係も不明である。

カマドの概要　住居中央の焼土を除けば、カマドらしい施設は全く検出されなかった。

出土遺物　２は軟質須恵器坏で、推定口径13cm、器高3.6cm、底径５cm。「生」の墨書がある。３は軟質須恵器坏で、推定口径12cm、器高3.4cm、推定底径4.8cm。４は軟質須恵器坏で、推定口径12cm、推定器高3.5cm、推定底径4.8cm。底部は回転糸切り未調整。５は土師質坏の小器片で、推定口径は15.4cm。胎土はＥ１類。

遺構の時期　須恵器坏より推測すると９世紀後半頃と思われる。

20～22号住居（第29図、写真12・16）

遺構の概要　削平のため北壁の一部と周溝のみが検出された。さらに西側には礫を並べた溝状の遺構と固くしまった床面状のものが検出されたが、どのような性格の遺構か不明。

カマドの概要　20号住居では東壁中央と思われる位置で焼土が検出された。

出土遺物　６は20号住居で出土した甲斐型小型甕の小器片で、推定口径18.6cm。胎土はＢ１類。７は21号住居より出土した砥石片である。

遺構の時期　平安時代としかわからない。

村之内川・１号住居（第30図、第31図、写真13・14）

遺構の概要　3.9m×3.6mの小型の住居で、羽口、鉄滓等が出土したことから鍛冶遺構と推定される。床面と周溝が良好に検出され、住居東南隅のカマド右側に焼土と炭が集中する箇所が見られた。住居中央には浅い掘り込みが検出されたが、掘り込み内に焼土、炭は検出されなかった。また、住居南東炭の焼土たまりと中央の掘り込みのあいだに、炭と若干の焼土がたまった小ピットが検出された。金床石らしき礫はなかった。出土遺物中に、他の住居ではよく出土する甕器片がほとんどみられなかった。このことからは、この遺構が通常の住居として使用された住居ではない可能性が示唆される。

カマドの概要　東壁南寄りに礫、焼土、掘り込みが検出された。カマドの礫は住居中央側になぎ倒されるように重なっており、原形をとどめていない。鍛冶作業のためのカマドなのか通常の使用に供されたカマドなのかは判断できなかったが、他の住居のカマドと比較して特に焼土の量が多いとか火床の被熱が著しいということはなかったが、礫の被熱具合はやや強いように思える。

出土遺物　灯明皿として使用されたと思われる皿が北東隅でまとまって出土している。１は完形の土師質皿で、口径12cm、器高2.4cm。底部は回転糸切り未調整である。口縁部内外面に煤が付着する。胎土はＡ４類。２は土師質坏の３分の２個体片で、推定口径12.5cm、器高3.5cm、底径５cm。底部は回転糸切り未調整。胎土はＡ４類。口縁部内外面に煤が付着する。３は土師質坏の完形品で、口径12.1cm、器高４cm、底径5.9cm。底部は回転糸切り未調整。口縁部内外面に煤が付着する。胎土はＡ１類。４は土師質坏で、カマドより出土している。推定口径12.8cm、器高3.8cm、底径5.1cmの３分の２個体分の器片である。みこみ部には凹凸のはっきりしたナデ痕が残されている。胎土はＡ４類。５はカマドより出土した推定口径12.7cm、器高3.9cm、底径5.2cmの土師器坏で、３分の

1個体分の器片である。みこみ部に渦巻き状の凹凸のはっきりしたナデ痕が残る。胎土はA4類。6は完形の甲斐型皿で、口径12.3cm、器高3cm。「大」の墨書がみられる。内外面上半には煤が付着している。底部は回転糸切り後、外周をヘラケズリされる。胎土はA1類。7は推定口径12cmの土師質坏の小器片である。胎土はA4類。8は土師質坏の3分の1個体器片で、推定口径12.5cm、器高3.4cm、底径5cm。底部は磨滅しているが、おそらく回転糸切り未調整のままと思われる。胎土はA5類。9は推定口径12cmの土師質坏の小器片で外面に鉄滓がこびりついている。胎土はA4類。10は4分の1個体分の土師質坏で、推定口径14cm、器高4.1cm、底径4.6cm。胎土はA1だが色調は暗黄褐色でやや異質。11は推定口径13.5cmの土師質坏の小器片である。胎土はA4類。12は4分の1個体分の土師質坏片で、推定口径14cm、器高4.7cm、底径6.5cm。底部は回転糸切り未調整。胎土はA5類。13は推定口径14.4cmの土師質坏の小器片である。胎土はA4類。14は推定口径17cmの土師質坏の小器片で、墨書がみられるが読みは不明。胎土はA4類。15は内面を黒色処理した土師質坏で、3分の1個体分の器片である。推定口径15.8cm、器高5.1cm、底径7.5cm。底部は回転糸切り未調整。胎土はA4類。16は土師質坏底部片で「大」の墨書がある。胎土はA1類だが色調は暗褐色でやや異質。17は土師質の坏もしくは皿と思われる底部で、墨書があるが、読みは不明。底部はヘラケズリされる。胎土はA1類。18は坏小器片で、覆土より出土している。推定口径14.9cm。胎土はD1類。19は覆土より出土した灰釉椀で、推定口径15cmの小器片である。20も覆土より出土した灰釉椀で推定口径14.4cm。21は羽口の破片で、植物質繊維はあまり混入せず、キメも細かく揃った胎土質である。鉄滓が付着する。22は羽口片で、最大径が7.4cm、内径は1.6cm。羽口の先端は被熱して灰色に変色し、鉄滓が付着する。胎土には植物質繊維が混ぜ込まれている。

遺構の時期　数多く出土した土師質坏と皿、甲斐型の範疇でとらえられそうな土師質の皿、坏が混じることから、10世紀中葉～末葉と考えられる。

村之内III2号住居（第32図、写真15）

遺構の概要　南北4.1mの方形の住居で西半は削平されて残っていない。周溝と床面が一部で検出された。

カマドの概要　東壁南寄りに焼土と掘り込み、礫が検出された。

出土遺物　1はカマドより出土した土師質坏の4分の1個体分器片で、推定口径13cm。胎土はA4類。2は甲斐型坏の4分の1個体分器片で、推定口径14cm、器高4.5cm。外面下半から底部がヘラケズリされる。内面には暗文がみられる。胎土はA1類。3はカマドより出土した土師質小型甕で、推定口径13.5cmの2分の1個体器片である。外面は縦方向のナデ、もしくは磨滅したハケメ調整、内面はハケメ調整されるがほとんど触れる程度で整形の用を足していないと思われる。胎土はE2類。4は口径23.3cm、器高34.7cm、底径11cmの土師質甕で、内面は手で押さえて整形するだけである。同一個体の底部片が1号住居覆土より出土している。胎土はC3類。

遺構の時期　出土遺物と、カマド出土の甕が1号住居覆土出土遺物と接合することから、10世紀中葉～末葉、1号住居とさほど変わらない時期と考えておきたい。

第５章　その他の時期の遺構と遺物

溝状遺構（第33図、写真15・16）

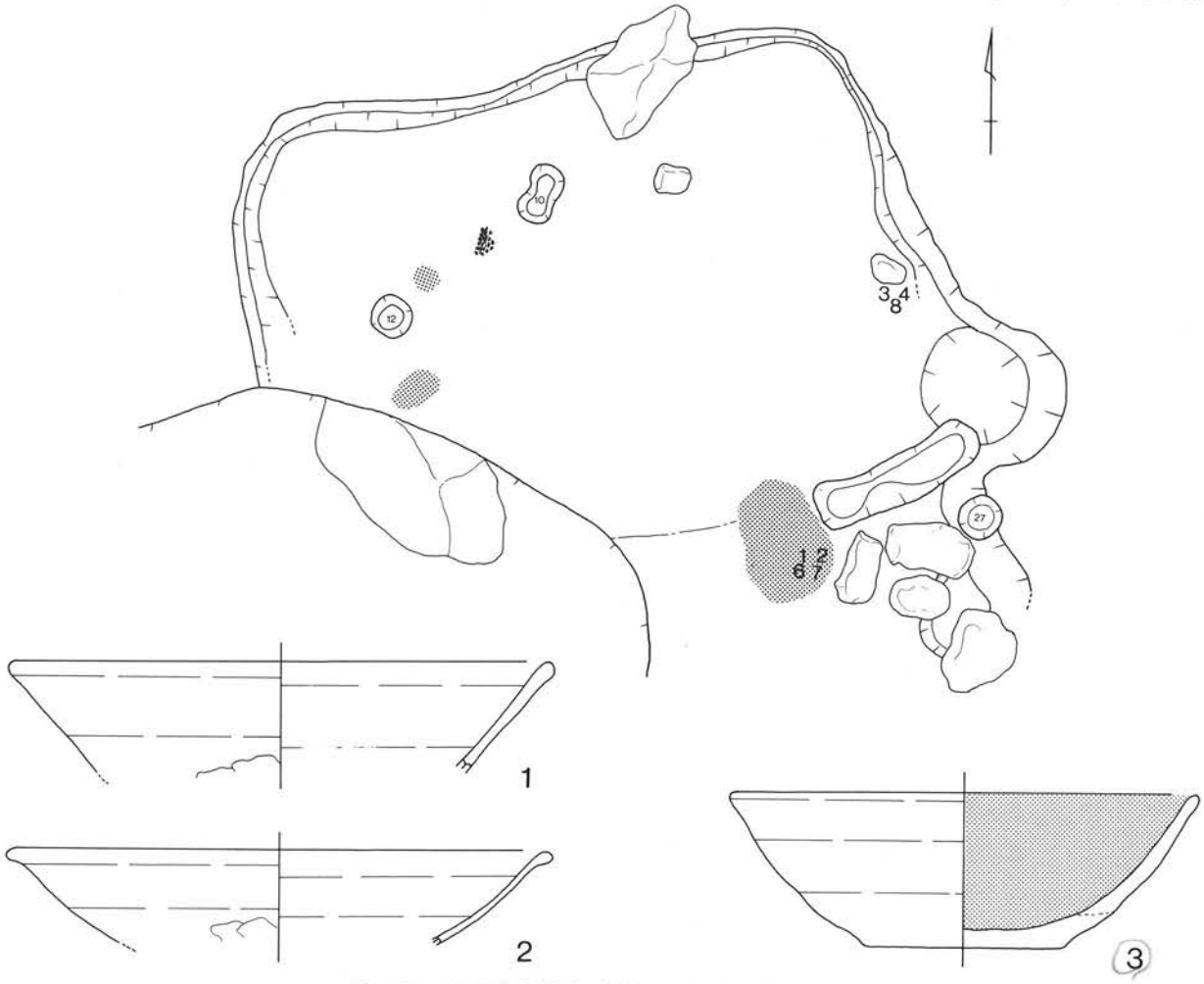
断面が浅いＶ字状もしくはＵ字状の溝であるが、遺物は縄文時代の石鏃や土器小片、平安時代、中世の土器片とばらつきがある。覆土は暗褐色で、他の住居覆土とさほど変わらない。

土坑・ピット（第33図、第34図）

Ｌ－７グリッド周辺でピットが検出されたが、建物址を構成するピットは確認できなかった。ＳＫ１からは縄文時代中期初頭五領ヶ台式と思われる土器片、ＳＫ２からは縄文時代中期末葉曽利式と思われる土器片、ＳＫ４からは縄文時代晩期と思われる土器片、ＳＫ５からは平安時代末から中世と思われる土器片（第33図６、７）が出土している。

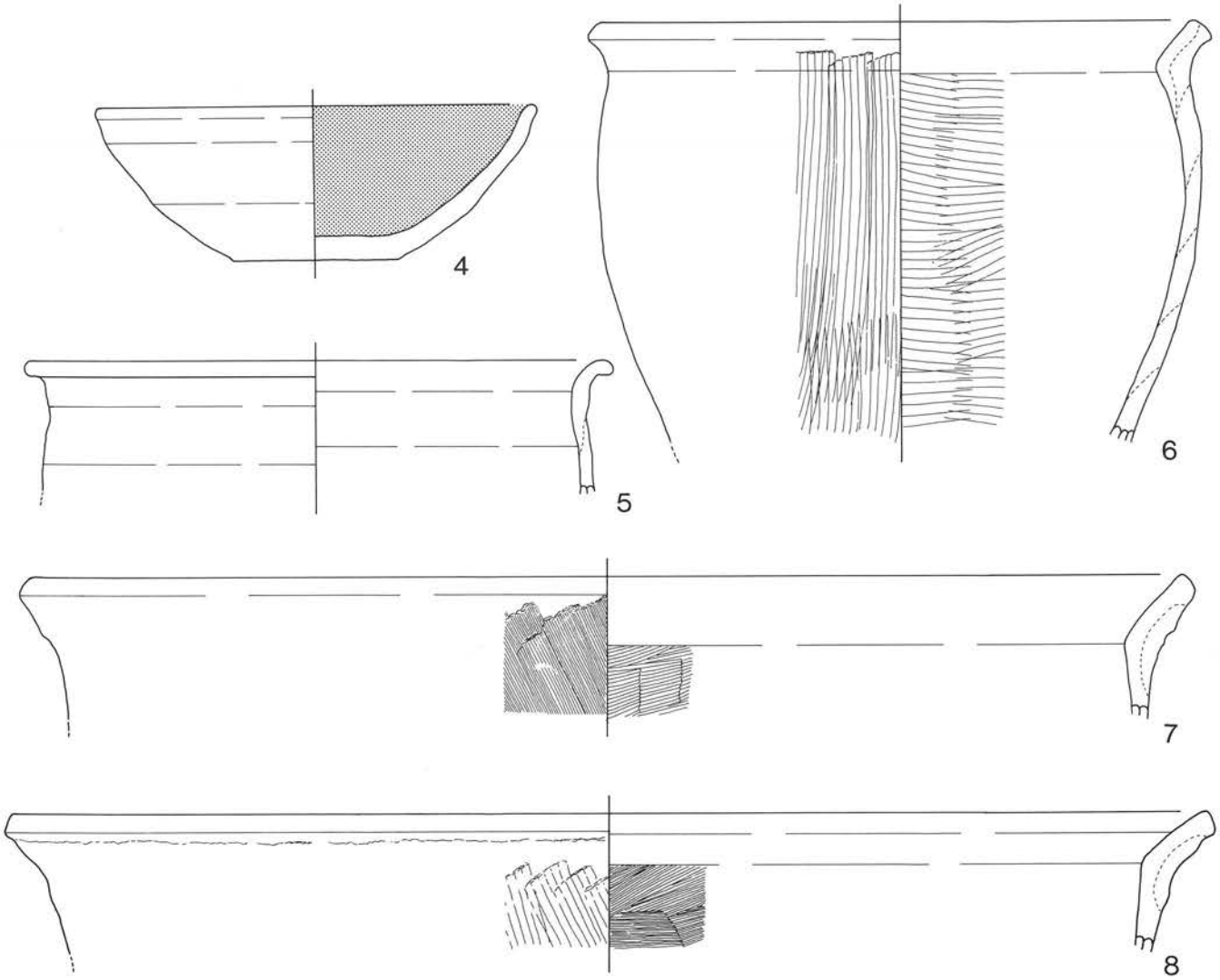
遺構外出土遺物（第33図、写真16）

平安時代から中近世と思われる遺構外出土遺物を、試掘調査の際の出土遺物とともに報告する。試掘坑はＴＰ○○と表示する。１はＴＰ１で出土した偏平の石製品で、石帯具かと思われるがはげて薄くなっている。２、３、４はＴＰ72で出土した近世と思われる高台付椀である。褐色で半透明な釉薬がかけられている。胎土は淡い乳白色であるが、焼成はやや弱い感じである。５はＴＰ80で出土した施釉椀で近世のものと思われる。８、９、10はＴＰ57で出土した坏で、内面に黒色処理が施されている。推定口径はそれぞれ14cm、13.1cm、17cm。11はＴＰ89

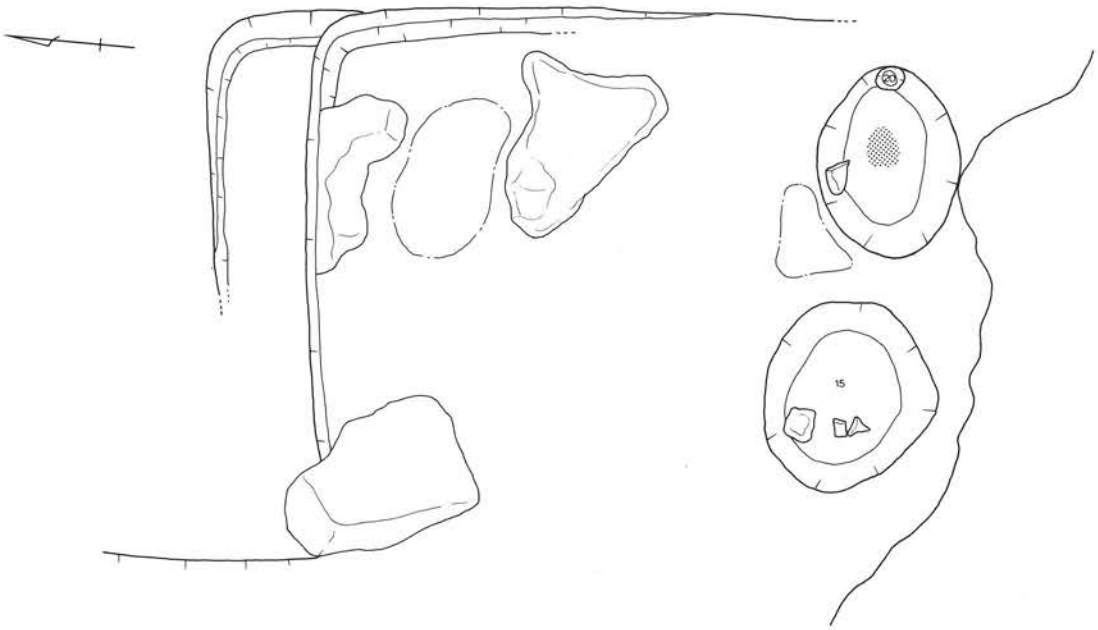


第21図　11号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)

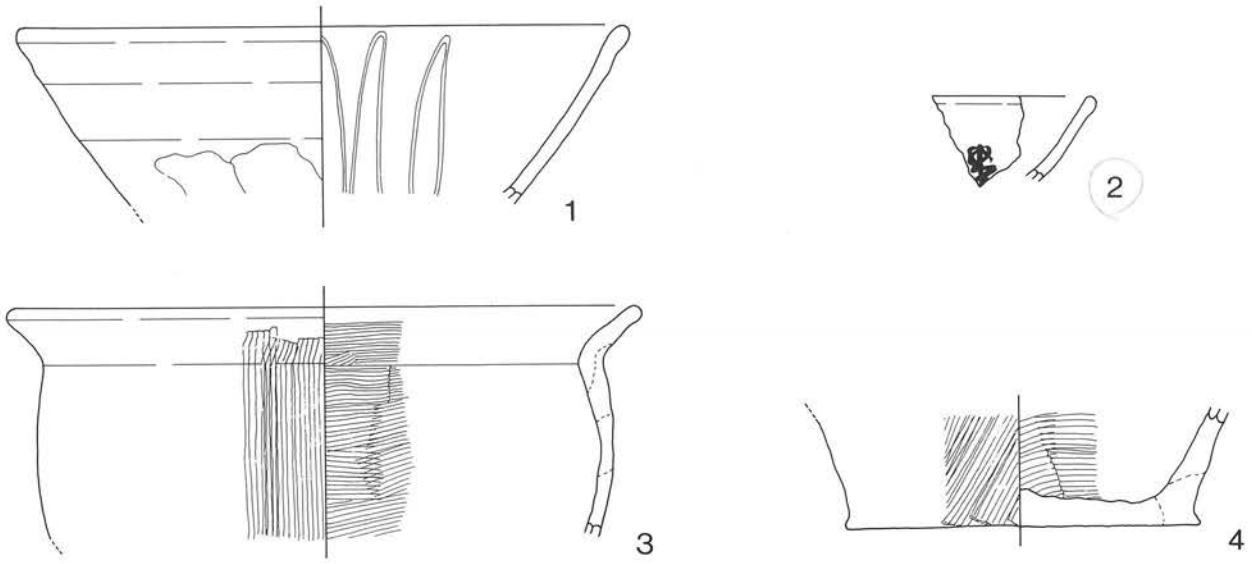
で出土した須恵器甕底部である。12は15号住居床面より出土した内耳土器である。13は８号住居西寄りで出土した内耳土器である。両者とも住居に属するものか不明であるためここに報告した。



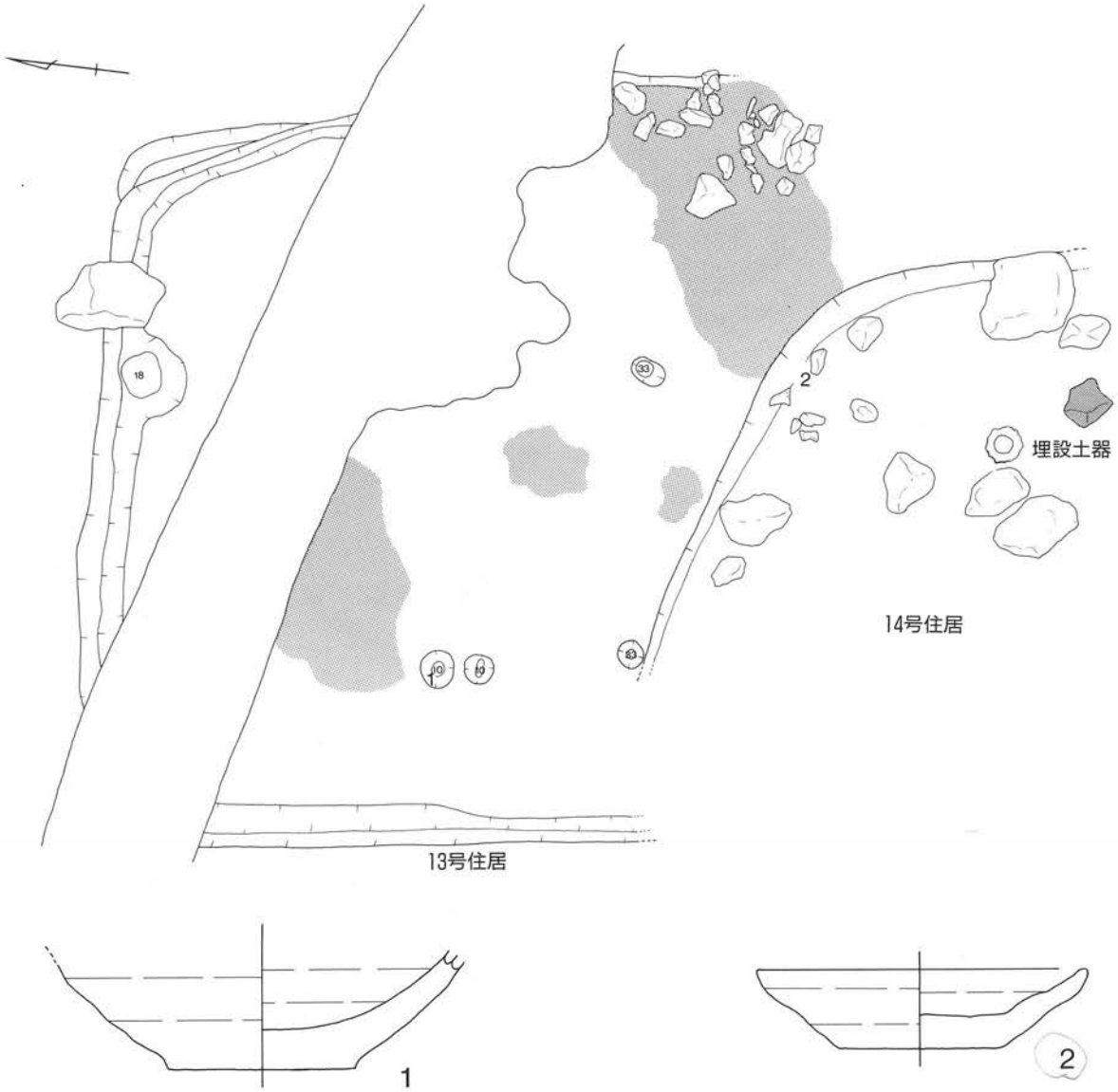
第22図　11号住居跡出土遺物(1/2)



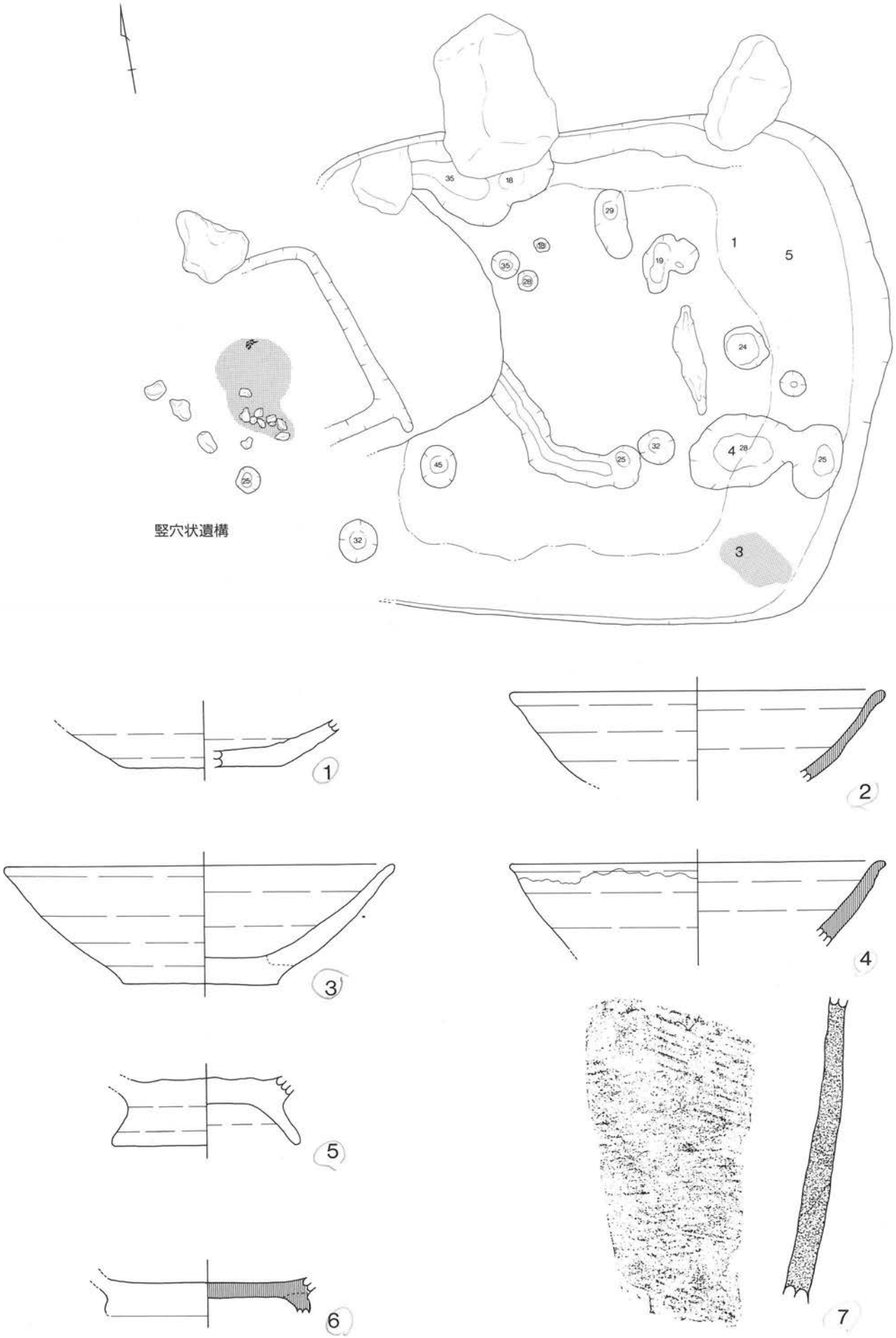
第23図　12号住居跡(1/40)



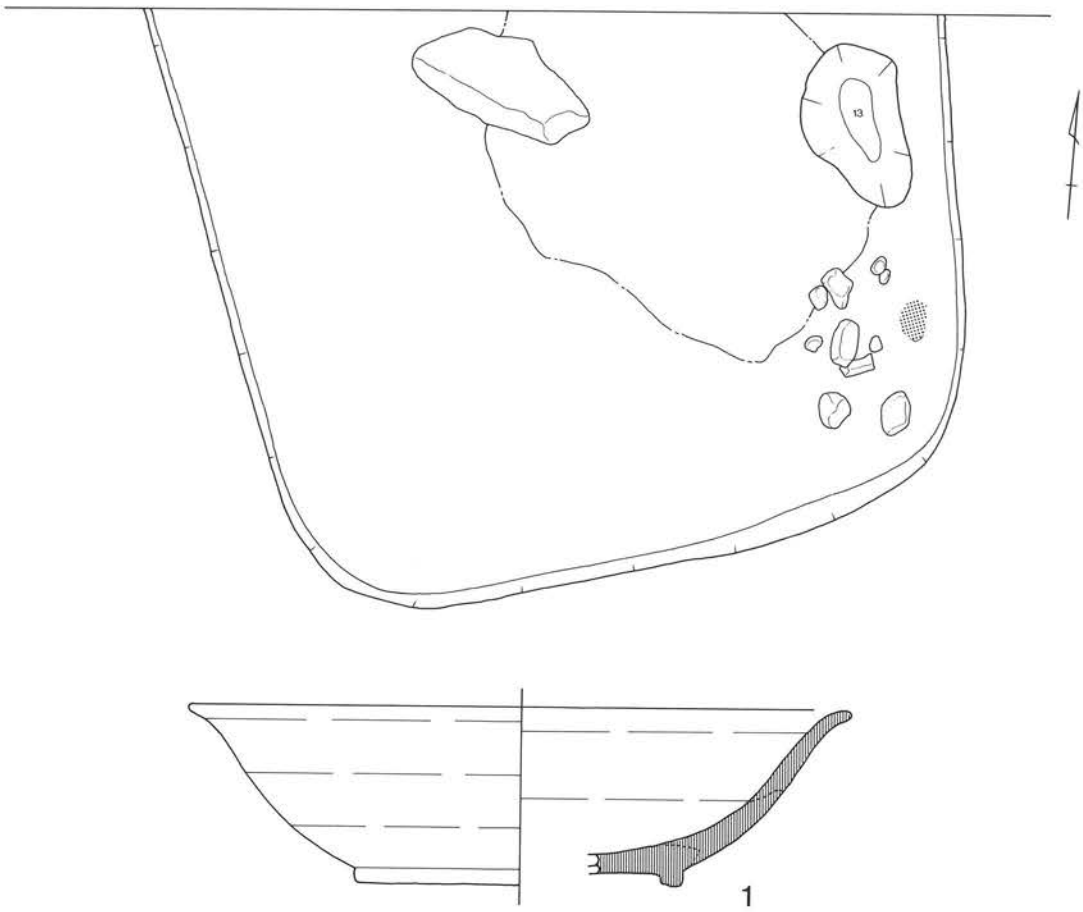
第24図　12号住居跡出土遺物(1/2)



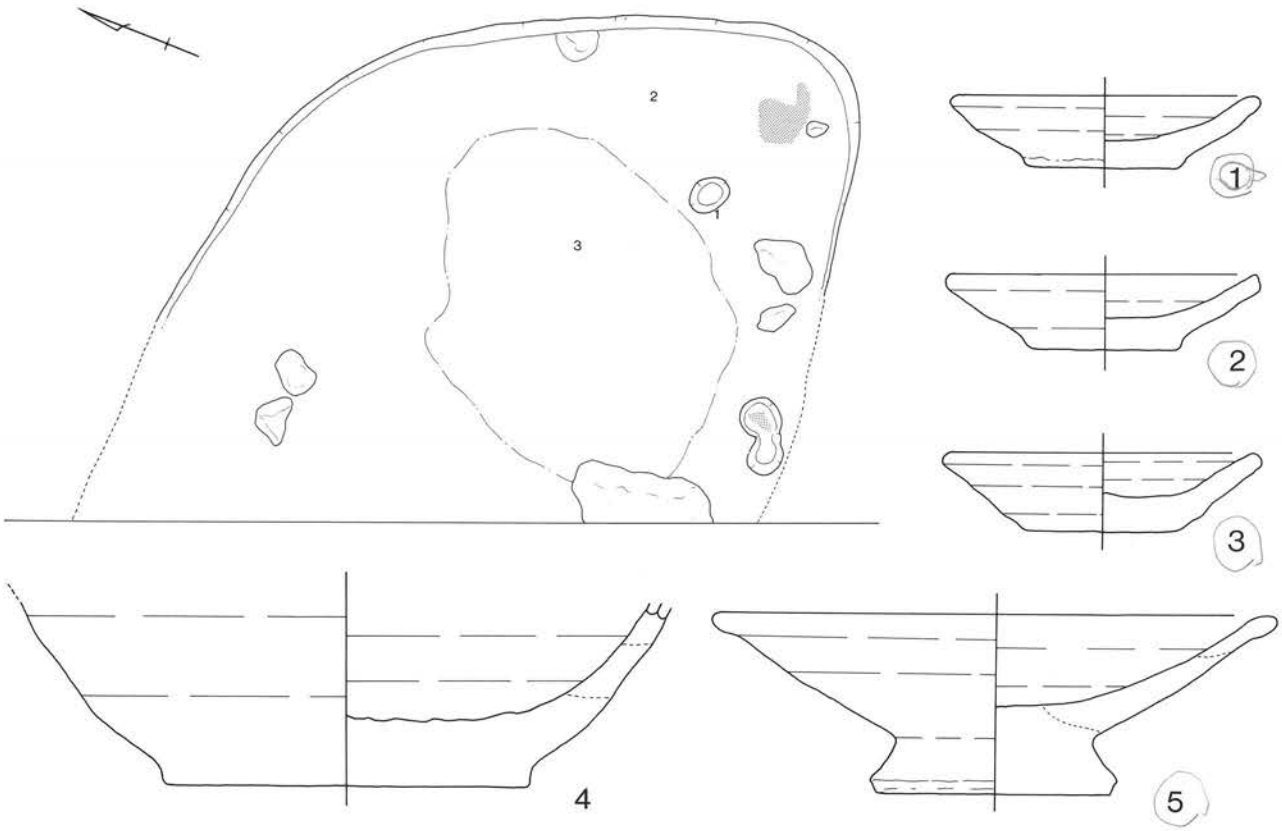
第25図　13・14号住居跡(1/60)及び出土遺物(1/2)



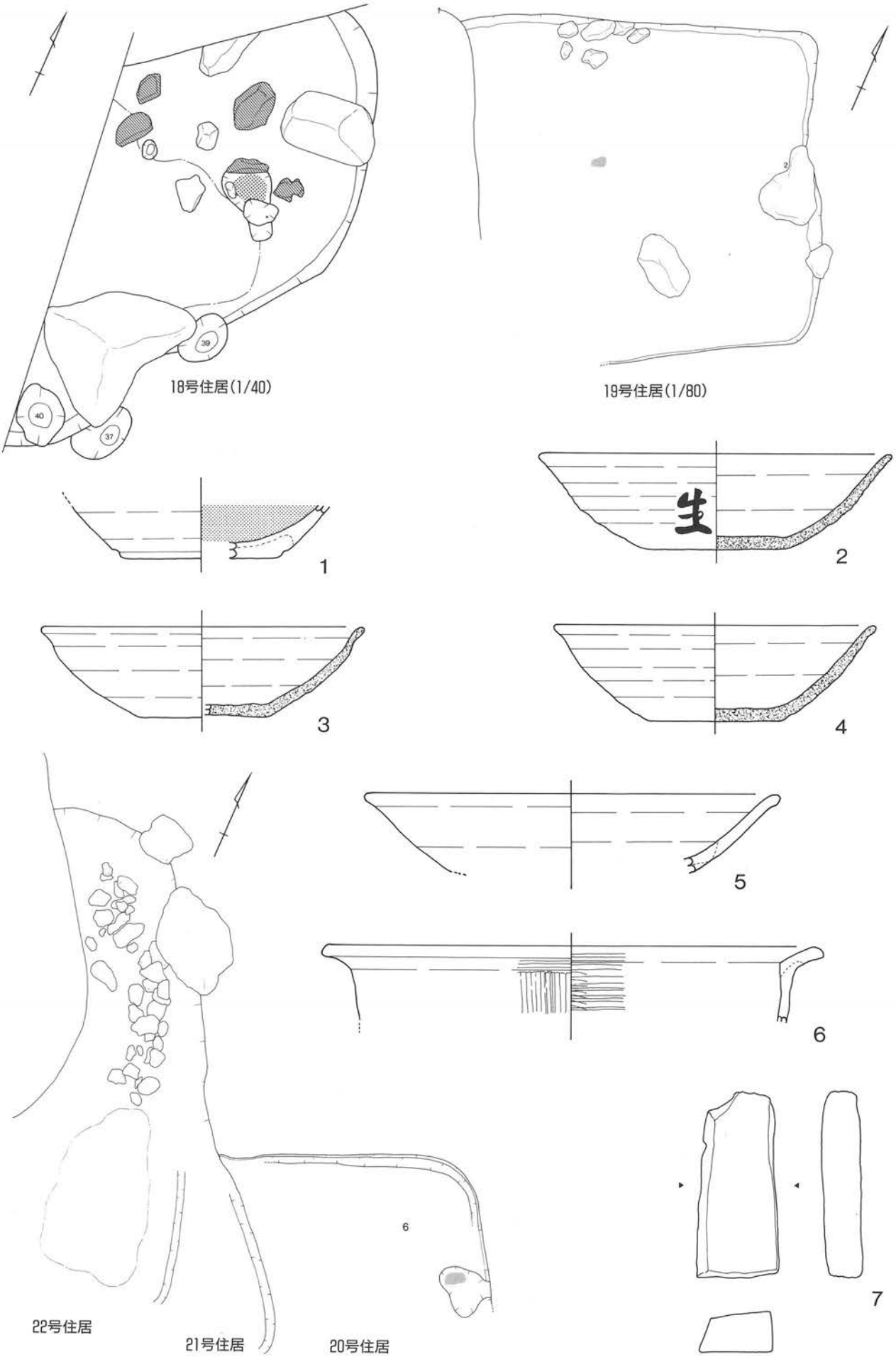
第26図　15号住居跡(1/60)及び出土遺物(1/2)



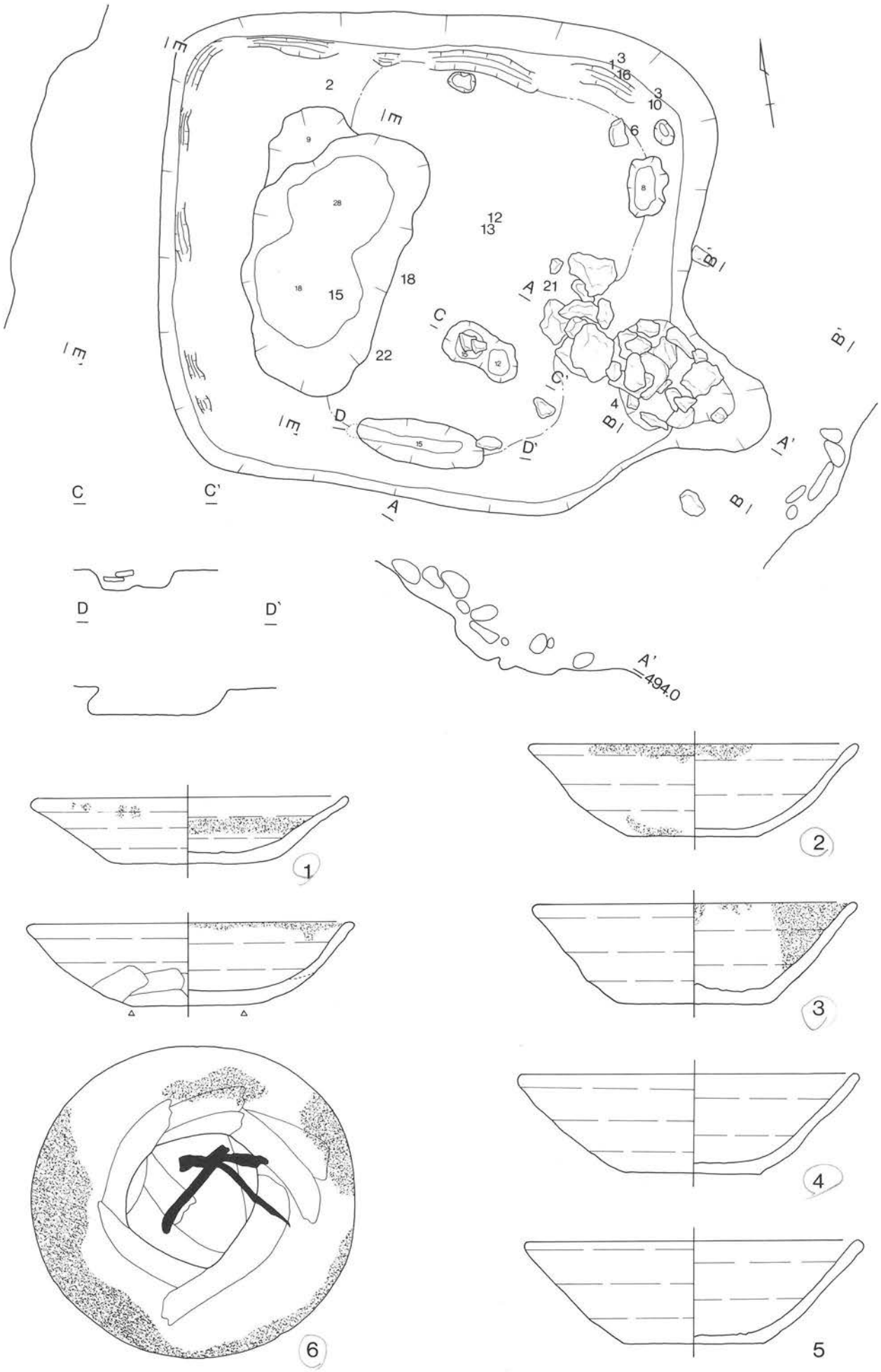
第27図　16号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



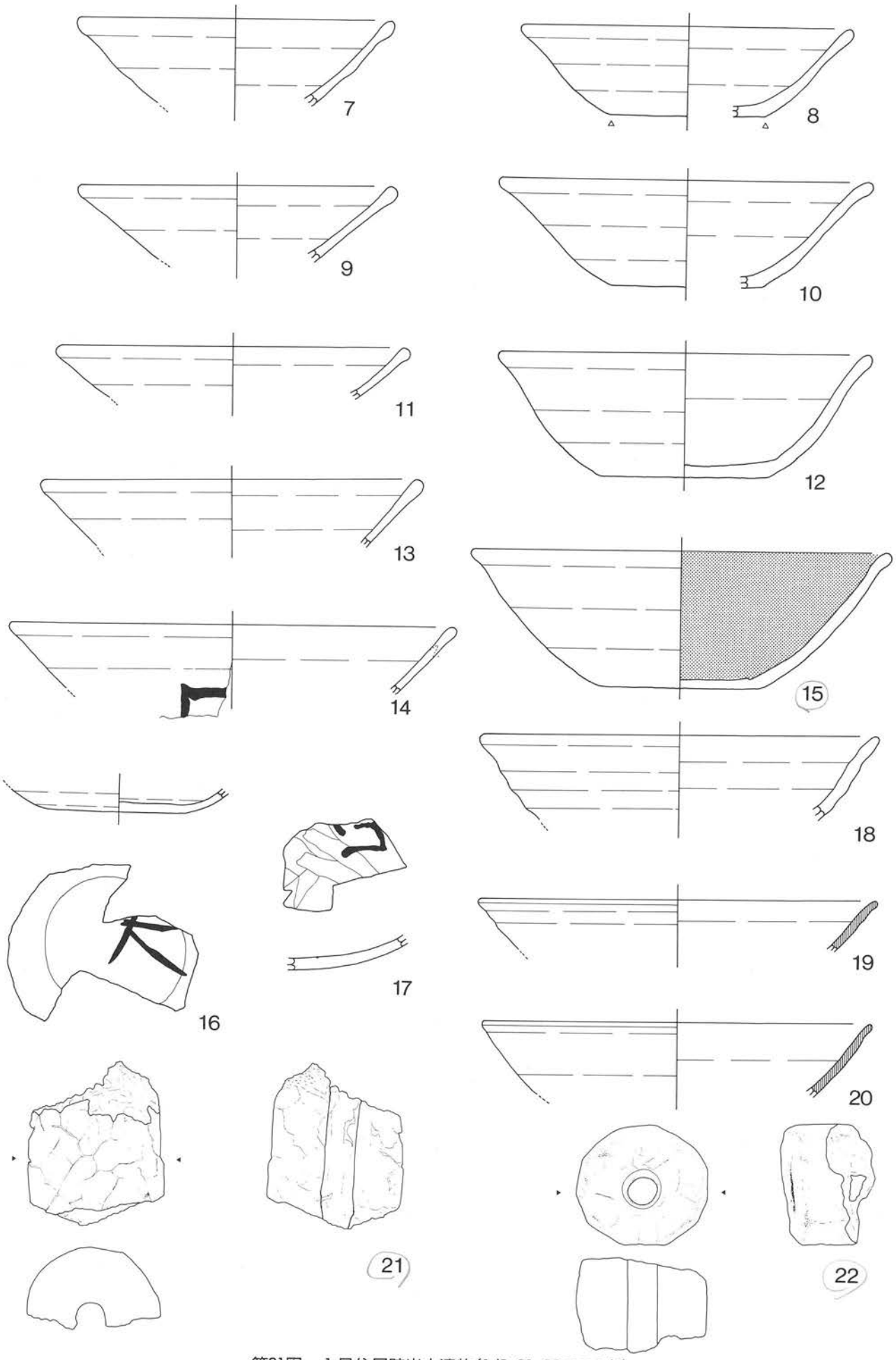
第28図　17号住居跡(1/60)及び出土遺物(1/2)



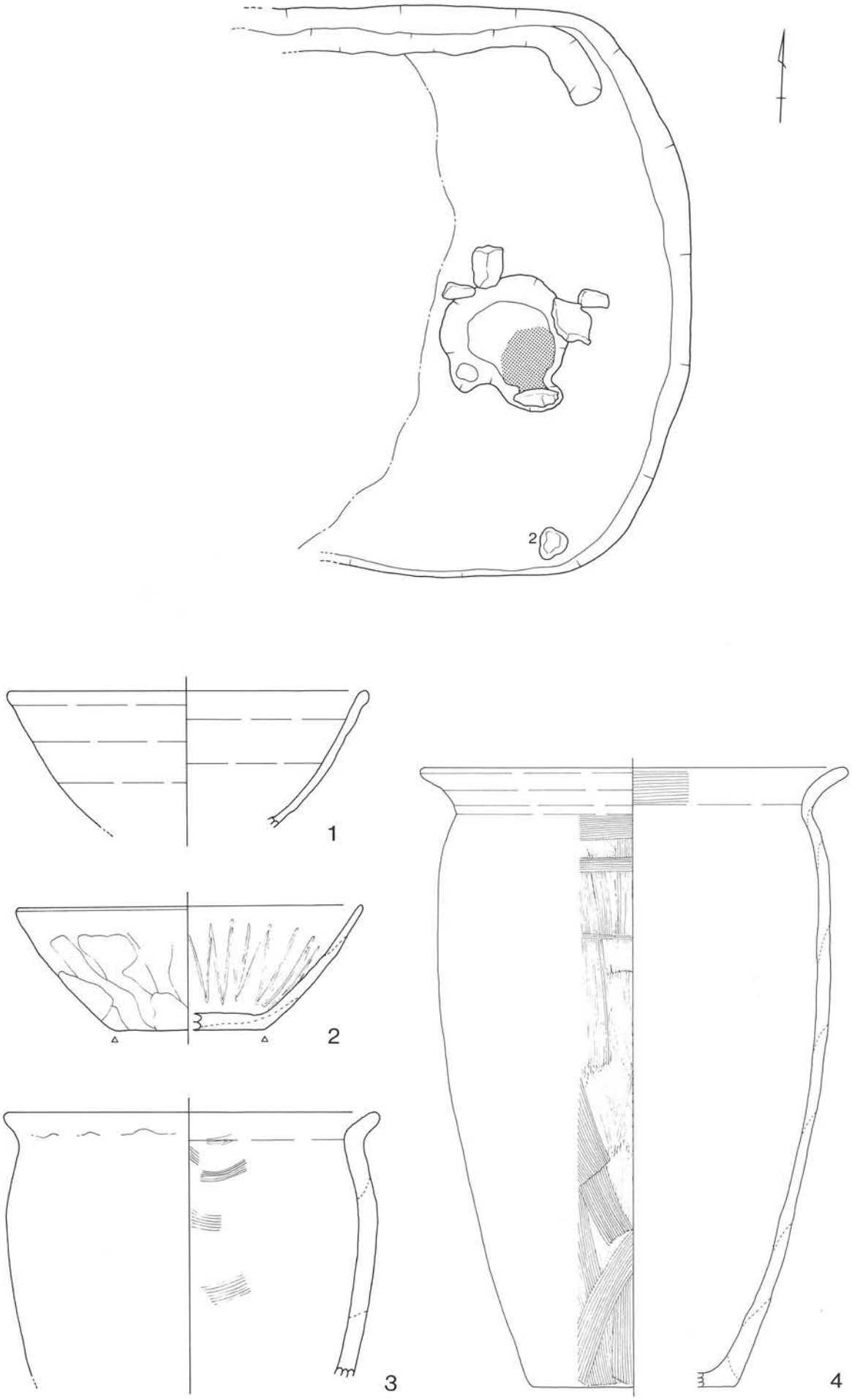
第29図　18～22号住居跡(1/40,1/80)及び出土遺物(1/2)



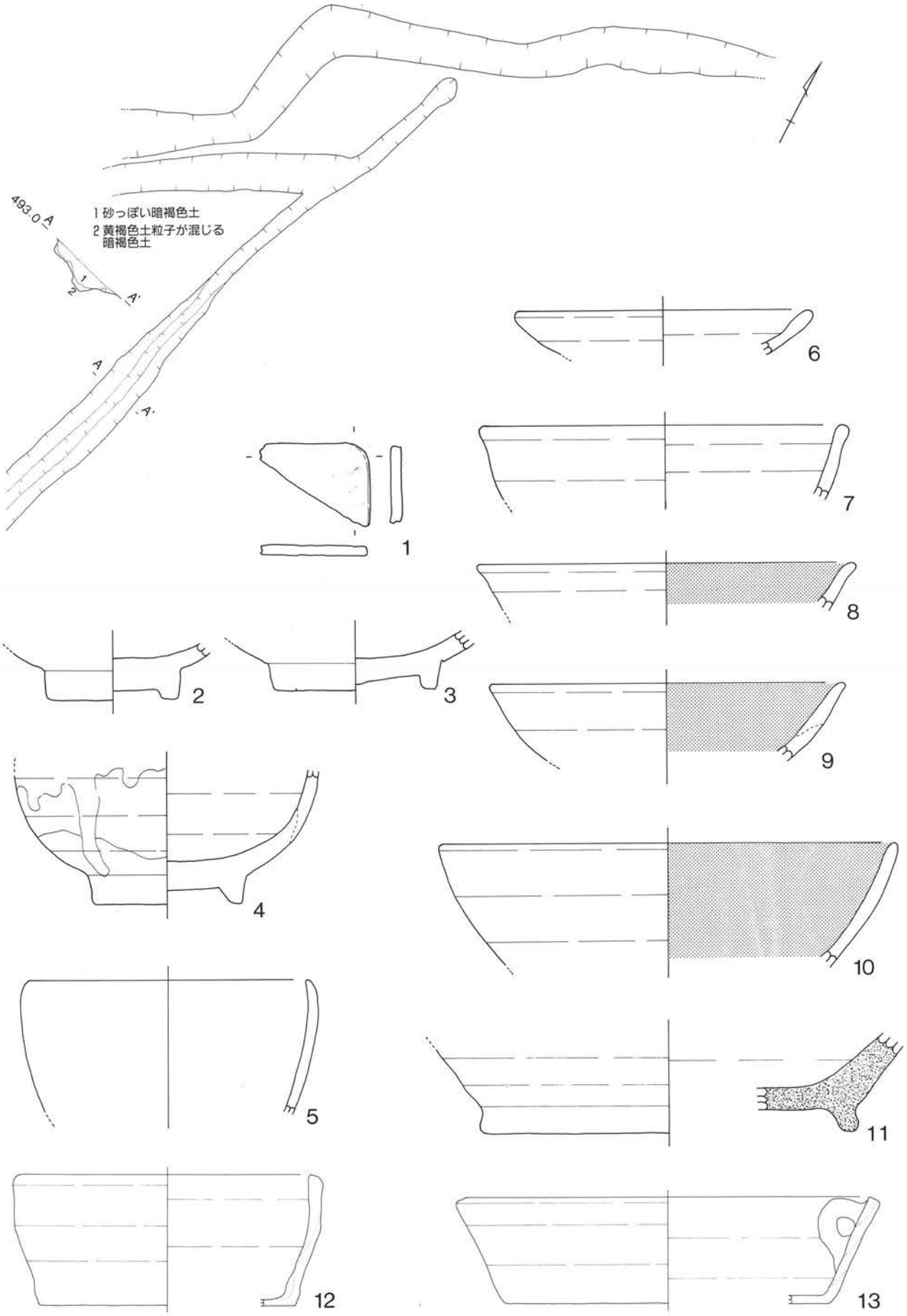
第30図　1号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



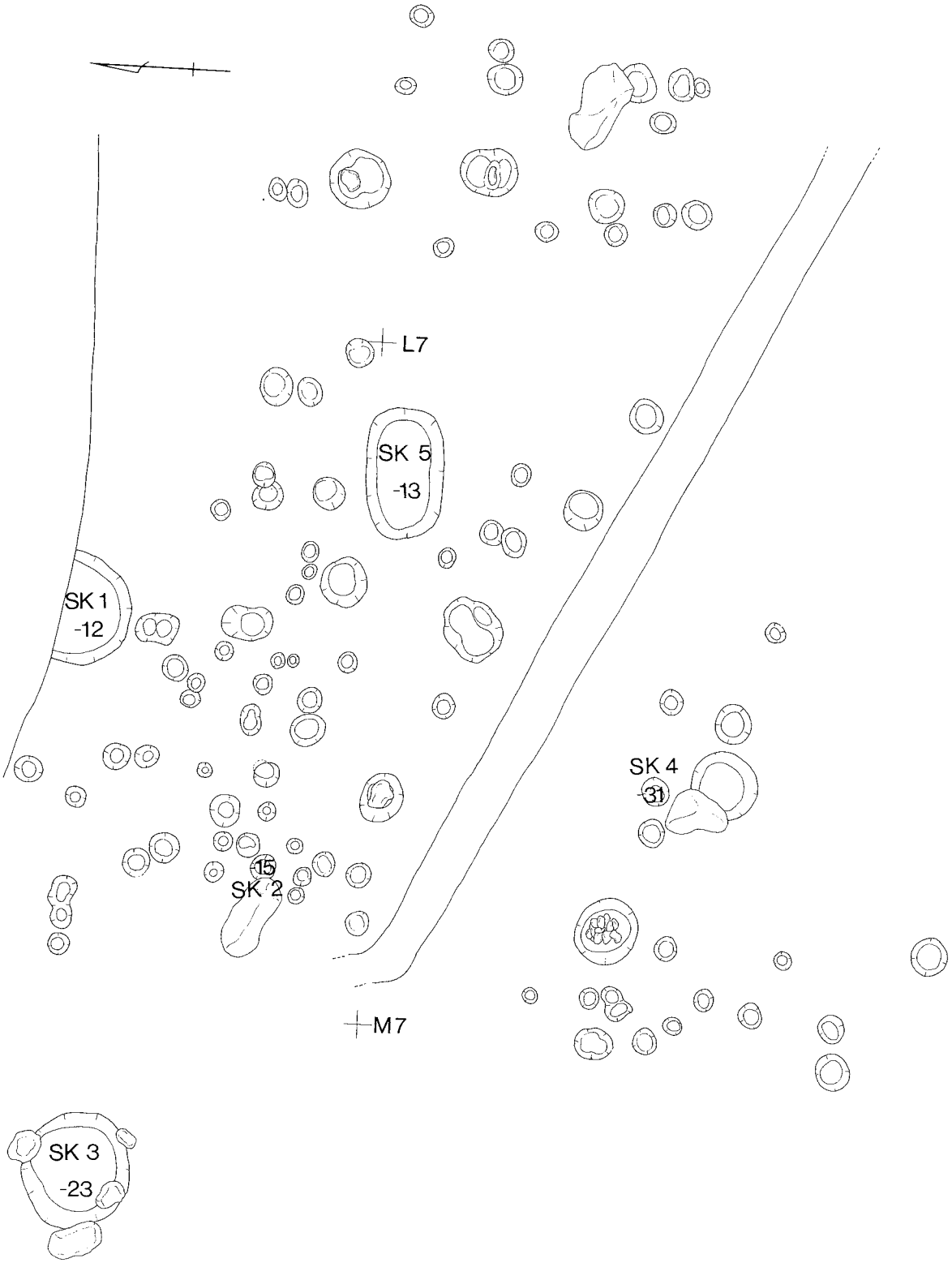
第31図　1号住居跡出土遺物(1/2,21.22のみ1/4)



第32図　2号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第33図　溝状遺構(1/200、断面図1/100)及び遺構外出土遺物(1/2,12.13のみ1/4)



第34図　土坑・ピット位置図(1/90)

高台・中谷井遺跡

絵：筒井もも子（明野小３年）

第１章　遺跡をとりまく環境

1　遺跡の地理的環境（第１図、写真17）

茅ヶ岳山麓の地理環境については村之内II・III遺跡の報告のなかで触れてあるため、ここでは重複をさけ詳しくは触れない。高台・中谷井遺跡が立地する尾根は茅ヶ岳山麓から東西方向にのび、南北を現在は水流がない涸沢に挟まれている。尾根の南北方向の幅はおよそ80mほどである。遺跡の周辺は現在永井と呼ばれる集落であるが、「永井七池」と地元では呼ばれる湧水地がいくつもみられたところである。現在、湧水が確認されるのはそのうちの１カ所だけである。そのうちのひとつは今回発掘調査を行った調査区のすぐ東側に接しており、湧水池の畔には周辺の畑から耕作中に発見された縄文時代のものと思われる石棒が20本ほど並べられ、道祖神とも水神ともつかぬ形でまつられている。

さらに遺跡の北側には清水端という地名が残り、縄文時代中期から後期までの広い包蔵地が知られている（平林遺跡、清水端遺跡）。尾根の南北にある涸沢は、縄文時代に水流があったか定かではないが、仮に水流がなくとも湧水に恵まれたため、集落を営むに不都合はなかったろうと思われる。

2　遺跡の歴史的環境（第１図）

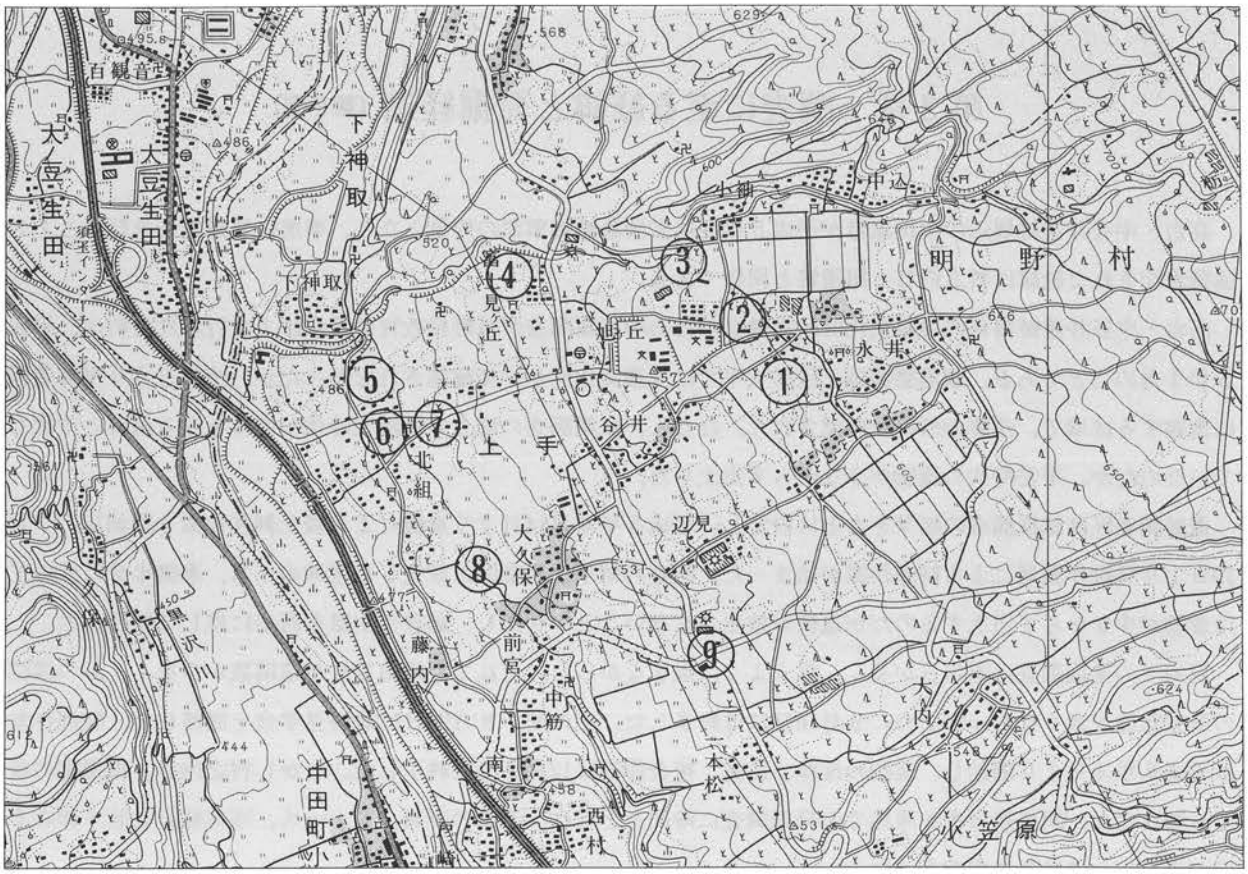
高台・中谷井遺跡周辺の平安時代の遺跡については村之内II・III遺跡の報告にゆずるとして、ここでは高台・中谷井遺跡周辺の縄文時代の遺跡について言及したい。

高台・中谷井遺跡のすぐ北側には先述した縄文時代中期の平林遺跡がある。この遺跡は昭和37年と50年に明野村立中学校、小学校をそれぞれ建設した際に大半が破壊されてしまったが、工事中に出土したという遺物は縄文時代中期後半～末葉のものが多い。高台・中谷井遺跡で出土した縄文時代の遺物の大半が同様の時期であることから、両者は同一の集落として意識され営まれていた可能性が十分に考えられよう。

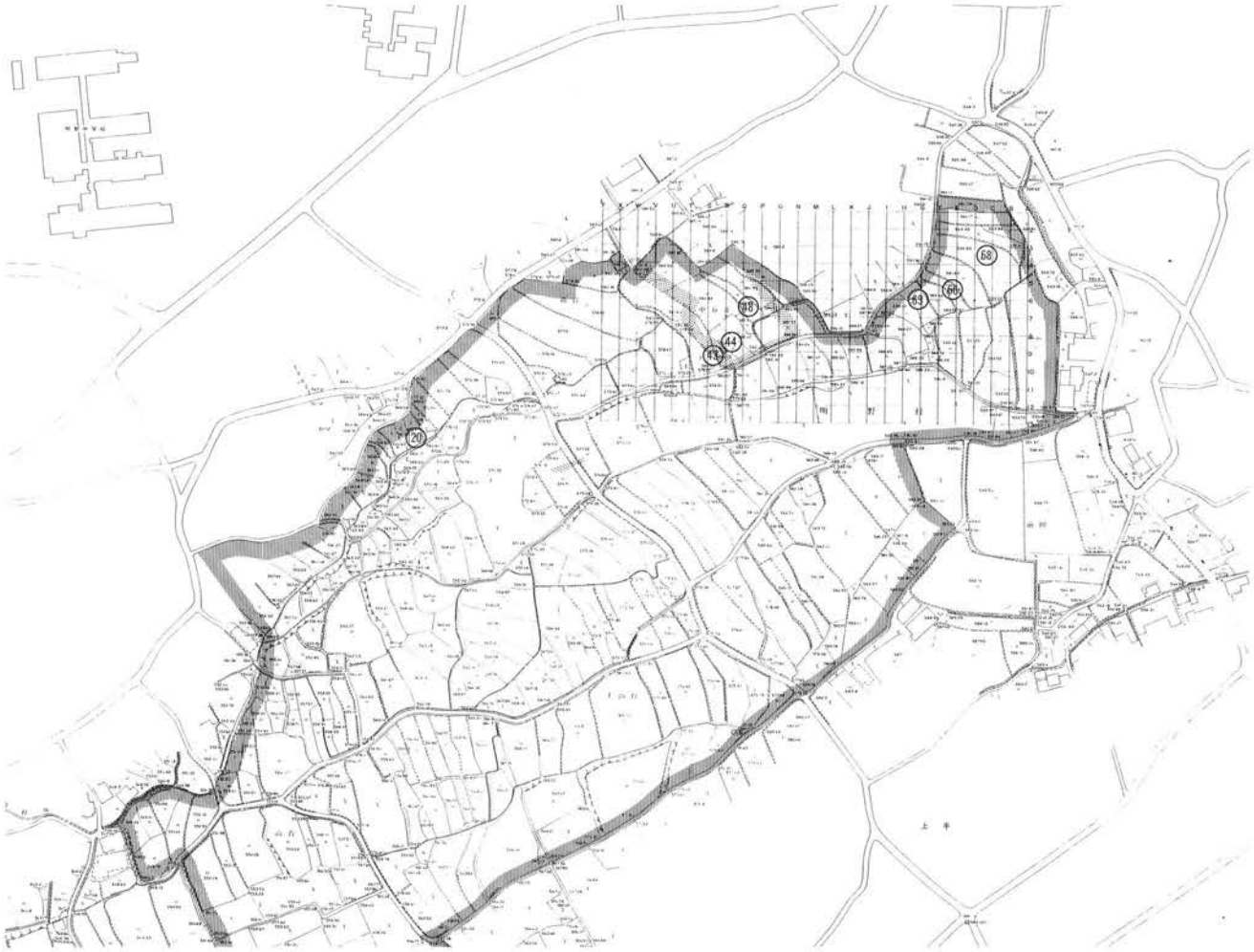
高台・中谷井遺跡では縄文時代後期初頭の遺物が若干みられたが、平林遺跡のさらに北側には縄文時代後期前半から中葉の集落である清水端遺跡がある。また、西へ約１ｋｍには縄文時代中期末葉から後期中葉の集落である屋敷添遺跡がある。南方には縄文時代中期末葉の集落である駒飼場遺跡が700mほど離れてみられる。

高台・中谷井遺跡周辺の縄文時代遺跡

1 高台・中谷井遺跡（縄文時代中期末葉）		
2 平林遺跡（縄文時代中期末葉）		
3 清水端遺跡（縄文時代後期前葉～中葉）	敷石住居３軒ほか検出	1986年報告
4 桑森遺跡（縄文時代中期中葉～末葉）	藤内式～曽利IV式	1994年調査
5 村之内II遺跡		
6 村之内III遺跡		
7 村之内Ｉ遺跡（縄文時代中期末葉）		
8 屋敷添遺跡（縄文時代中期初頭～後期中葉）	住居跡中期末葉４軒、後期前葉３軒、中葉１軒	1991年調査



第１図　周辺の縄文時代遺跡位置図(1/25,000)



第２図　永井工区・調査区及び試掘坑位置図(1/5,000)

第２章　調査に至る経緯と発掘経過（第２図）

高台・中谷井遺跡周辺の水田地帯が平成５年度県営圃場整備事業の対象となり、事前に発掘調査を行うことで協議がなされた経緯は村之内II・III遺跡と同様である。

高台・中谷井遺跡周辺の埋蔵文化財所在確認のための試掘調査が明野村教育委員会により行われたのは、平成５年１月のことである。圃場整備施工区の大半では埋蔵文化財が一切確認されなかったが、予想どうり平林遺跡に南接する区域で、遺跡の所在が確認された。ただし、試掘調査の時点では縄文時代が主体となる遺跡と予想していたのだが、平安時代の遺物が少なからず出土した。

遺跡調査区は試掘調査の結果をもとに設定し、平成５年６月14日より重機による表土剝ぎ作業を開始し、７月19日より発掘作業員による精査作業が始まった。精査の結果、調査区に設定した区域のうち、東側半分については遺物が少なからず出土するのだが遺構が検出されないことが判明し、調査の主眼を西半に移して続行した。

現地での発掘調査は雨の日が多く、思うように進まなかった。それでも検出された遺構数が少なく、かつ遺構の遺存状態が良くなかったために９月16日には終了した。その間、８月29日に遺跡見学会を開催した。整理作業は平成６年４月より開始し、遺物の洗浄、注記、接合作業は12月までに終了した。しかし村之内II・III遺跡の章でも触れたが、調査担当者が現地での発掘調査に時間をとられ、遺物の実測、トレース、写真撮影と版下作成までが完了したのは３月末であった。

第３章　縄文時代の遺構と遺物

１　遺構と遺物

高台・中谷井遺跡では縄文時代の住居跡が１軒検出されただけである。しかし、遺物が集中して出土するグリッドもあり、本来存在した住居跡が削平されて失われていることも考えられる。また、覆土より縄文時代の土器片が出土した土坑も検出されているが、時期が特定できないため第５章で報告した。

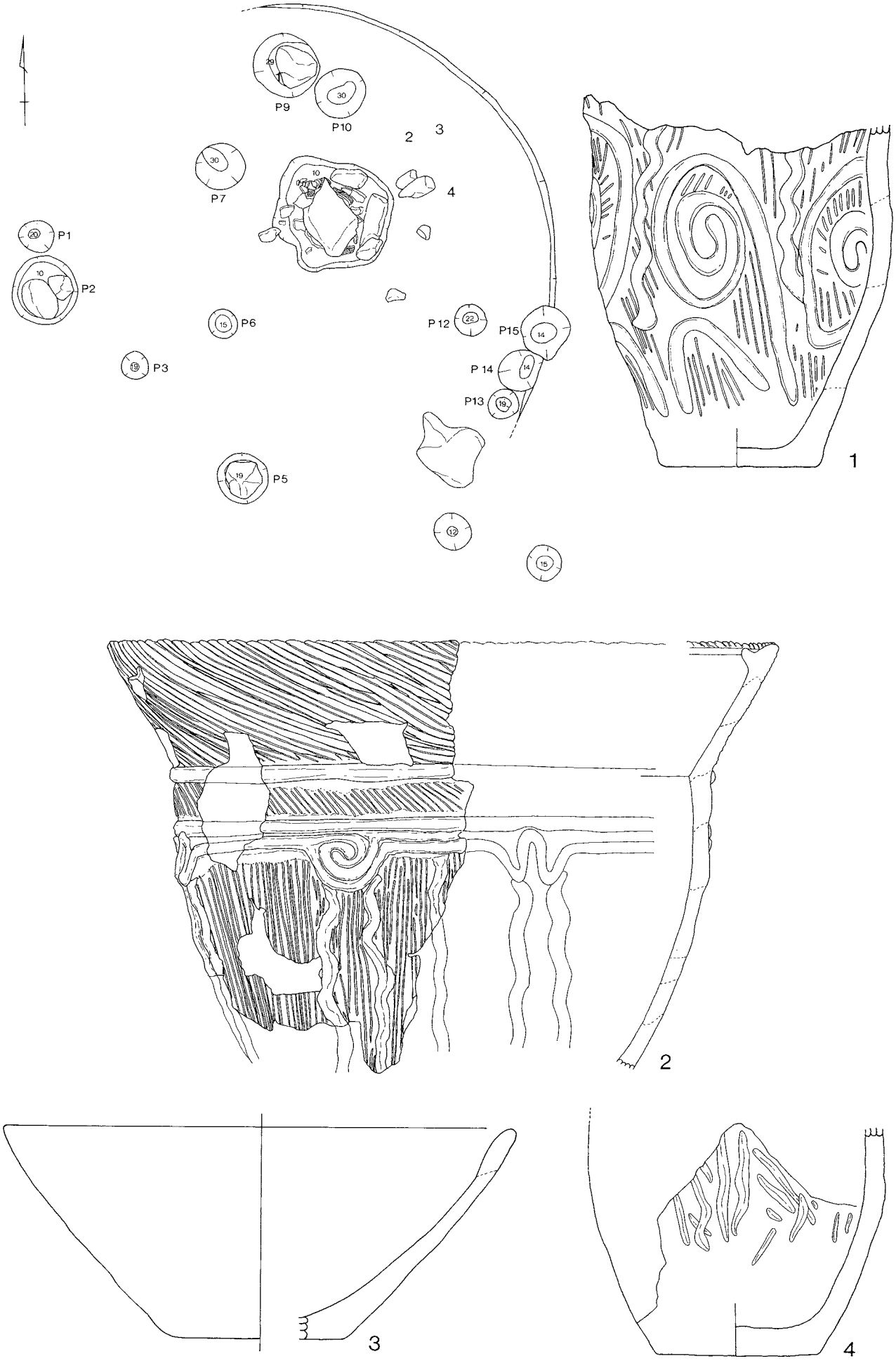
16号住居（第３図、写真18）

遺構の概要　大半が削平され、北壁と炉だけが検出された。床面、周溝は検出されなかった。住居内にはピットが検出されているが主柱穴はＰ－２、Ｐ－５、Ｐ－９、Ｐ－12の４本と思われる。

炉址の概要　30cmほどの掘り込みに、被熱して破砕した長方形の礫が２個残っていた。焼土は少量だが、検出された。炉底には深鉢上半部がつぶれるようにしてあり、土器の上に偏平の炉石と思われる礫が載っていた。

出土遺物　２は、炉内より出土した深鉢上半部で、曽利II～III式の重弧文土器である。１は現存高14.2cmの小型の深鉢形土器で、炉北側床面高で出土した。曽利III式と思われる。３は炉北側床面高で出土した浅鉢で、口径19cm、器高８cm、底径6.3cm。内面はよく磨かれている。４は住居内のピットＰ－９から出土した深鉢で、現存高8.8cm、底径６cm。曽利III式と思われる。

遺構の時期　２は曽利II式によくみられる重弧文土器であるが、文様の退化が認められ曽利III式と考えたい。その他の出土遺物は縄文時代中期末葉曽利III式でまとまるため、曽利III式期と思われる。



第３図　16号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2，2のみ1/4)

2　遺構外出土遺物（第４図、第５図、第６図、写真19・20）

本遺跡からは検出された縄文時代の遺構は少ないものの、縄文時代の遺物が包含層で多く出土した。試掘の際に出土した遺物については試掘坑番号をＴＰ○○で記す。

１はＵ－４グリッドで出土した、大きめの鉱物粒子が混じる粗い胎土質の小器片である。色調は赤褐色。縄文時代早期末葉～前期初頭と思われる。２はＴＰ44で出土した小器片で、雲母他の鉱物粒子が混じるざらついた胎土質である。色調は赤褐色。半截竹管による沈線と押し引きで施文する。前期後半、諸磯ｃ式と思われる。

３はＵ－５グリッドより出土した浅鉢片で口唇部上端と内面に施文される。井戸尻式と思われる。４はＵ－５グリッドより出土した、深鉢口縁部で、井戸尻Ⅲ～曽利Ⅰ式と思われる。

５、６はＴ－５、Ｐ－５グリッド出土の把手片で、曽利式と思われる。７もＵ－５グリッドより出土した、水煙形の大型把手片である。曽利Ⅰ式。８はＴＰ43で出土した水煙形大型把手器片で、７と同一個体と思われる。曽利Ⅰ式。９は断面が三角形の厚みのある隆帯に刻みを施した深鉢胴部片で、曽利Ⅰ式と思われる。

曽利Ⅱ式と思われるものを集めた。10はＵ－４グリッドで出土した大型の深鉢胴部器片で、半截竹管による隆帯と平行沈線文で施文する。11はＵ－４グリッドで出土した。平行沈線にソーメン状の細い隆線を貼り付ける。12はＵ－５グリッドで出土した口縁部片で、重弧文を施した深鉢と思われる。13はＵ－５グリッドで出土した深鉢口縁部で、ＲＬ単節縄文地文に連弧文形隆帯と懸垂隆帯を施す。口縁部には波状隆帯を貼り付ける。隆帯は地文施文後に貼り付けられる。

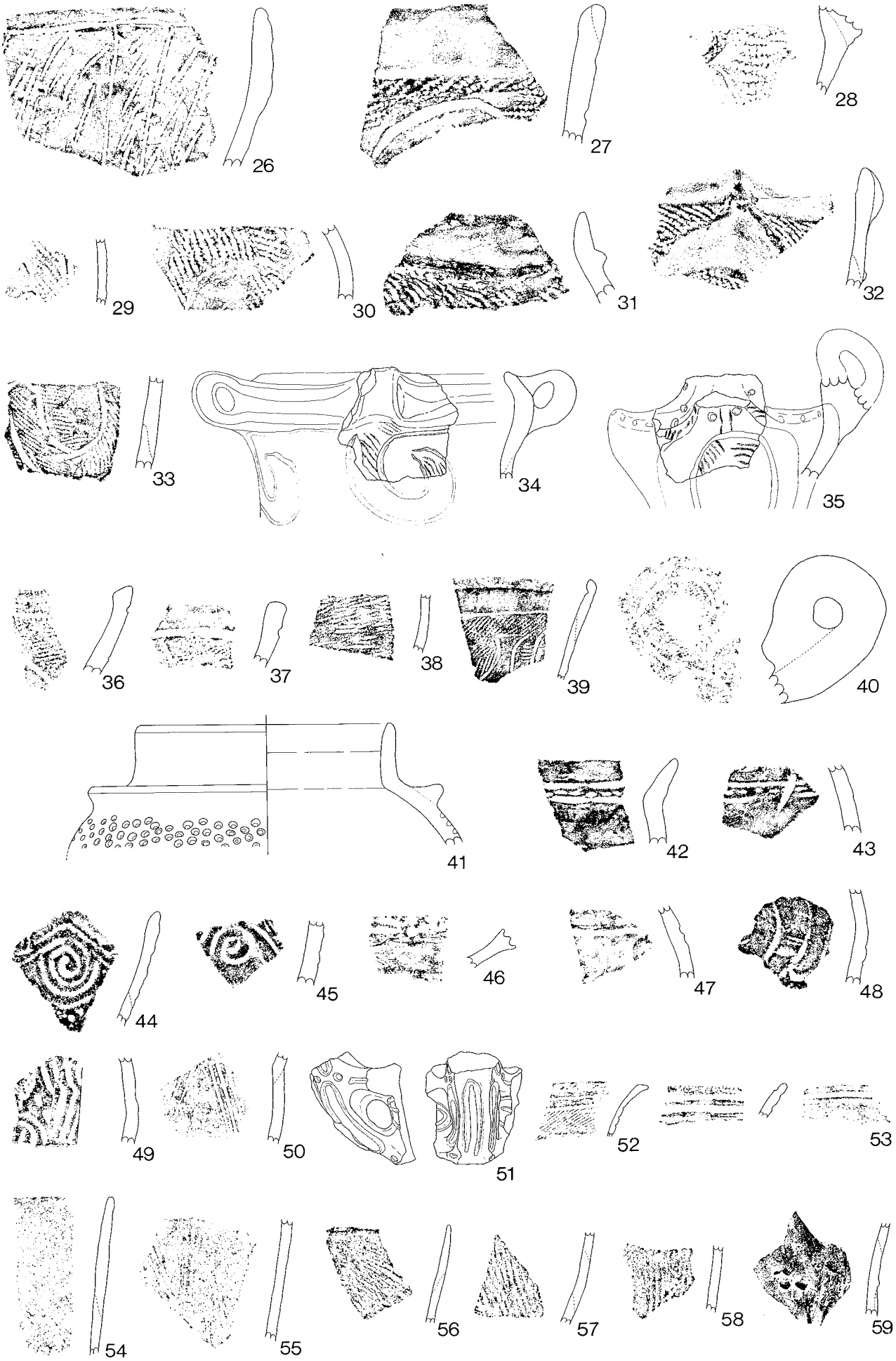
以下は曽利Ⅲ式と思われるものを集めた。14はＵ－４グリッドで出土した小器片で、沈線と刺突により施文される。15はＵ－４グリッドで出土した小器片で、Ｄ字状に区画されたなかを刺突により充塡する。16はＵ－４グリッド出土。17はＵ－５グリッド出土の器片で、連弧文と縦沈線で施文する。18はＴＰ148で出土した器片で、幅広沈線とＬＲ単節縄文が施される。曽利Ⅲ～Ⅳ式と思われる。19はＴＰ66で出土した広口壺頸部と思われる器片で、幅広でやや深めの沈線と先が３つに分かれた施文具による刺突で施文する。21はＵ－５グリッドで出土した広口壺の頸部と思われる器片で、浅く幅の広い沈線によりつくられた疑似隆帯とそれに囲まれる空間に施文する。22はＱ－８グリッドで出土した器片で、指頭による幅広の沈線で施文される。

20はＱ－８グリッド出土の口縁部片で、沈線による渦巻き文が口唇部直下に描かれる。23はＴＰ48出土の器片で、幅広で厚みのない隆帯と沈線で施文される。いずれも曽利Ⅳ式。24は出土位置不明の器片で、幅広で厚みのない隆帯で区画された中にＲＬ単節縄文による地文が施される。垂下する隆帯の一番上には円形の浅い刺突が施される。25は広口壺で幅広の沈線による渦巻き文とハの字文が描かれる。把手が頸部につけられていて、４単位と思われる。26はＵ－４出土の口縁部器片でいびつで雑なつくりの深鉢である。沈線を用いた文様だが、既にハの字すら描いていないほど退化した文様である。以上は曽利Ⅴ式と思われる。

以下には加曽利ＥⅣ式を集めた。27はＱ－６グリッドより出土した口縁部片で、幅広で浅い沈線とＬＲ単節縄文により施文される。28はＱ－８グリッドで出土した突起状把手の付け根の器片で、沈線とＬＲＲＲ多条縄文で施文される。29はＬＲ単節縄文と沈線で施文される。30はＰ－５グリッドより出土した器片で、器面がよく磨かれている。ＬＲ単節縄文と沈線が施される。31はＱ－８グリッドで出土した広口壺と思われる器片で、雑な隆帯とＬＲ無節縄文で施文される。32はＴＰ68で出土した口縁部片で、断面が三角形の低く細い隆起線とＲＬ単節縄文により施文される。33はＱ－８グリッドで出土したやや薄手の深鉢胴部器片で、ＬＲ単節縄文に沈線で施文される。35は４号住居覆土出土の深鉢片で、大型の把手が１カ所につくものと考えられる。

34以下は称名寺式と思われるものを集めた。34は６号住居覆土出土の深鉢片である。把手が２単位か４単位かは不明である。36は３号住居覆土より出土した器片で、ＬＲ単節縄文が施文される。やや砂っぽい胎土で、色調

第４図　遺構外出土遺物(1/3,25のみ1/6)



第５図　遺構外出土遺物(1/3)

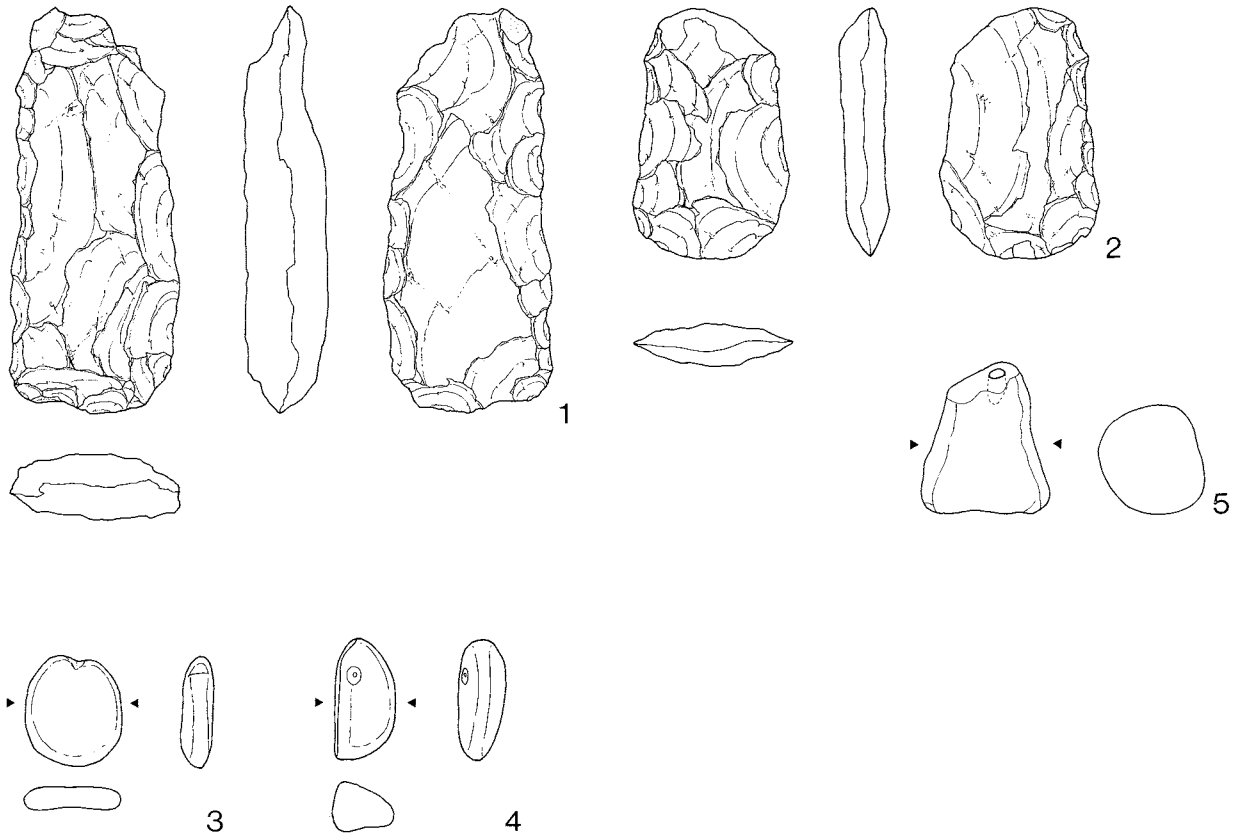
は乳白色。37は６号住居覆土より出土した器片で、ＲＬ単節縄文が施文される。胎土質は36と同様である。38はＴＰ20で出土した器片で、ＬＲ無節縄文、胎土質から称名寺式と思われる。39はＱ－８グリッド出土の器片で、ＬＲ単節縄文と沈線で施文される。40は９号住居覆土より出土した把手で、細かいＬＲ単節縄文が施文される。

41は広口の深鉢口縁部で三十稲場式古段階の模倣土器と思われる。

以下は後期前半堀之内式を集めた。42、43はＱ－８，Ｒ－８グリッドで出土した器片で、幅広の沈線と列点文で施文される。44はＴＰ44で出土した波状口縁部片で、浅い沈線で渦巻き文が描かれる。胎土はやや白っぽくて砂が混じる質である。45はＵ－５グリッド出土で、沈線で渦巻き文を描いてある。46はＴ－５グリッド出土の口縁部片で沈線と円形の刺突文を施す。47はＵ－４グリッド出土、48はＴＰ48出土である。
49はＱ－７グリッド出土で沈線と列点文が施される。50は３号住居覆土出土で、沈線で施文される。器面はよく磨かれている。51は12号住居覆土出土の把手片である。

52は５号住居覆土出土の口縁部片で、口唇部に１カ所凹み状の刻み目がある。ＬＲ単節縄文を口縁部に施文、その下に沈線を３本横走させる。器面はよく磨かれ、赤彩の痕跡がみられる。加曽利Ｂ１式か。53は３号住居覆土出土で、表裏に広めで浅い沈線が施文される。後期後半と思われる。54～58はＲ－８グリッド出土の粗製深鉢片で、胎土質、調整より同一個体と思われる。条痕状のナデ痕があり、鉱物粒子が混じる胎土質より後期と思われる。比較的まとまって出土している。59はＴＰ63出土で、粗製深鉢片である。外面にはナデ痕が残り、器内面はよく磨かれている。胎土質から後期と思われる。

図６－１、２は打製石斧で、石質は頁岩、硬砂岩である。３はＰ－９グリッドより出土した石製品で切り込みが入っている。４は３号住居覆土より出土した勾玉形石製品の未成品で穿孔し始めた跡がみられる。石質は蛇文岩と思われる。５はＵ－４グリッドで出土した土偶脚部と思われる土製品で、胎土質と形態より縄文時代中期と思われる。



第６図　遺構外出土遺物(1/2)

第４章　平安時代の遺構と遺物

高台・中谷井遺跡では、平安時代の住居跡12軒が検出されている。一部を除いて造田の際に削平されて、遺存状態は良くなかった。また、Ｏ－７グリッドには焼土址と遺物が出土しており、住居跡として調査はしなかったもののかつては住居があったものと思われる。１、14、15号住居は欠番である。

１　平安時代の遺構と遺物

２号住居（第７図、写真21・22）

遺構の概要　西半は削平されている。固くしまった床面がカマド横で検出された。周溝は検出されなかった。

カマドの概要　北東隅に掘り込みと焼土が検出された。

出土遺物　１は床面出土の土師質坏で、３分の２個体器片である。口径12.9cm、器高4.1cm、底径5.2cm。底部は回転糸切り未調整。胎土はＡ４類。２は覆土出土の土師質坏の２分の１個体器片で、推定口径12.8cm、器高3.5cm、底径5.5cm。底部は回転糸切り未調整。胎土はＡ４類。３はカマド手前で出土した土師質坏で、推定口径14cmの小器片である。胎土はＡ１類。４は覆土出土の土師質坏３分の１個体分器片で、推定口径12.6cm。注ぎ口状に口唇を外反させた箇所がある。胎土はＣ１類。５はカマド手前の覆土出土の土師質坏で、推定口径14.4cm。内面が黒色処理される。胎土はＡ１類。６はカマドより出土した推定口径14cmの小器片である。胎土はＡ４類。７は住居中央部床面で出土した土師質皿で、推定口径12.2cm、器高2.5cm、底径５cmの２分の１個体分器片である。底部は回転糸切り未調整。胎土はＡ４類。８はカマド出土の土師質坏で、底部２分の１個体分の器片である。推定底径6.2cm。底部は回転糸切り未調整。みこみ部には渦巻き状の凹凸のナデ痕がある。胎土はＡ４類。９は覆土出土の小型の甕もしくは壺で、ロクロを用いずに整形したものである。推定口径は９cm前後、器高７cm前後、底径は７cmほど。底部には木葉痕がみられる。胎土はＥ２類。10はカマドで出土した小型甕片で、推定口径は12cm。外面はハケメ、内面はナデ調整。ロクロを用いずに成形した感じである。胎土はＢ３類。

遺構の時期　出土遺物の大半は甲斐型土師器の特徴を何となく感じさせる土師質土器であることから、甲斐型Ⅻ期、10世紀後半と思われる。

３号住居（第８図、写真22）

遺構の概要　掘り込みが10cmほどしか残らない。東西5.4m×南北4.6m。床面、周溝は検出されなかった。住居北西隅床面に小礫が集積しているが礫に被熱痕、煤が付着した痕跡はみとめられない。

カマドの概要　北東隅に焼土と礫が検出された。掘り込みは検出されなかったがカマドと考えてよいと思われる。

出土遺物　１は覆土出土の土師質坏で、推定口径14.3cmの小器片である。内外面はナデ調整。ヘラ削りはみられない。「六」もしくは「大」と思われる墨書あり。胎土はＡ３類。２は覆土出土の土師質坏で、推定口径14.2cm。胎土はＡ３類。器面調整は雑である。墨書があるが、読みは不明。３はカマド出土の土師質坏で、推定口径12cmの小器片である。胎土はＡ４類。４は覆土出土の土師質坏小器片で、推定口径13.6cm。胎土はＡ４類。５はカマド手前で出土した推定底径６cmの土師質坏底部小片である。底部は回転糸切り未調整。胎土はＡ４類。６はカマド出土の土師器皿と思われ

る小器片で、推定口径7.7cm。胎土はＢ３類。７は床面出土の灰釉椀で、推定口径15.8cmの小器片。釉は漬け掛け。胎土は灰色の緻密な質で、釉色調は乳白色である。

遺構の時期　遺物は小器片ばかりであるが、甲斐型XI～XII期、10世紀後半頃と考えておきたい。

４号住居（第９図、第10図、写真22）

遺構の概要　造田による削平と暗渠排水による攪乱のため、北東隅だけが検出されたが、遺物は遺構周辺で比較的多く出土している。

カマドの概要　東壁南寄りで僅かな焼土と礫が検出された。周辺では遺物が集中して出土していることから、ここがカマドにあたるものと思われる。

出土遺物　１はカマド右側床面より出土した甲斐型坏で、推定口径14cm、器高4.8cmの５分の１個体分器片である。「東」の刻書がみられる。焼成後に線刻されたものである。胎土はＡ１類。２は覆土出土の甲斐型坏で、推定口径15.3cmの小器片である。胎土はＡ１類。３はカマド右側で出土した甲斐型坏で、推定口径15.5cmの小器片である。内面には暗文がみられる。胎土はＡ２類。４は土師質坏の底部片で、覆土より出土している。底部は回転糸切り未調整で、ヘラ削りは一切されない。胎土はＡ４類。５はカマド左側床面より出土した甲斐型坏で推定口径14.4cmの２分の１個体片。内面は黒色処理される。底部は回転糸切り後、外周をヘラケズリする。胎土はＡ４類。６は推定口径15.5cmの甲斐型小型甕で、口縁部が２分の１周する器片である。カマドと東壁のあいだから出土した。胎土はＢ１類。７はカマドより出土した甲斐型小型甕で、推定口径15cm。口縁部が２分の１周する器片である。胎土はＢ１類。８、11はカマドより出土した甲斐型甕の底部片である。胎土はともにＢ１類。９は東壁沿いで出土したロクロ整形小型甕の小器片で、推定口径15.8cm。胎土はＤ３類。10はカマドより出土したロクロ整形甕底部片で、胎土はＤ３類。色調は暗赤褐色。12は覆土より出土した手捏ね成形の甕で、推定口径は12cm前後。外面はヘラ削り、内面はナデ調整される。胎土はＥ２類。13は覆土より出土した甲斐型甕底部片である。胎土はＢ１類。14はカマド左側で出土した須恵器大甕胴部器片で、内面側がつるつるに磨耗しており、皿か何かに転用されているが、墨痕等はみられない。15はカマド手前で出土した羽釜器片で、推定口径30cm、鍔部長は４cm前後、鍔部厚は1.4cmである。胎土はＢ１類。鍔部と体部は接合しないが、胎土質から同一個体と判断し、図上で復元した。本住居にはこれ以外にも２個体分の羽釜鍔部が出土しているが、小器片であり図化できなかった。

遺構の時期　出土遺物は甲斐型Ｘ～XI期でまとまるため、９世紀後半頃と考えられる。

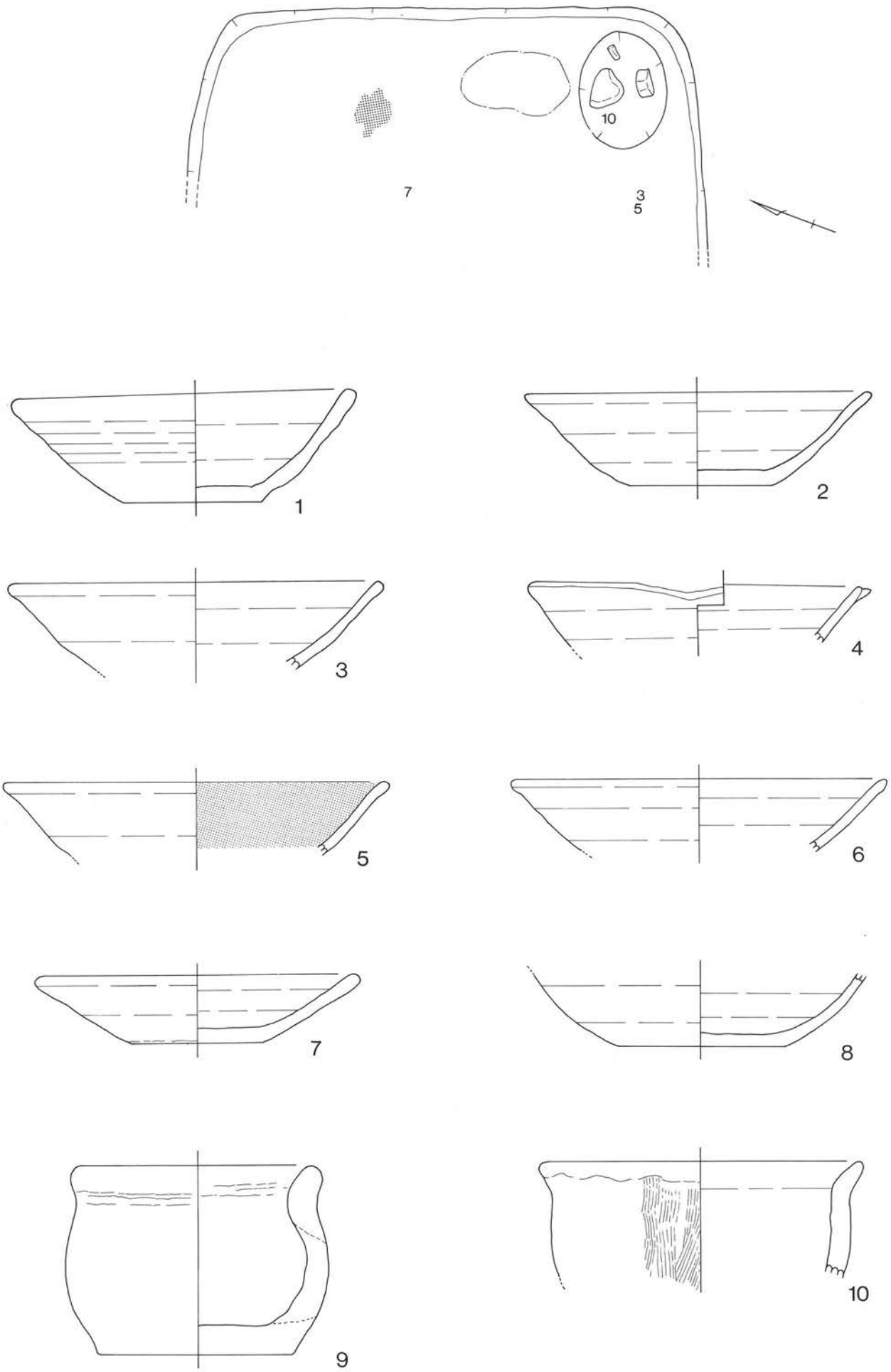
５号住居（第11図、写真23・24）

遺構の概要　掘り込みは比較的よく残っていた。南北3.8m×東西4.1m。床面が一部に残るが、周溝は検出されなかった。南西隅に深さ20cmほどの窪みがあり、住居に付属する施設と思われる。

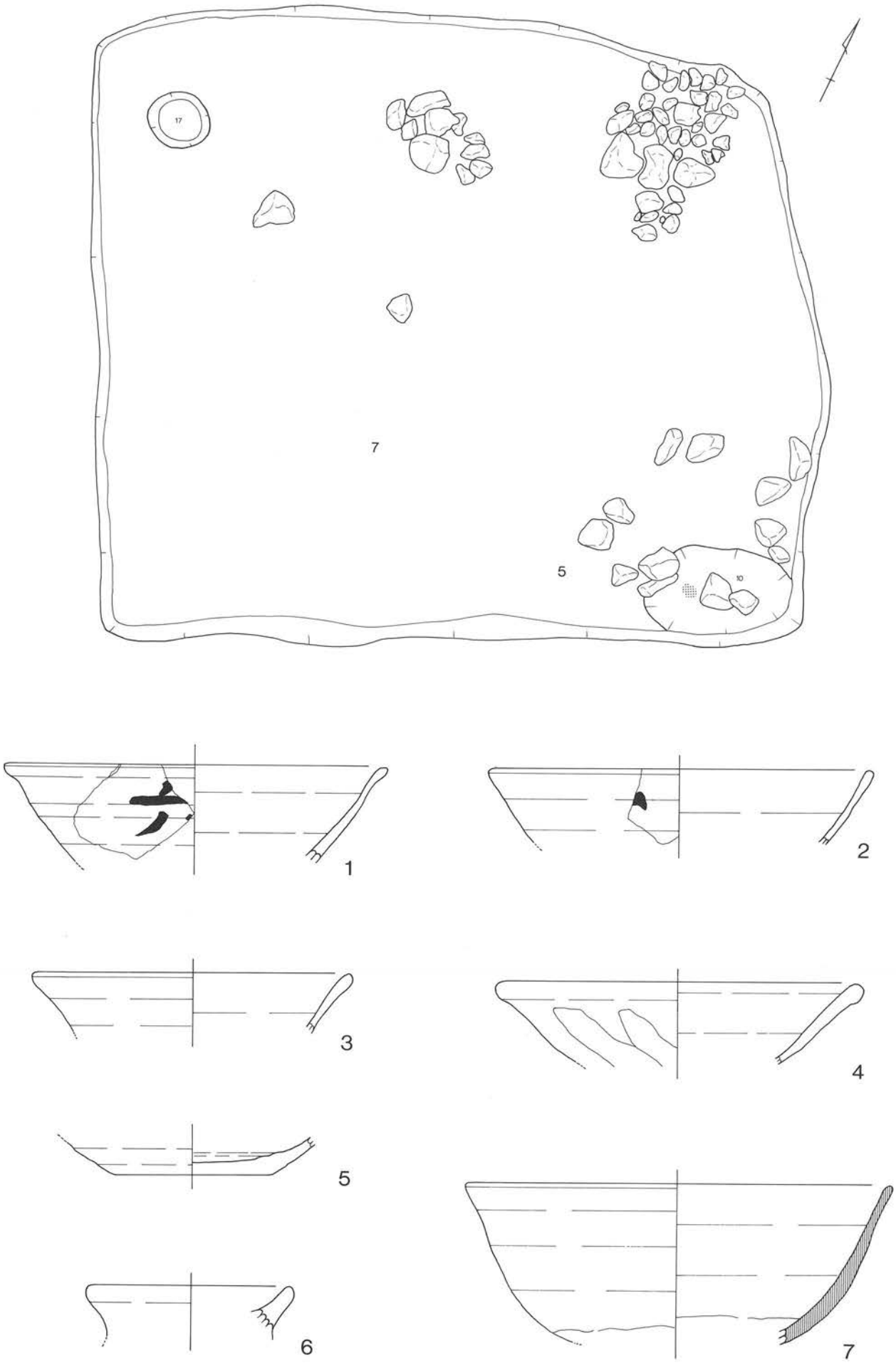
カマドの概要　南東隅は掘り込みと焼土が検出された。カマドを構築した礫などは一切検出されなかったが、ここがカマドと考えられる。

出土遺物　１は覆土出土の土師質坏小器片で、推定口径11cm。胎土はＡ１類。

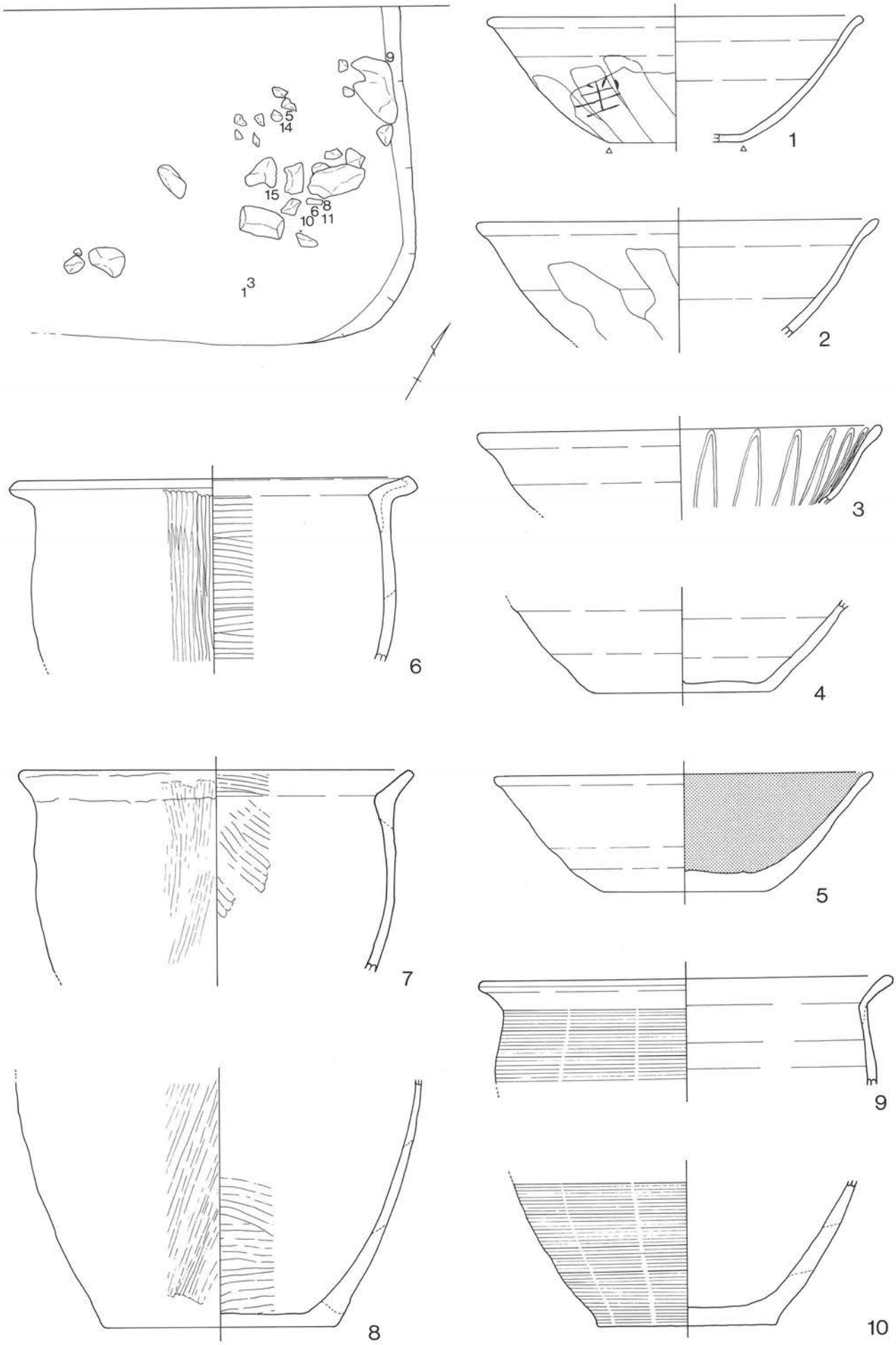
遺構の時期　確実に住居に属すると考えられる遺物はないが、カマド位置などから平安時代末、10世紀後半から11世紀前半ではないだろうか。



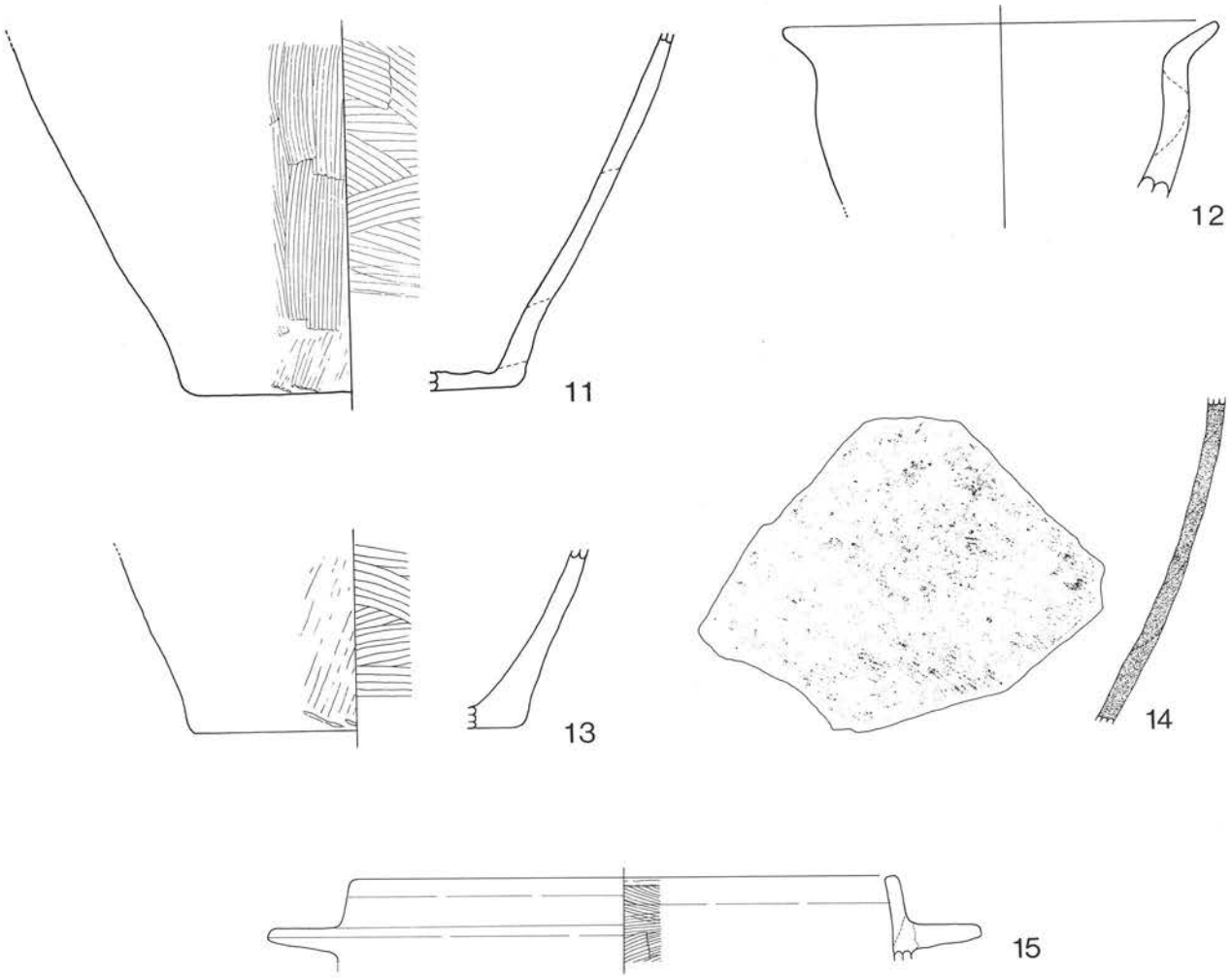
第７図　２号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



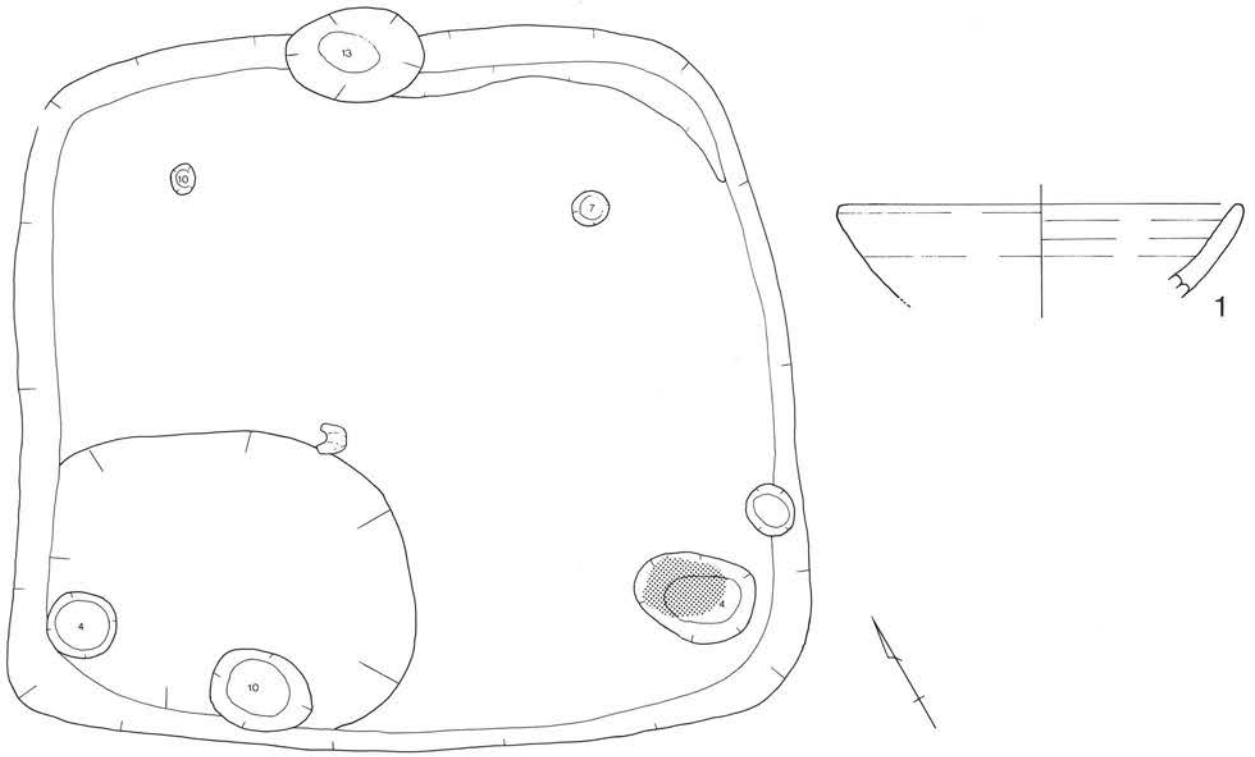
第8図　3号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第９図　４号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第10図　4号住居跡出土遺物(1/2,14.15のみ1/4)



第11図　5号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)

6号住居（第12図、第13図、写真23・24）

遺構の概要　遺存状態は良好で、床面は全面によく残り、周溝も北壁沿いで検出されている。住居内に礫がいくつかあるが、いずれも床面よりやや浮いている。礫に被熱痕、煤付着は認められなかった。

カマドの概要　東壁中央に位置する。焼土、掘り込みのほか、石組みと支石が検出された。

出土遺物　1はカマド出土の甲斐型坏で、推定口径17.5cmの小器片である。外面下半部は回転ヘラ削り、底部は全面をヘラ削りされる。内面には放射状暗文と渦巻き状の暗文の組み合わせがみられる。胎土はA1類。2はカマド手前で出土した甲斐型坏で、推定口径12.7cmの小器片である。胎土はA1類。3はほぼ完形の甲斐型皿で、住居北西隅で出土した。口径13.5cm。底部から外面下半部にかけて回転ヘラ削りされる。胎土はA1類。4は推定口径13.5cmの甲斐型皿で、覆土出土。底部から外面下半部にかけて回転ヘラ削りされる。胎土はA5類。5は覆土出土の皿で、推定口径12.2cm、3分の1個体分器片である。底部から外面下半部は手持ちのヘラ削り調整、内面には放射状の磨き痕が残る。胎土はA3類。6は覆土出土の坏で、推定口径15.7cmの3分の1個体分器片である。内面は黒色処理され、横方向の磨き痕が残る。胎土はC2類。7は覆土出土の坏で、推定口径12cmの小器片。内面は黒色処理される。胎土はC1類。9はカマド出土の甲斐型甕である。いずれの甕も胎土はB1類。10はカマド周辺で出土した甲斐型甕で、3分の2個体分の器片である。11はカマド横の壁沿いで出土した甲斐型甕底部で、胎土はB1類。

遺構の時期　甲斐型X期、9世紀後半頃と思われる。

7、8号住居（第14図、写真24）

遺構の概要　両住居跡とも北壁側のほんの一部だけが検出された。

カマドの概要　北壁沿いにほんの僅かな焼土が検出されている。

出土遺物　1は土師質坏底部器片で、全体に磨耗している。底部回転糸切り未調整で、胎土はA2類。2は8号住居焼土址より出土した土師質皿で、推定口径11.3cm、器高2.9cm。3分の1個体分器片である。底部は回転糸切り未調整。胎土はE2類。

遺構の時期　8号住居は2より平安時代末頃と思われる。7号住居も焼土址の位置から同様の時期だろうか。

9号住居（第15図、写真24）

遺構の概要　北西側のみが検出された。床、周溝は検出されなかった。

カマドの概要　東壁中央部と北壁中央部の2カ所で焼土が検出された。2時期にわたり使用された住居かもしれない。

出土遺物　1は北壁沿い焼土址わきから出土した硬質の須恵器坏で、推定口径14.2cmの3分の1個体器片である。胎土質は長石粒子が混じるややざらついた質で、色調は暗青灰色。

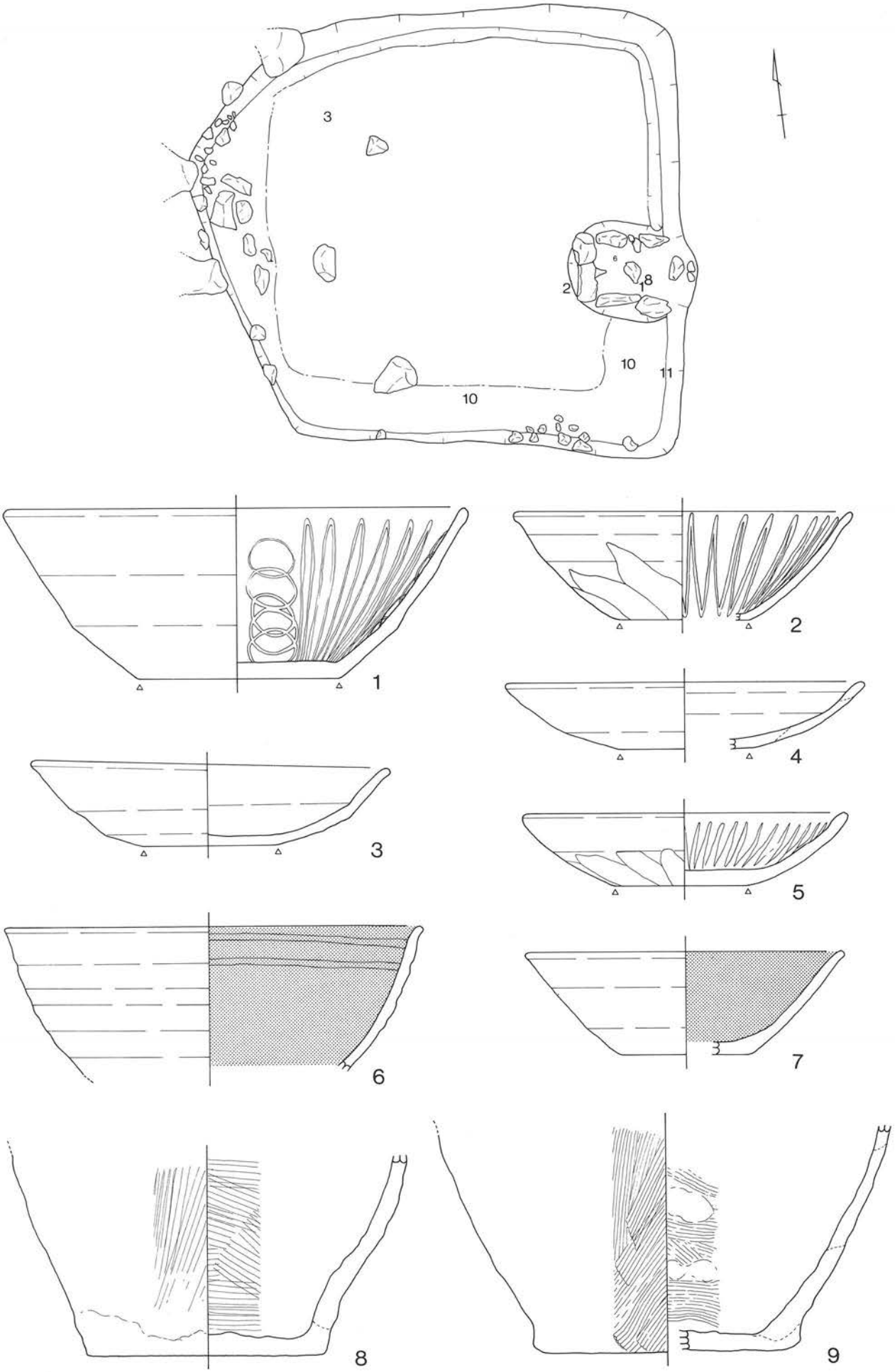
遺構の時期　焼土址がカマド跡であると仮定して、須恵器坏から9世紀前半が北壁沿いカマドの時期と思われる。東壁沿い焼土址の時期は不明。

10号住居（第16図、第17図、写真25・26）

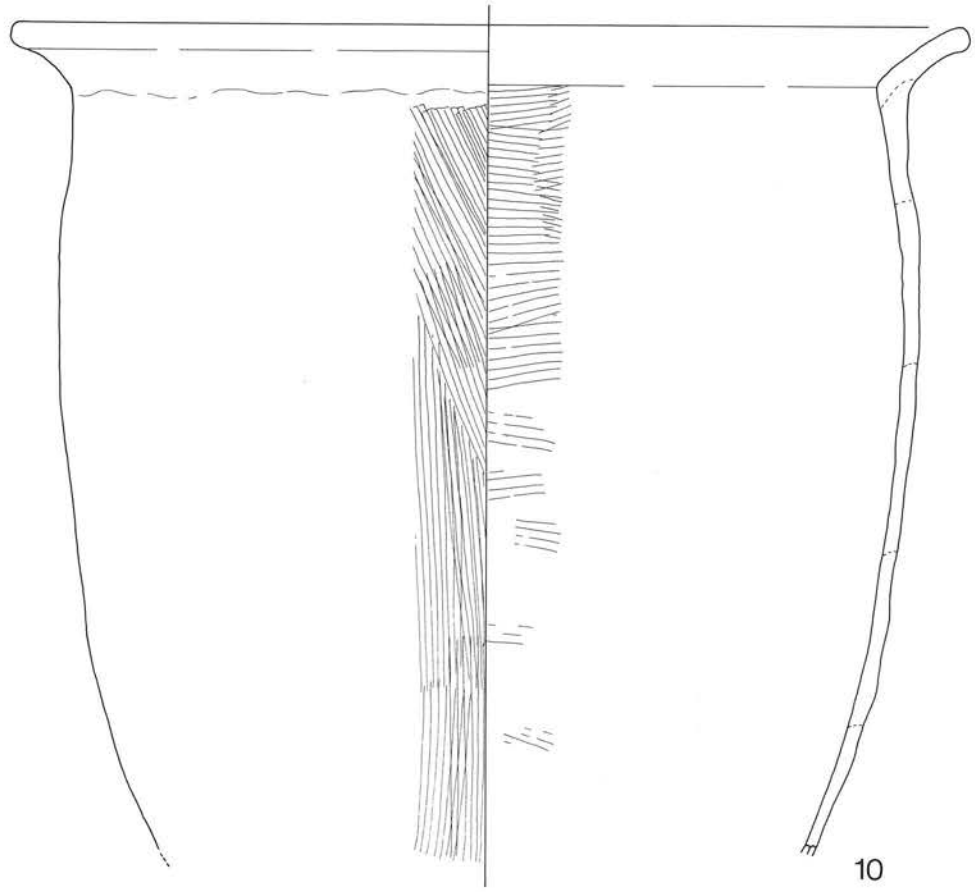
遺構の概要　4.4m×5.1mの方形の平面形をもつ。周溝、床は検出されなかった。

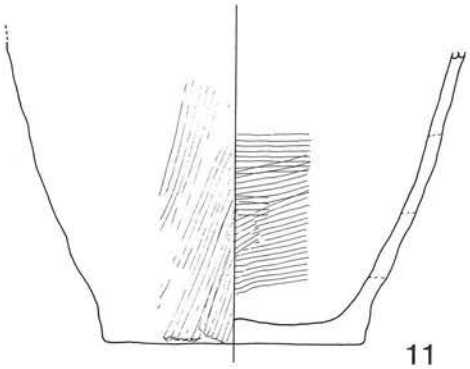
カマドの概要　東壁中央部で焼土と掘り込みが検出され、遺物が集中した。

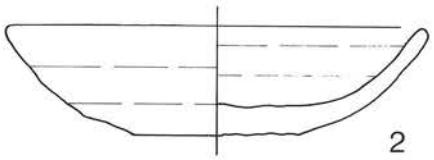
出土遺物　1はほぼ完形の土師質坏で、カマドより出土している。口径12.6cm、器高4.3cm、底径5.2cm。胎



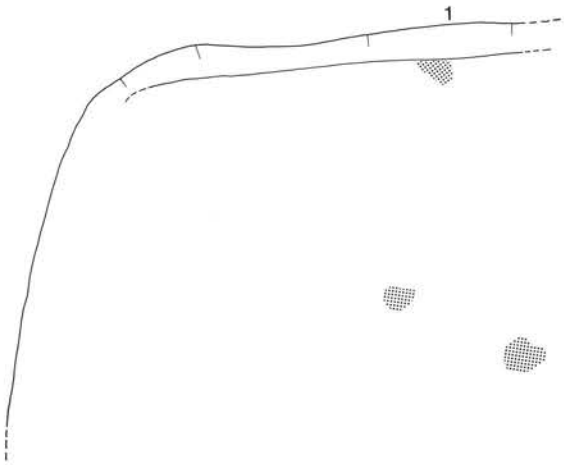
第12図　6号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)

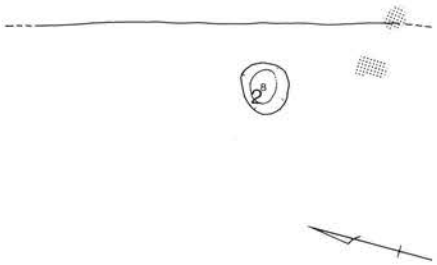




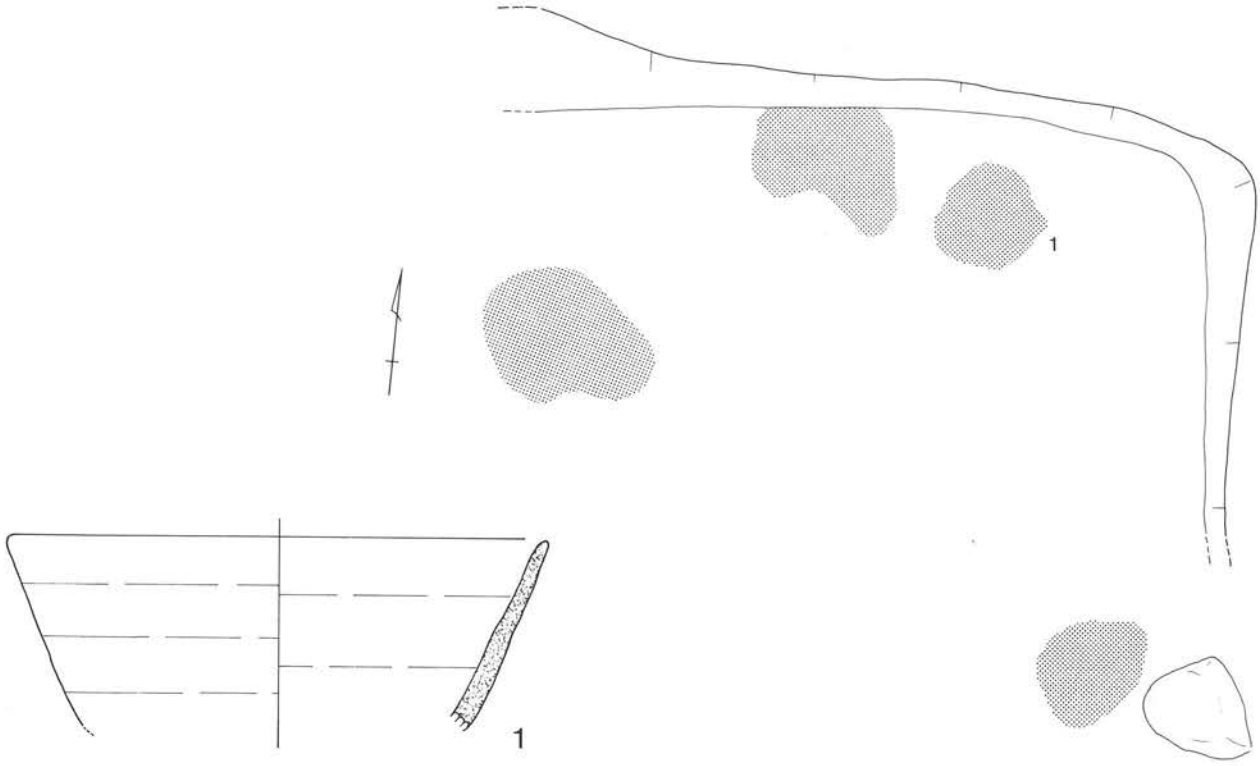


第13図　6号住居跡出土遺物(1/2)

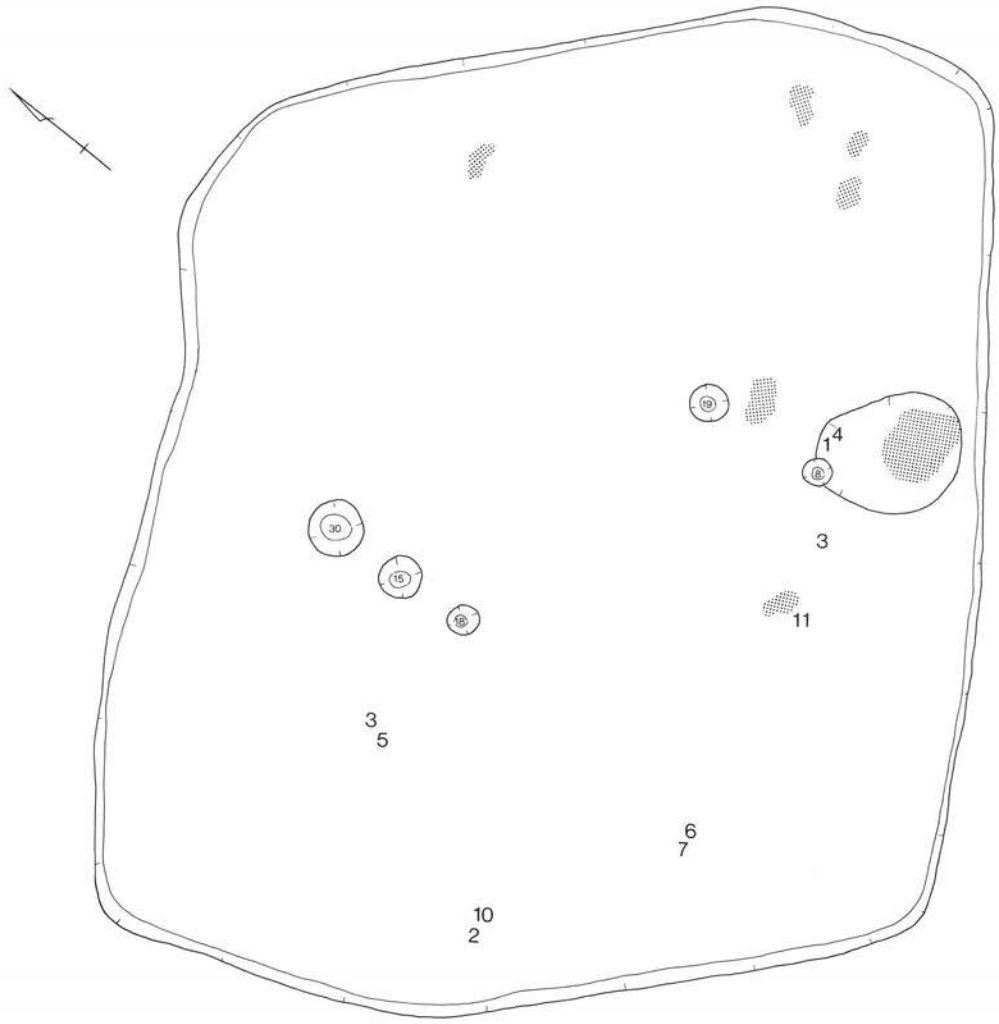




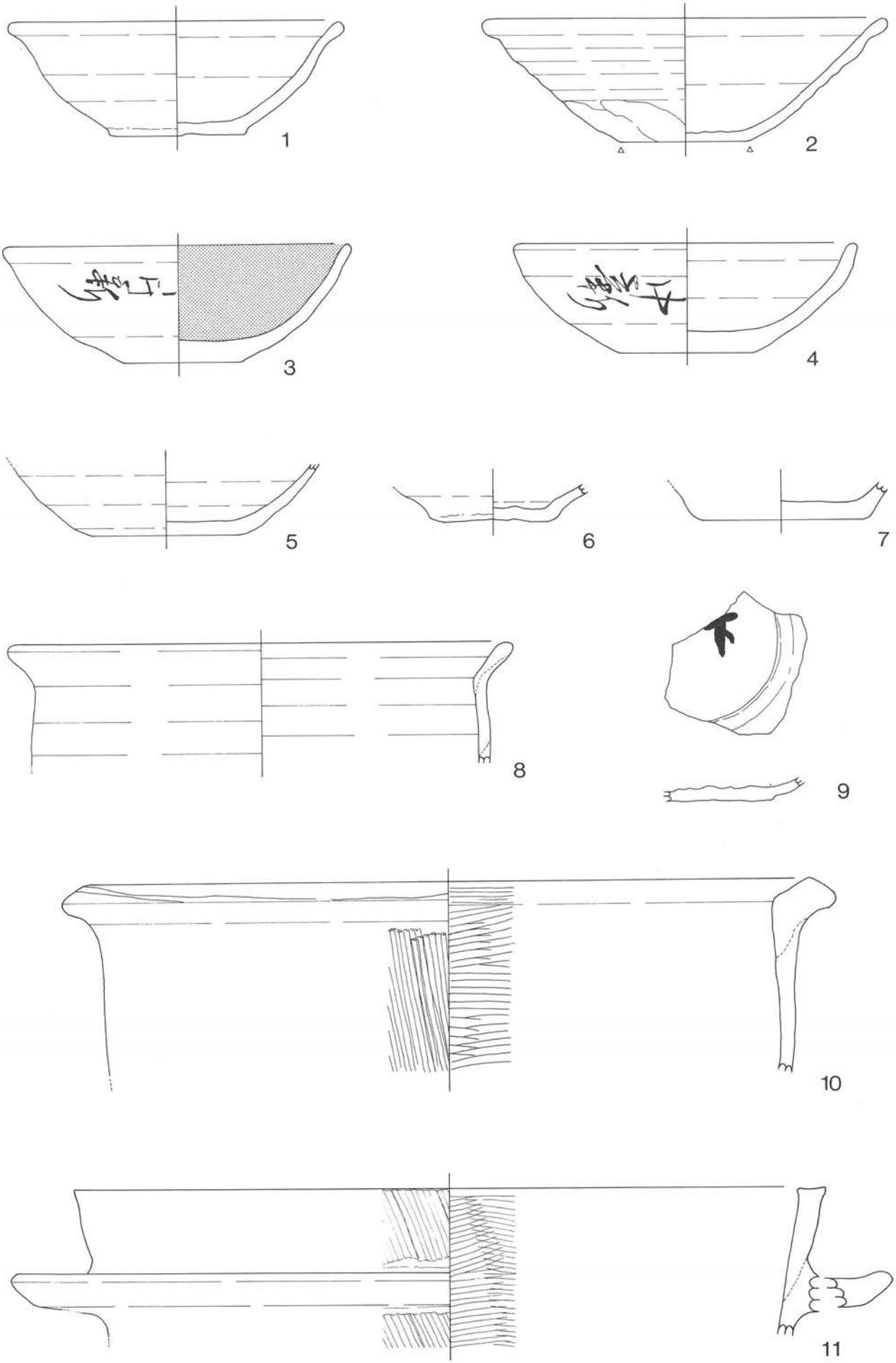
第14図　7・8号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第15図　9号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



第16図　10号住居跡(1/40)



第17図　10号住居跡出土遺物(1/2)

土はＡ４類。２は３分の２個体分の甲斐型坏で、口径15cm、器高4.8cm。底部と外面下半部は手持ちヘラ削り調整。胎土はＡ１類。３はカマド手前と住居中央あたりで出土した坏で、２分の１個体分の器片である。口径は13.1cm、器高4.4cm、底径4.4cm。４と同様の整形技法、胎土質で、内面は黒色処理される。「中新」の墨書がある。４はカマド出土の坏でほぼ完形である。口径は12.8cm、器高4.2cm、底径５cm。胎土はＣ３類。同じく「中新」の墨書がある。５は土師質坏底部片で、胎土はＡ２類。６は底部のみの土師質坏片で、底部は回転糸切り未調整である。胎土質はＣ５類。７は土師質坏底部片で、底部は回転糸切り未調整である。胎土質はＡ２類。９は土師質坏で、「下カ」の墨書が底部に描かれる。胎土はＣ３類。８はロクロ整形小型甕で、推定口径19cm、胎土はＤ４類。10は土師質甕で、胎土はＢ１類。11はカマド横で出土した羽釜で、推定口径は28cm前後、胎土はＢ２類。鍔部は胎土質より同一個体と判断し、図上にて接合復元した。

遺構の時期　甲斐型XII期、10世紀後半頃と思われる。

11号住居（第18図、第19図、写真26）

遺構の概要　5.5m×５mで、掘り込みは浅く遺存状態は良くない。周溝は南東隅と北西隅で検出された。固くしまった床面が南半で検出された。住居中央で周溝状の溝が床面を切るようにして検出されたが、いかなる施設なのか確認できなかった。ピットとの切り合い関係は不明である。

カマドの概要　北壁中央部と北東隅の２カ所で僅かながら焼土が検出された。

出土遺物　１は推定口径11.6cmの軟質須恵器坏小器片で、床面高で出土した。焼成は悪く、色調は淡灰色である。２は住居中央床面高で出土した軟質須恵器坏で、３分の２個体分の器片である。推定口径は12.5cm、器高4.8cm、底径6.8cm。１と同様、焼成が悪く軟質で色調は淡灰色である。３は覆土出土の硬質の須恵器坏で、推定口径15cmの小器片である。焼成は良好で、胎土は長石粒子が混じるややざらついた質である。４は床面出土の軟質須恵器坏蓋で、推定外径15.8cm、高4.2cmの３分の１個体分器片である。焼成はやや悪く軟質で、色調は淡灰色である。６は床面出土のロクロ整形小型甕で、推定口径15.8cmの小器片。胎土はＤ１類。５、７は覆土出土のロクロ整形小型甕で、推定口径19cmの小器片である。胎土はＤ１類。８は推定口径17.5cmの甲斐型小型甕の小器片、10は推定口径24.2cmの甲斐型甕である。胎土は両者ともＢ１類。９は東壁沿いで出土した須恵器壺と思われる底部片で、内外面ナデ調整。釉は全面に厚くかかり、焼成は良好である。胎土はやや粗い。

遺構の時期　須恵器坏より８世紀末～９世紀初頭頃と思われる。

12号住居（第20図～第22図、写真27・28・29・30・31）

遺構の概要　13号住居を切る。固くしまった床面が良好に検出されたが、周溝は確認できなかった。本遺跡中では３号住居と並んで大きな住居跡である。東西長5.8mほどである。

カマドの概要　東壁南寄りで比較的原形をとどめて検出された。掘り込みはほとんどみられないが、袖石が左右とも立った状態で残っている。

出土遺物　13号住居と３分の１ほどが切りあっているため、遺物は出土した位置と高さにより、12、13号住居それぞれに分離した。１は覆土出土の甲斐型坏で、推定口径13.5cmの小器片である。胎土はＡ１類。２は覆土出土の甲斐型皿小器片で、推定口径13.8cm。墨書があるが、読みは不明。Ａ２類。３は床面出土の甲斐型坏と思われる底部片である。胎土はＡ３類。４は甲斐型甕で推定口径28cm。

胎土はＢ１類。４は13号住居遺物の可能性もある。５は覆土出土のロクロ整形甕で、推定口径28cmの小器片。胎土はＤ２類。６は床面出土のロクロ整形甕底部片で、推定底径９cm。胎土はＤ１類。７は住居中央覆土出土の土師質皿で、底部は回転糸切り未調整。胎土はＥ２類。８は推定口径12cmの土師質皿小器片で、推定口径12cm。胎土はＡ４類。覆土出土。９は推定口径11cmの土師質皿小器片で、胎土はＡ４類。10は覆土出土の土師質皿小器片で、推定口径10cm。胎土はＣ１類。11、12も軟質須恵器坏蓋の小片で、推定外径はそれぞれ18cm、17.8cm。13は床面出土の須恵器坏蓋の小器片で、推定外径15.8cm。焼成は良好、硬質で、色調は濃い青灰色。14は軟質須恵器坏蓋で床面出土。推定外径15.8cm。焼成はまずまずだが、色調はやや淡い青灰色。15、17は覆土出土の軟質須恵器坏で、推定口径16cmと推定底径６cmの小器片。16は覆土出土の軟質須恵器坏の底部片で、推定底径７cm。回転糸切り未調整、焼成は不良、色調は淡青灰色である。18は覆土出土の軟質須恵器高台付坏底部片で、底径９cm。回転糸切り後、高台を付けている。焼成は悪く軟質で、色調は淡灰色である。25は住居中央床面高で出土した推定口径18.2cmの緑釉陶器小器片で、釉薬色調は緑色で、濃淡がある。焼成はやや不良で軟質。26は覆土出土の緑釉陶器で、推定口径20cmの小器片。焼成は良好で硬質、釉薬色調は淡緑色と淡黄色。器面は釉薬によりつやつやしている。内面下半部には斜めのヘラ磨きと思われる痕跡がみられる。27は住居中央床面高で出土した灰釉椀で、体部と底部はやや離れて出土した。接合はしないが胎土質より同一個体と判断し、図上で復元した。推定底径15.3cm、器高6.6cm、底径6.5cm。付け高台、釉薬は漬け掛けである。28はほぼ完形の灰釉椀で、口径15.6cm、器高７cm、底径7.6cm。釉薬は漬け掛け、焼成はやや軟質である。胎土はキメの細かい緻密な質で、色調は淡灰色。付け高台。29はカマド出土の灰釉椀で、口径14.7cm、器高5.9cm、底径7.1cmの３分の２個体分器片である。付け高台。30はカマド左側で出土した灰釉椀で、推定底径16cmの小器片である。胎土はやや粗い。31、32は覆土出土の灰釉椀小器片で、推定口径15cmと13.9cm。以上の他、置きカマドと思われる器片がある。

遺構の時期　甲斐型土師器はXI～XII期と思われるが、いずれも小器片で流れ込んだものと考えられる。灰釉、須恵器からは10世紀後半頃と思われ、この時期を住居の時期としておきたい。

13号住居（第20図、第23図、写真27・28・29・30）

遺構の概要　12号住居に切られる。東西長4.6mほど。北壁沿いには周溝が検出されたが、固くしまった床面は残らない。ピットとの切り合い関係は不明。

カマドの概要　東壁中央あたりで焼土と石組みが検出された。袖石はほぼ原位置をとどめる。

出土遺物　１は住居中央床面高で出土した甲斐型坏で、３分の２個体分の器片である。口径9.8cm器高3.8cm、底径5.3cm。底部は回転糸切り未調整、外面下半部はヘラ削り調整、内面は放射状暗文がある。胎土はＡ５類。２は西壁沿いで出土した甲斐型坏で、口径11cm、器高４cm、底径5.2cm。底部から外面下半部にかけてヘラ削り調整、内面には放射状暗文がみられる。胎土はＡ１類。３はほぼ完形の大型坏で、口径19.8cm、器高８cm、底径8.5cm。底部は糸切り後ヘラ削りされる。外面下半部は回転ヘラ削り調整。内面は黒色処理される。胎土はＡ５類。４は軟質須恵器高台付坏底部片である。５は軟質須恵器坏で、推定口径11.6cm、器高4.4cm、底径６cmの４分の１個体分器片である。底部は回転糸切り未調整。６は軟質須恵器坏で、カマドより出土。推定口径12.2cmの小器片である。７は覆土出土の皿で、推定口径12cmの小器片である。胎土はＡ４類。８はロクロ整形甕底部片である。胎土はＤ２類。９は覆土出土の甲斐型小型甕で、推定口径20cmの小器片。胎土はＢ１

類。10はカマドわきより出土した甲斐型小型甕で推定口径22cmの小器片である。胎土はＢ１類。11はカマド出土の甲斐型小型甕で、推定口径18cmの小器片である。胎土はＢ１類。12は甲斐型甕で推定口径28cmの小器片である。13は推定口径30cmの甲斐型甕小器片である。胎土はともにＢ１で推定口径28cmの小器片、13は推定口径30cmの甲斐型甕小器片である。胎土はともにＢ１類。

遺構の時期　出土遺物の多くは甲斐型Ⅷ期でまとまるため、９世紀前半頃と思われる。

２　遺構外出土遺物（第24図）

平安時代の遺構外出土遺物を記す。１は０－７グリッド出土の土師質甕で、推定口径22.7cm。０－７グリッドには焼土址があり甲斐型Ⅷ期頃の住居跡があった可能性があるが、遺構としては検出されなかった。２はＵ－４グリッド出土のロクロ整形甕底部片で、底径8.6cm。３はＵ－４グリッド出土の須恵器坏底部片で、推定底径７cm。４は出土位置不明の須恵器坏底部で、推定底径６cm。５はＵ－４グリッド出土の須恵器坏蓋で、推定外径15cmの小器片である。焼成はやや悪く軟質で、色調は灰白色である。６はＵ－４グリッド出土の須恵器壺口縁部片で、推定口径27cm。７はＴＰ68出土の須恵器凸帯付壺片である。緻密な胎土で焼成は良好硬質、色調は濃青灰色。

その他、平安時代と思われる土坑３基がＲ－８グリッドで検出されているが、報告は第５章にゆずる。

第５章　その他の時期の遺構と遺物

１　遺構と遺物（第25図、第26図、写真30・31）

ここで報告する遺構外遺物は一点のみで25図－２はＤ－８グリッドより出土した、器面にくっきりと条痕が残る器片である。胎土はやや大きめの鉱物粒子が混じる砂っぽい質で、色調は乳灰色。弥生時代中期頃のものと思われる。

また、遺構についてはＲ－８グリッドで土坑が集中して検出された。遺物は出土しているが土坑の時期を特定できるのは１号土坑くらいである。

１号土坑　Ｒ－８グリッドで検出された古墳時代前期と思われる土坑で、Ｓ字口縁甕が出土している（１）。甕はほぼ完形、横倒しの格好で土坑覆土上部で出土した。覆土は黒褐色の粘質土。

２号土坑　縄文時代中期末葉から後期と思われる土器片（７～10）が出土している。黒褐色土に黄褐色砂質土が混じる。

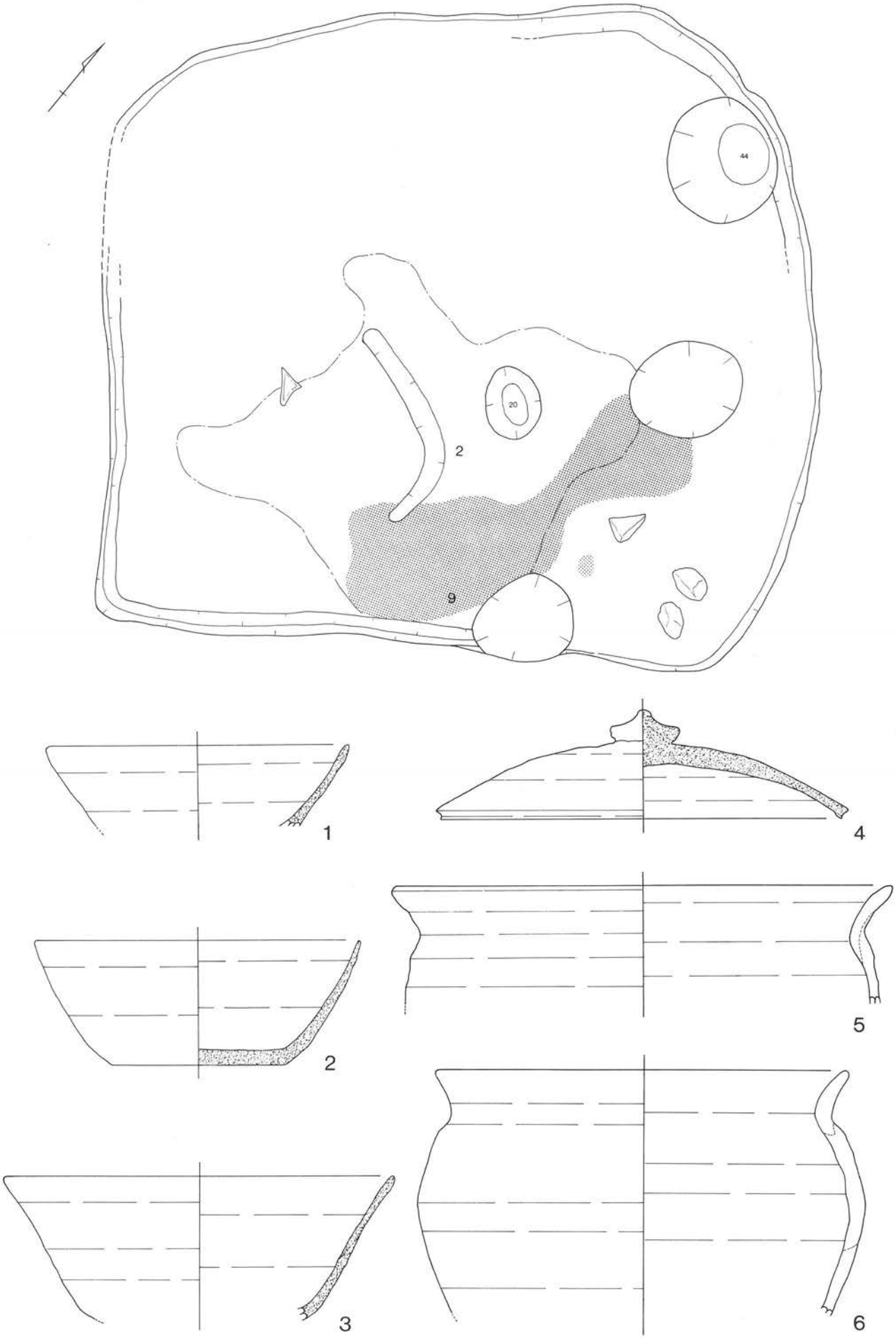
３号土坑　覆土より縄文時代中期末葉と思われる同一個体の土器片数点（５・６）と平安時代の土器片数点（３）が出土した。黒褐色土に黄褐色砂質土が混じる覆土。

４号土坑　縄文時代後期と思われる土器小片数点と底部（４）が出土した。覆土は３号土坑と同様である。

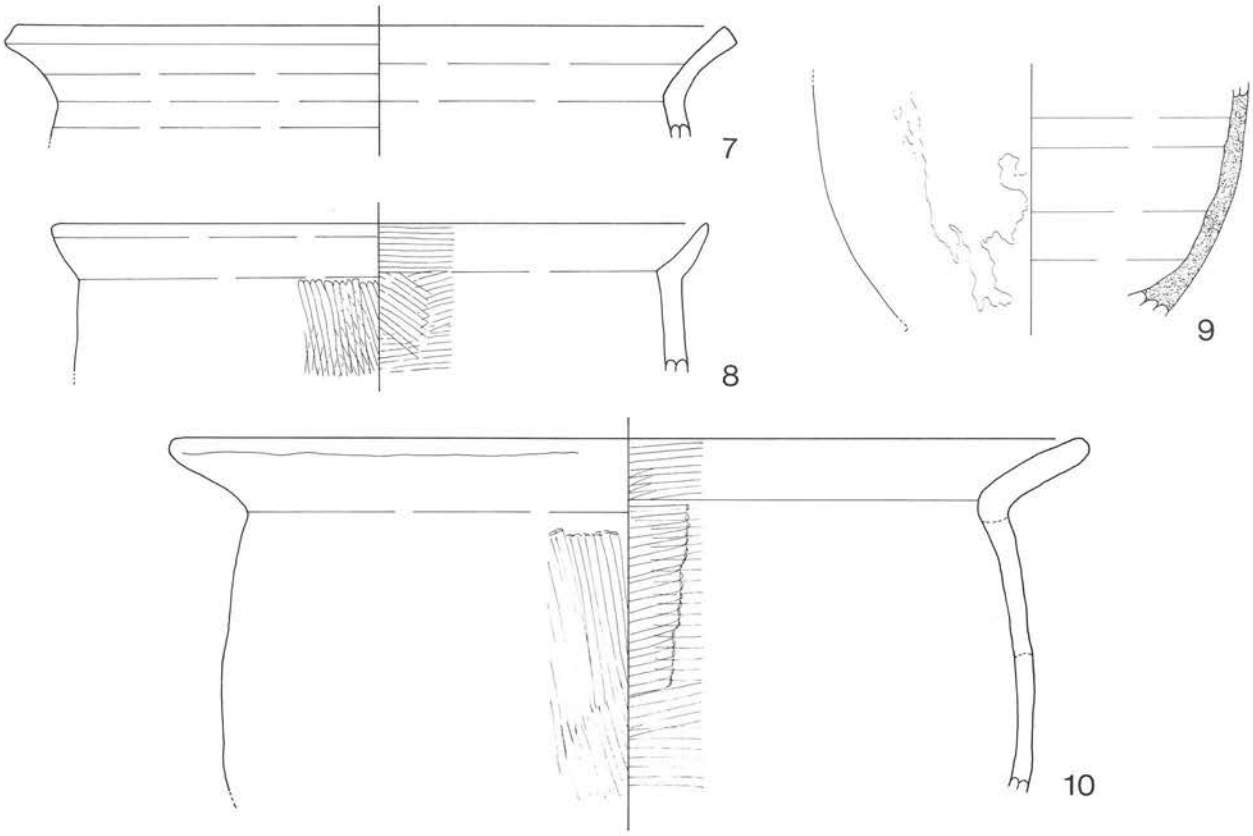
５号土坑　斜めに掘り込まれたピットで、人為的なものか不明。出土遺物なし。黒色の粘質土。

７号土坑　灰色のしまりがない覆土で、比較的新しい時期の土坑と思われる。出土遺物なし。

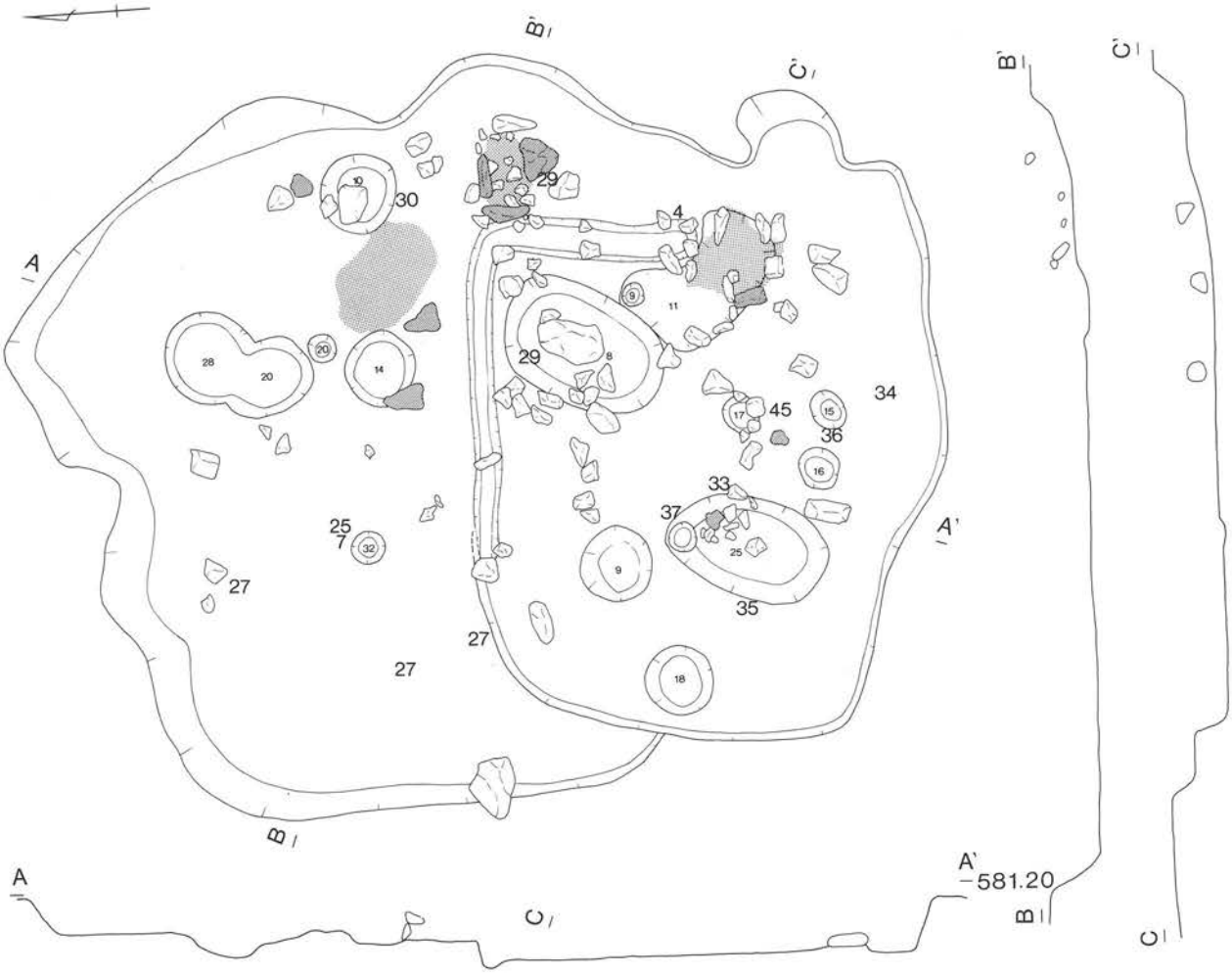
以上の土坑の他、ピットが検出されたが、建物址を構成する組み合わせは確認できなかった。



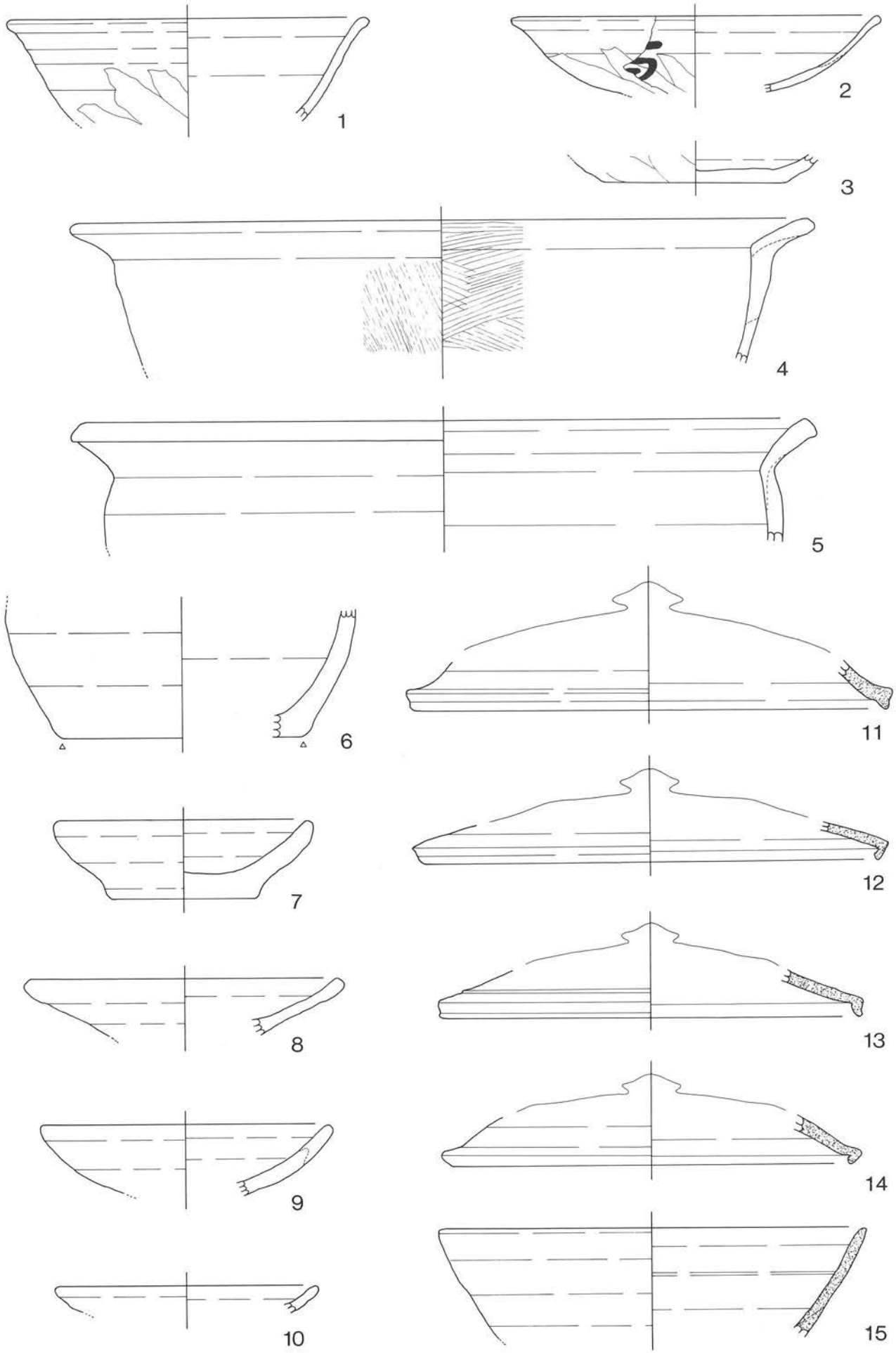
第18図　11号住居跡(1/40)及び出土遺物(1/2)



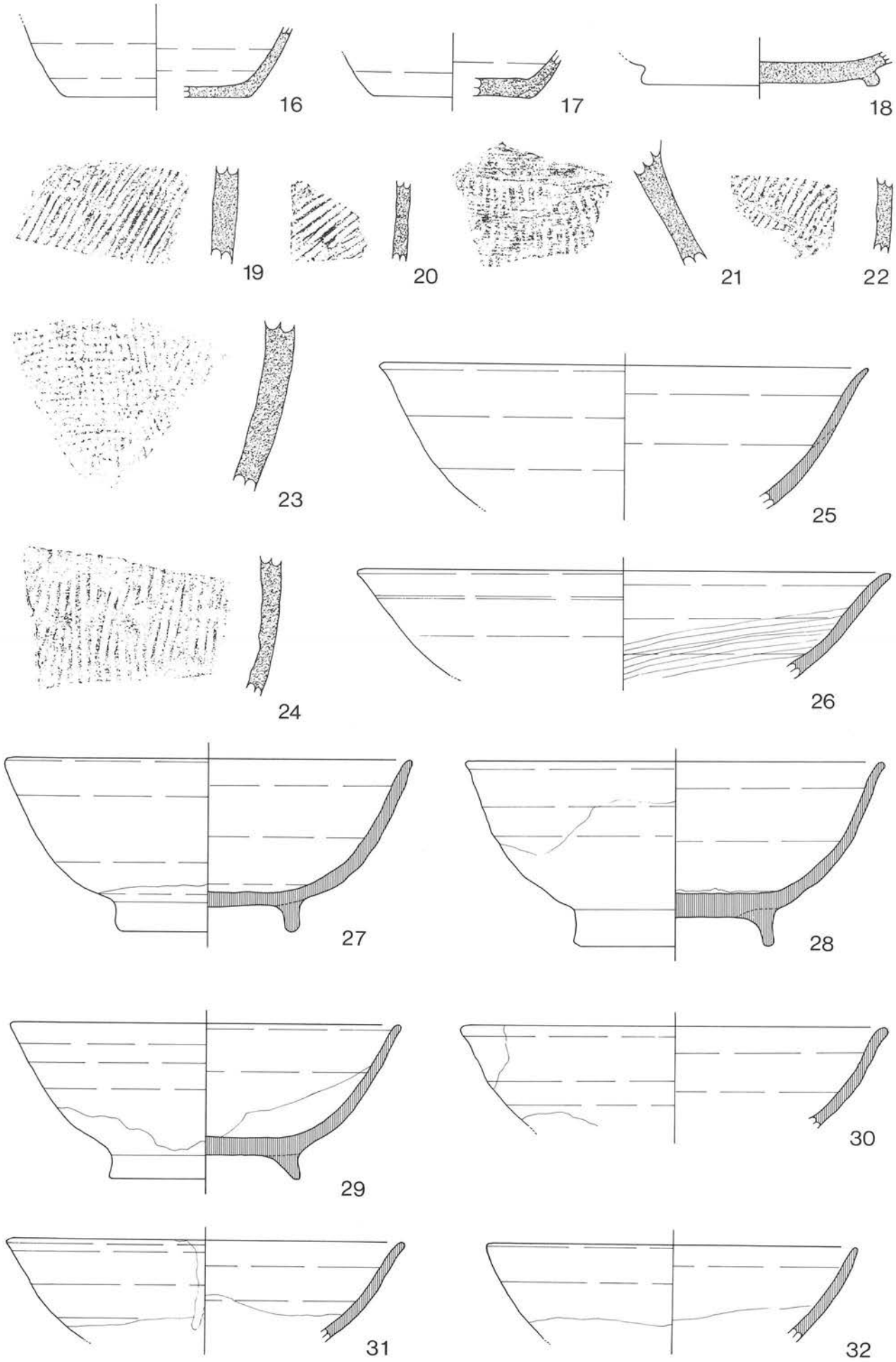
第19図　11号住居跡出土遺物(1/2, 9のみ1/3)



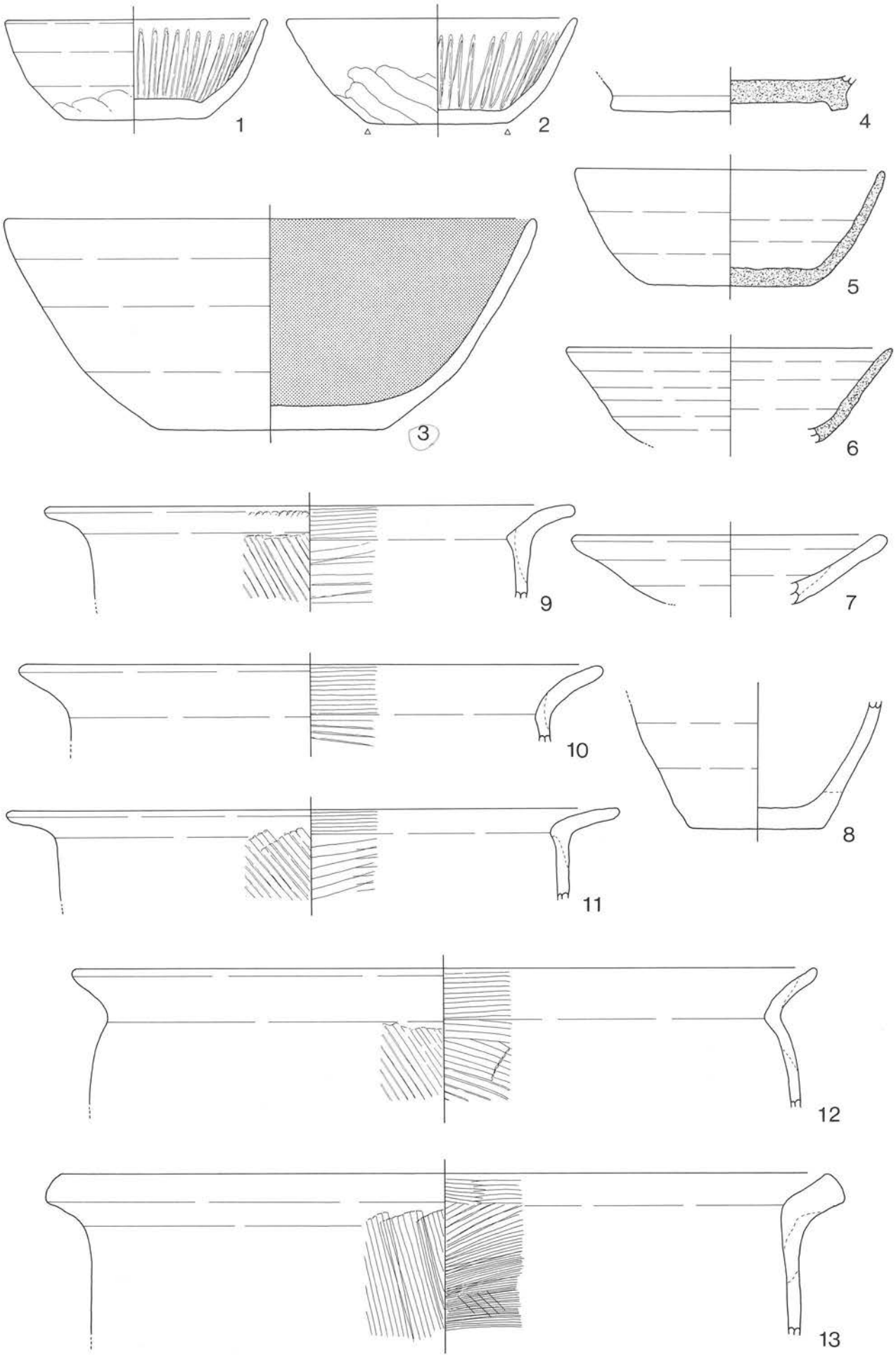
第20図　12・13号住居跡(1/60)



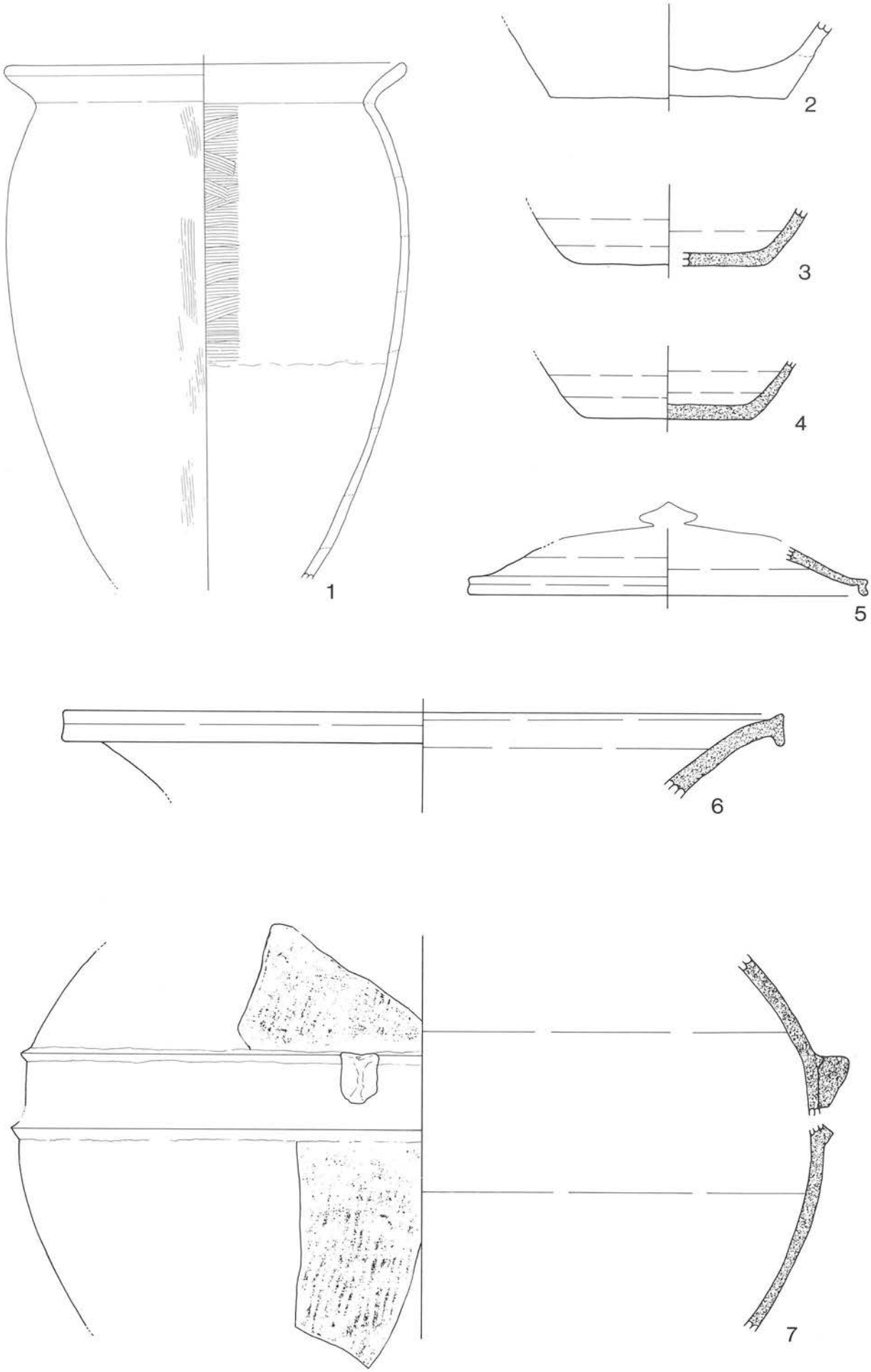
第21図　12号住居跡出土遺物(1/2)



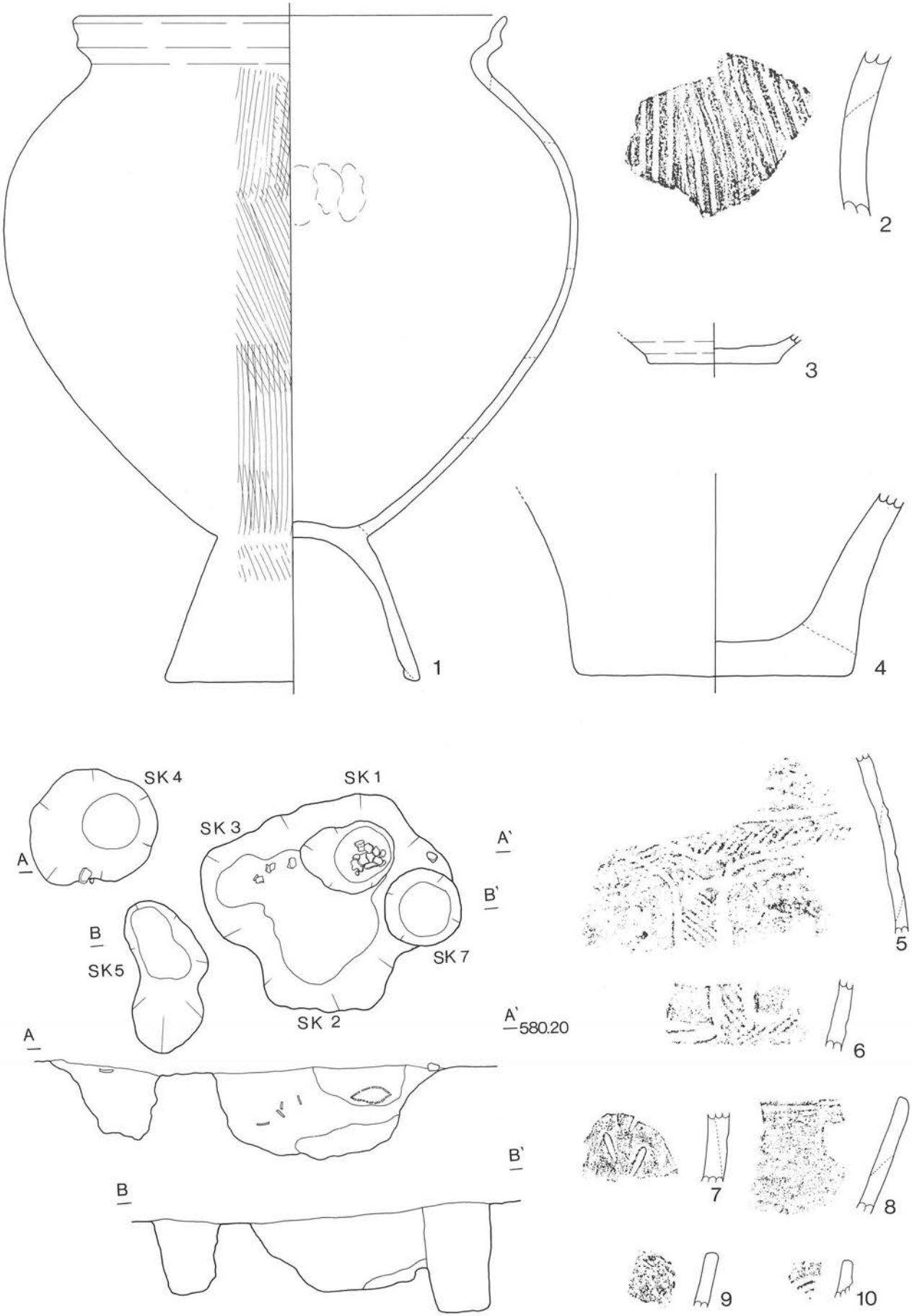
第22図　12号住居跡出土遺物(1/2)



第23図　13号住居跡出土遺物(1/2)



第24図　遺構外出土遺物(1/2，1のみ1/3)



第25図　その他の時期の遺構(1/40)と遺物(1/2, 5～10 1/3)

第26図　土坑位置図(1/90)

第6章　ま　と　め

以上の報告のとおり、高台・中谷井遺跡、村之内II・III遺跡は、平安時代を主体とする集落遺跡である。どちらも遺構の遺存状況に恵まれなかったが、高台・中谷井遺跡では遺構外ではあるが多くの縄文時代の遺物が出土し、村之内II・III遺跡では鍛冶関連遺構が検出されている。これら特に注意を引く点について、ごく簡単ではあるが考察を加えてみたい。

縄文時代　三十稲場系土器（注1）

高台・中谷井遺跡では、縄文時代中期後半から後期後半までの遺構外出土土器が得られた。特に県内での出土例があまり知られていない三十稲場式の影響を受けた土器が、比較的良好な形で出土したことは注目されよう。三十稲場式は新潟県及び福島県南西部を中心に分布する後期初頭に位置づけられる形式であるが、その古段階は称名寺II式との併行関係が確認されており、北陸地方のみならず広く東北南部から中部地方西部、関東地方南部にまで出土例がみられる(田中1989)。山梨県に隣接する長野県、神奈川県などでも出土例があることから本県でも当然その影響がみられると予想されるが、本県での出土例はあまり多くない。管見に触れた県内の出土事例は次のとおりである。

須玉町上ノ原遺跡　B46号土坑で地文に円形刺突文が施文される称名寺II式から堀之内I式と思われる把手付深鉢が出土している(見学会資料)。胎土は在地系と変わりなく三十稲場式そのものではないらしいが、北陸地方の影響、交流を示す資料と考えられよう(櫛原功一氏のご教示による)。

高根町川又坂上遺跡　7号址より把手付の広口壺形土器が出土している。三十稲場式特有の刺突文はみられないが、器形に三十稲場式の影響を感じさせる例である。列点文が施文されていることから称名寺式末から堀之内I式頃のものと思われる。

小淵沢町平出遺跡　7J住出土の小器片に円形刺突文を地文とする堀之内I式土器片がみられる。報文に詳細な報告がないため拓影から判断するしかないのであるが、8の字形の貼付文を口縁部に施し、その下に刺突文があるように見える。平出遺跡は中期末葉の遺構を中心とする遺跡であるが、後期称名寺式から堀之内式の遺構外遺物が出土している。三十稲場式そのものというより、その影響を感じさせる例である。

都留市住吉遺跡　三十稲場式古段階を思わせる広口深鉢の小片が出土している。肩部に鍔状の太い隆帯を貼付け、円形刺突文を施文する。しかし、高台・中谷井遺跡と同じく、器形は三十稲場式そのものとは異なり、関東・中部地方の中期末葉から後期初頭にかけてみられる広口壺に近い。胎土は在地のものか不明であるが、三十稲場式の搬入品というより影響を受けた例と考えられよう。

三十稲場式が客体的に分布する他地域と同様、本県でも出土例は決して多くないようである。未報告の資料もあるものと思われるが、三十稲場式はきわめて目立つ土器であるため、見逃されていることは少ないと思われる。本県での三十稲場式の影響を受けた土器は、本遺跡と上ノ原遺跡で確認できたとおり、在地系胎土による模倣(三十稲場式そのものの搬入品ではない）というあり方を示すようである。三十稲場式の影響は本県北西部と南東部両端で確認されたわけで、今後後期初頭の遺跡を調査するにつれて、資料数は増加するものと思われる。

鍛冶関連遺構

村之内Ⅲ遺跡１号住居では羽口、鉄滓が出土している。県北西部は鍛冶遺構、鍛冶関連遺構が多く分布する地域であるが、茅ヶ岳山麓でのこうした遺構の検出は初めてのことである。県内の鍛冶遺構、鍛冶関連遺構については既に保坂康夫氏の集成論考（保坂1992）があり、ここではそれら先学の成果をもとに、１号住居の評価をしてみたい。

１号住居を鍛冶に関連した遺構とみる第一の点は、羽口２点、鉄滓、鉄滓の付着した土師器片の出土があったことである。さらに鍛冶行為とは直接関連しないが、１号住居には他の住居とは明らかに異なるいくつかの要素をみることができる。それは４点の灯明皿、墨書された４点の土師器片、完形土師器の多さである（３分の１個体まで含めると８点になる）。

遺構の特徴としては住居内に浅い窪み、小ピットがみられることが挙げられる。またカマドは、他の住居のカマドの遺存状態が悪いため比較できないが、焼土量が多くカマドを構築したと思われる礫はやや被熱して破砕しており、平安時代住居のカマドとしては被熱の具合が高いと考えられよう。一方、鍛冶遺構の決め手となる金床石や被熱、硬化した床面は検出されなかったものの、焼土と炭を多量に散在する床面がカマド右側で検出されている。

以上のような１号住居の特徴を保坂氏の鍛冶遺構の分類に沿って解釈すると、鍛冶施設が存在する「地床鍛冶炉型」ととらえることができる。金床石がおそらくは移動式で住居内に残されていないことも宮間田遺跡47号址と同様である。地床鍛冶炉が壁面に近い箇所に存在することは当然火災の心配があるわけで、床面の被熱度もさほどに高いわけではなく、本当に地床鍛冶炉と解してよいのか若干の疑問も残る。住居中央の浅い掘り込みは貯蔵穴などととらえるのは無理があるが、移動式とはいえやや大きめの金床石を定置するためのものと考えることはできよう。掘り込みの規模は宮間田33号住居と近い。また、掘り込みと住居南東隅の焼土たまりとのあいだにスケールと炭が散在していたこともそうした考え方を支持するものと思われる。従ってこの掘り込みを金床石定置用と考えれば、１号住居は「金床石敷設型」ともとらえることができる。

保坂氏は金床石や地床炉などの明確な鍛冶施設を有する鍛冶遺構が甲斐型Ⅶ～Ⅻ期にみられるとし、「地床鍛冶炉型」の消滅時期を甲斐型Ⅷ期頃、「金床石敷設型」の消滅時期を甲斐型Ⅺ期頃とそれぞれ想定している。

ここでは、１号住居を金床石を敷設する地床鍛冶炉型と考え、茅ヶ岳山麓では甲斐型Ⅻ期まで存続する可能性を指摘しておきたい。

以上、思いつくままに簡単に考察してみた。浅学ゆえにとんでもない思い違いをしているのではとおそれているが、先学諸氏のご叱正、ご教示を乞いたい。

注１　ここでは三十稲葉式の影響を受けた土器という程度の意味で用いている。

参考文献

雨宮正樹　1983　「高根町湯沢遺跡」『山梨考古』10　山梨県考古学協会

雨宮正樹　1984　『東久保遺跡』　高根町教育委員会

石井　寛　1984　「堀之内２式土器の研究（予察）」『調査研究収録』５　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

石井　寛　1992　「称名寺式土器の分類と編年」　『調査研究収録』９　㈶横浜市ふるさと歴史財団

石井　寛　1993　『牛ヶ谷遺跡　華蔵台南遺跡』　㈶横浜市ふるさと歴史財団

今村啓爾　1977　「称名寺式土器の研究（上）」『考古学雑誌』63(1)　日本考古学会

今村啓爾　1977　「称名寺式土器の研究（下）」『考古学雑誌』63(2)　日本考古学会

大森隆志　1988　『北原遺跡』　明野村教育委員会
大森隆志　1989　『踊石遺跡　薬師堂遺跡　白山Ⅰ遺跡』　明野村教育委員会
大森隆志　1990　『千野木Ⅰ・Ⅱ遺跡　池の下遺跡　踊石Ⅱ遺跡　中村道祖神遺跡』　明野村教育委員会
大森隆志　1991　『宮後遺跡　浦田遺跡』　明野村教育委員会
折井　敦　1991　『上北田遺跡　新居道上遺跡』　白州町教育委員会
甲斐型土器1992　『甲斐型土器－その編年と年代－』　山梨県考古学協会
研究グループ
櫛原功一　1985　『東姥神Ｂ遺跡』　大泉村教育委員会
小平和夫　1990　「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４－松本市内その１－』
㈶長野県埋蔵文化財センター
権現堂遺跡1989　『権現堂遺跡』　増穂町教育委員会
学術発掘調査会
佐野　隆　1992　『屋敷添』　明野村教育委員会
佐野　隆　1994　『神取』　明野村教育委員会
末木　健　1975　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内－』
山梨県教育委員会
末木　健　1976　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－北巨摩郡須玉町地内－』山梨県教育委員会
末木　健　1987　「八ヶ岳西麓の古代甲信国境」『甲斐路』59　山梨郷土研究会
瀬田正明　1994　「健康村遺跡出土の土師器について」『健康村遺跡』　新宿区区民健康村遺跡調査団
谷藤保彦編1990　『縄文後期の諸問題』　縄文セミナーの会
関根慎二
都留市史　1986　『都留市史資料編　地史・考古』　都留市
編纂委員会
新津　健　1993　川又坂上遺跡　山梨県教育委員会
三田村美彦
萩原三雄　1986　「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨考古学論集Ⅰ』　山梨県考古学協会
平野　修　1988　『宮間田遺跡』　武川村教育委員会
平野　修　1992　『宮ノ前遺跡』　韮崎市遺跡調査会
櫛原功一
保坂康夫　1986　『駒井遺跡発掘調査報告書』　山梨県教育委員会
保坂康夫　1992　「山梨県下の平安時代鍛冶遺構の様相」『山梨県考古学協会誌』5　山梨県考古学協会
宮沢公雄　1987　『普門寺遺跡』　明野村教育委員会
森原明廣　1994　「山梨県地域における古代末期の土器様相」『丘陵』14　甲斐丘陵考古学研究会
山下孝司　1986　『金山遺跡　下木戸遺跡　中道遺跡』　韮崎市教育委員会
山下孝司　1987　『中本田遺跡　堂の前遺跡』　韮崎市教育委員会
山下孝司　1988　『前田遺跡』　韮崎市教育委員会
山下孝司　1989　『後田遺跡』　韮崎市教育委員会
山下孝司　1990　『北後田遺跡』　韮崎市教育委員会
山路恭之助1983　『大小久保遺跡』　須玉町教育委員会
山路恭乃助1984　『中尾城遺跡　塚田遺跡』　須玉町教育委員会

写 真 図 版

写真図版 1

村之内 II・III

村之内 II・III遺跡全景（手前が村之内III）

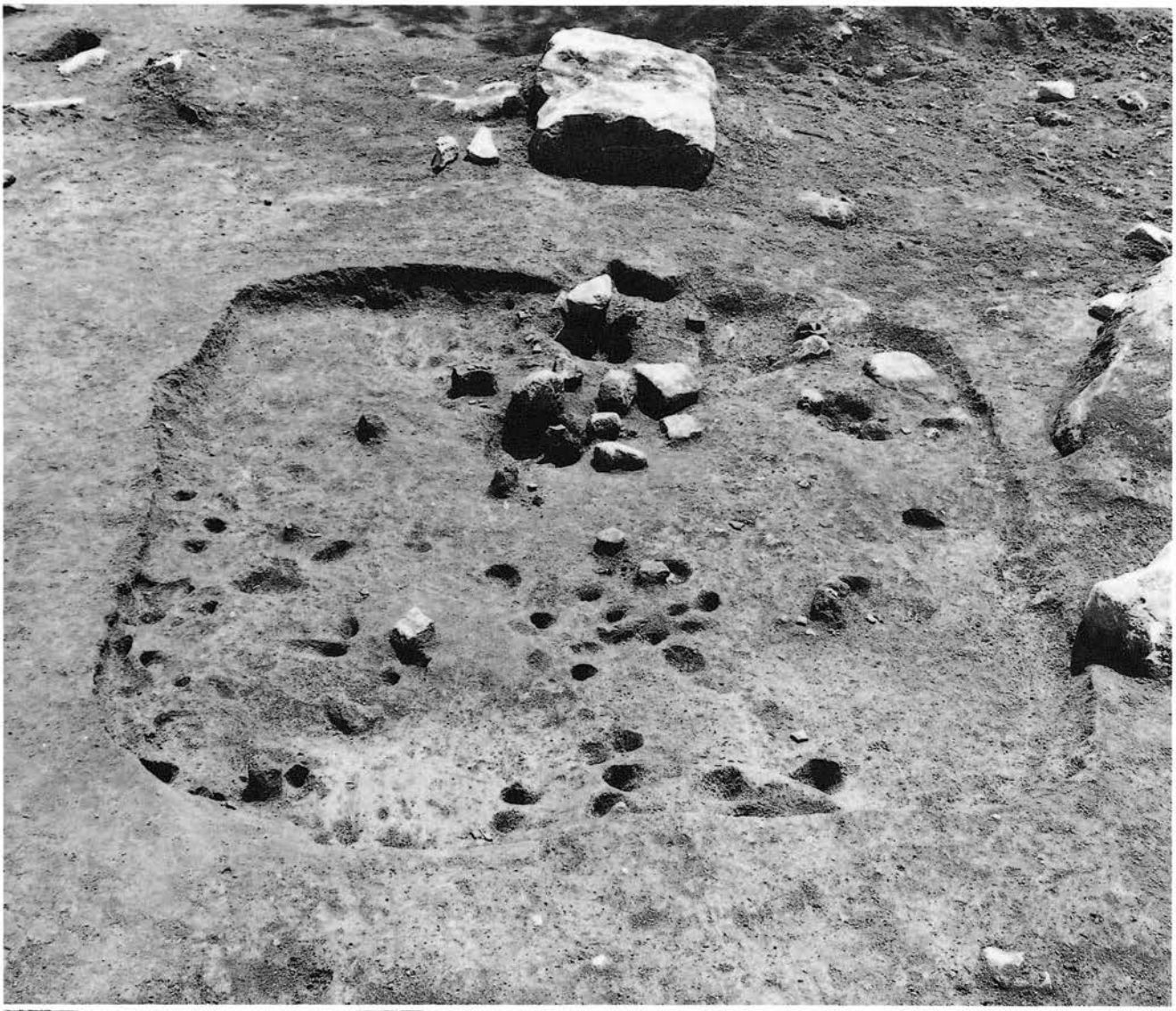
村之内 II 遺跡全景

写真図版 2
村之内 II
1 号住居

2 号住居
（手前、奥は 1 住）

写真図版 3
村之内 II

3 号住居



1 号住居遺物出土状況（左）

2 号住居遺物出土状況（右）

3 号住居遺物出土状況（左）

2 号住居出土土器（右：7 図－1）

写真図版 4
村之内 II
4 号住居

4 号住居カマド（左）
4 号住居遺物出土状況（右）

4 号住居出土土器
左：9 図－1
右：9 図－3

写真図版 5

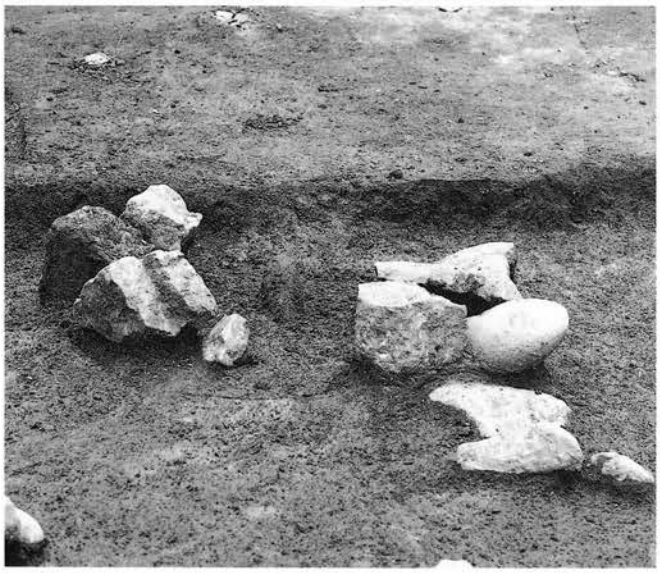
村之内 II

4 号住居出土土器
左：9 図－7
5 号住居出土土器
右：13図－4

5 号住居カマド（左）
5 号住居出土土器
右：13図－4

5 号住居遺物出土状況（右）
5 ～ 7 号住居

写真図版 6
村之内 II
6 号住居



6 号住居カマド（左）

6 号住居遺物出土状況

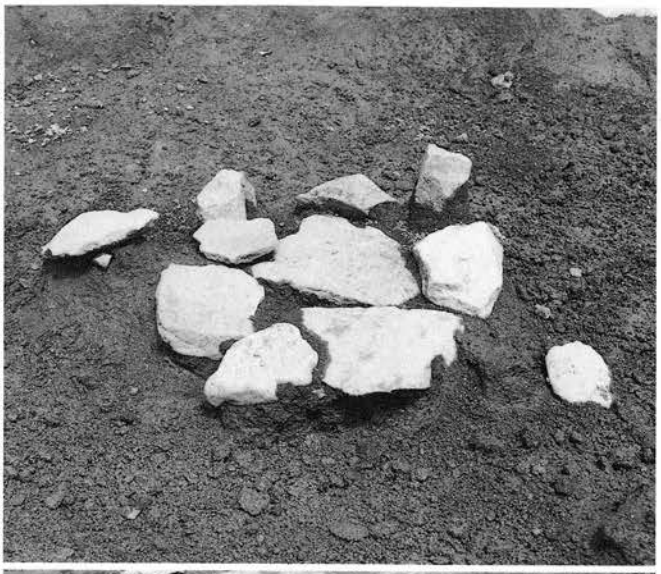
6 号住居出土土器
左：14図－6
右：14図－13

写真図版 7

村之内 II

7 号住居遺物出土状況（左）

7 号住居カマド（右）



8 号住居カマド（左）

8 号住居石列（右）

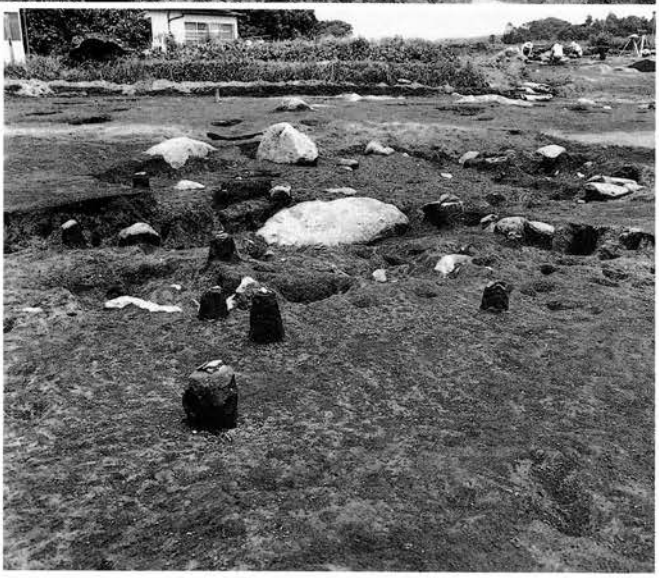
8 号住居

写真図版 8
村之内 II
9 号住居

10号住居

写真図版 9
村之内 II
11号住居

9 号住居出土土器
（左：19図－5）
10号住居遺物出土
状況（右）



11号住居出土土器
左：21図－3
右：23図－4

写真図版10
村之内II
12号住居

13号住居

写真図版11
村之内II
14号住居

15号住居

写真図版12

村之内II・III

12号住居遺物出土状況（左）

15号住居出土土器（右：26図－3）

土師質小皿（右列手前20図－1；右列中25図－2；右列奥28図－1；左列手前28図－3；左列奥28図－2）

17号住居出土土器（右：28図－5）

18号住居（左）

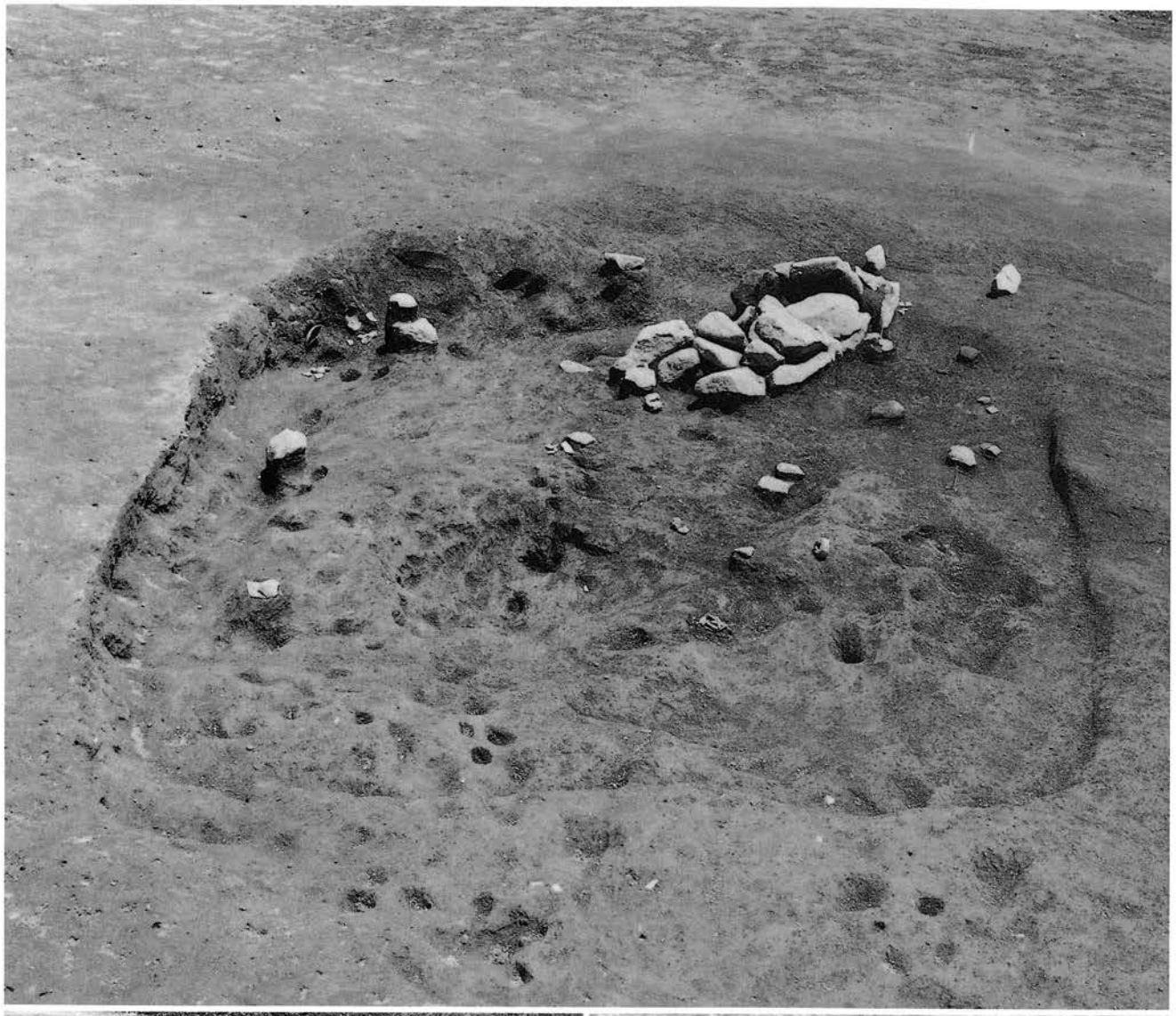
20号住居（右）

19号住居出土土器（左：29図－2）

墨書土器　上左より9図－8、9図－5、19図－3、24図－2　下左より31図－14、31図－16、31図－17

写真図版13
村之内III

1号住居



1号住居出土状況（左）

1号住居カマド（右）

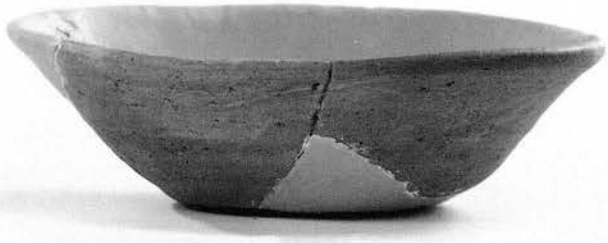
1号住居出土土器
左；30図－1
右；30図－2

写真図版14
村之内III

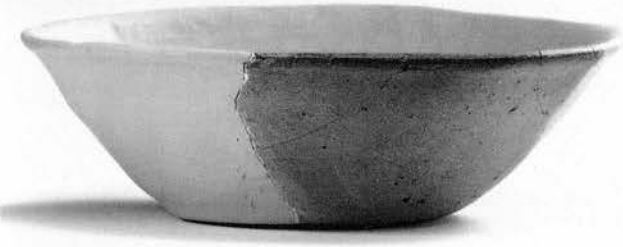
1号住居出土土器
左；30図－3
右；30図－4

左；30図－5
右；30図－6

左；31図－8
右；31図－10

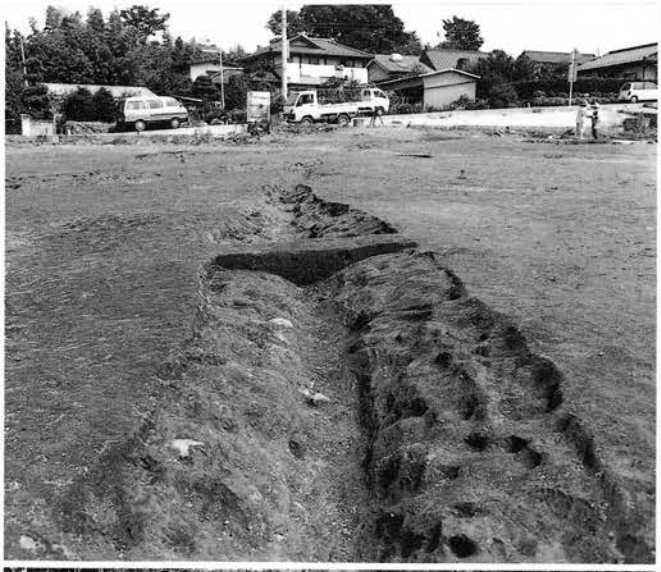


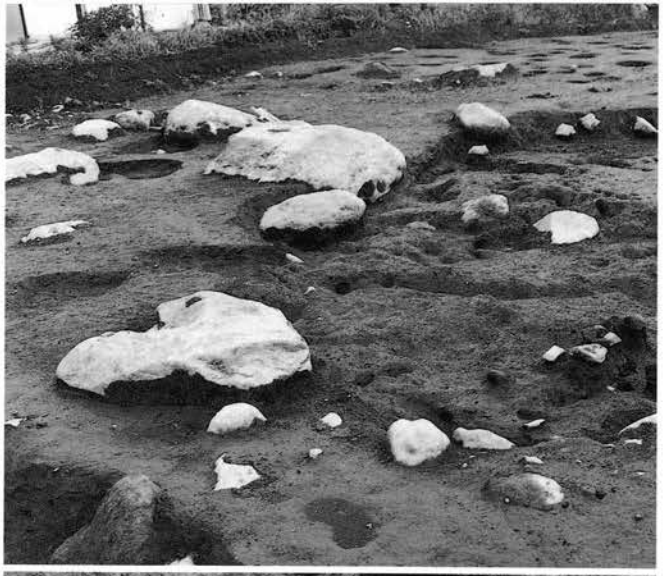
左；31図－15
右；31図－21・22



写真図版15
村之内III
2号住居

溝状遺構





写真図版16

村之内Ⅱ・Ⅲ

溝セクション

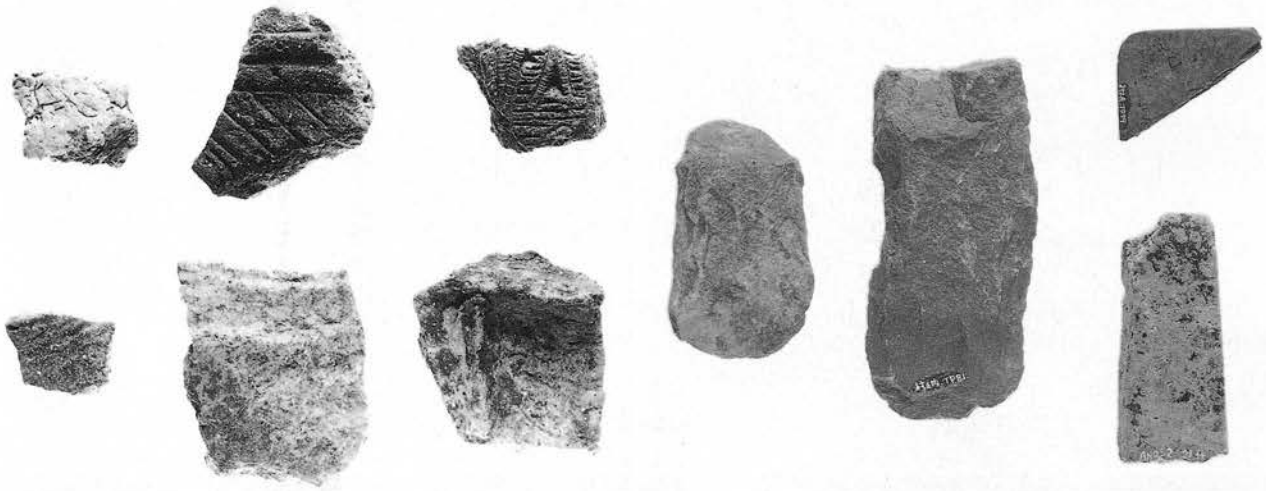
竪穴状遺構
（奥は15号住居）

溝状遺構
（奥は９号住居）

14号住居内埋設土器出土状況（右）

埋設土器出土状況（左）

埋設土器（右）



縄文時代の遺物
（４図）

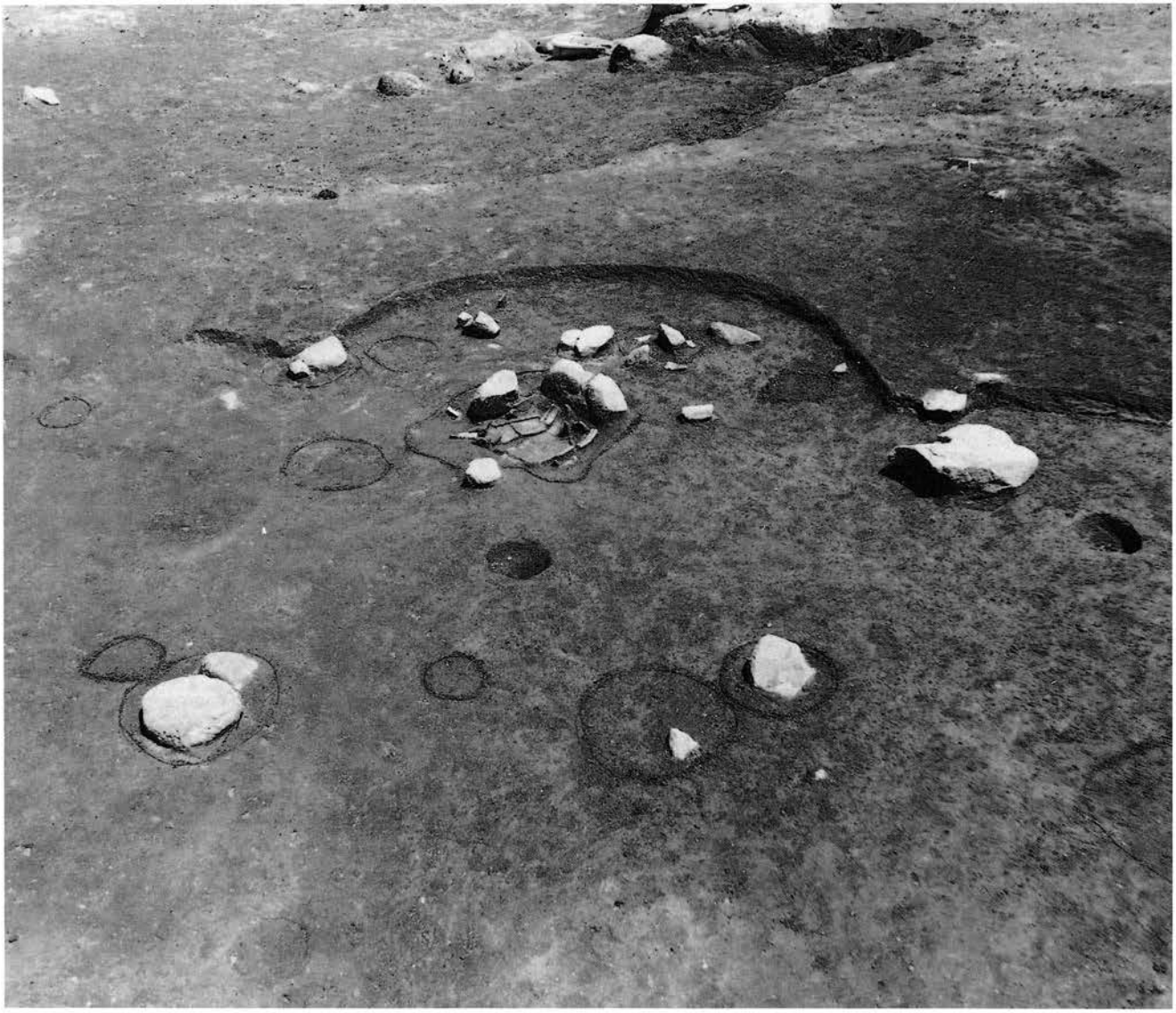
遺構外出土遺物
（右２点、29図－7・33図－1）

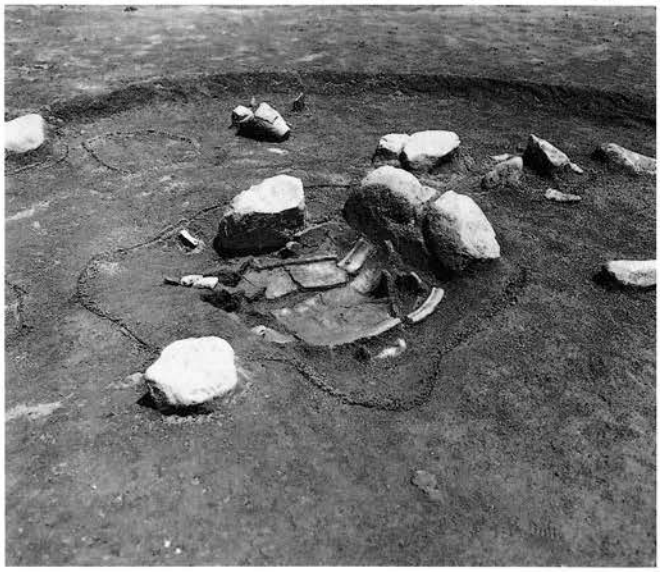
写真図版17
高台・中谷井

高台・中谷井遺跡
全景
（奥は茅ヶ岳）

近　景

写真図版18
高台・中谷井
16号住居





16号住居完掘状況（左）
16号住居炉址（右）

16号住居出土土器
左：3図－1
右：3図－3

写真図版19

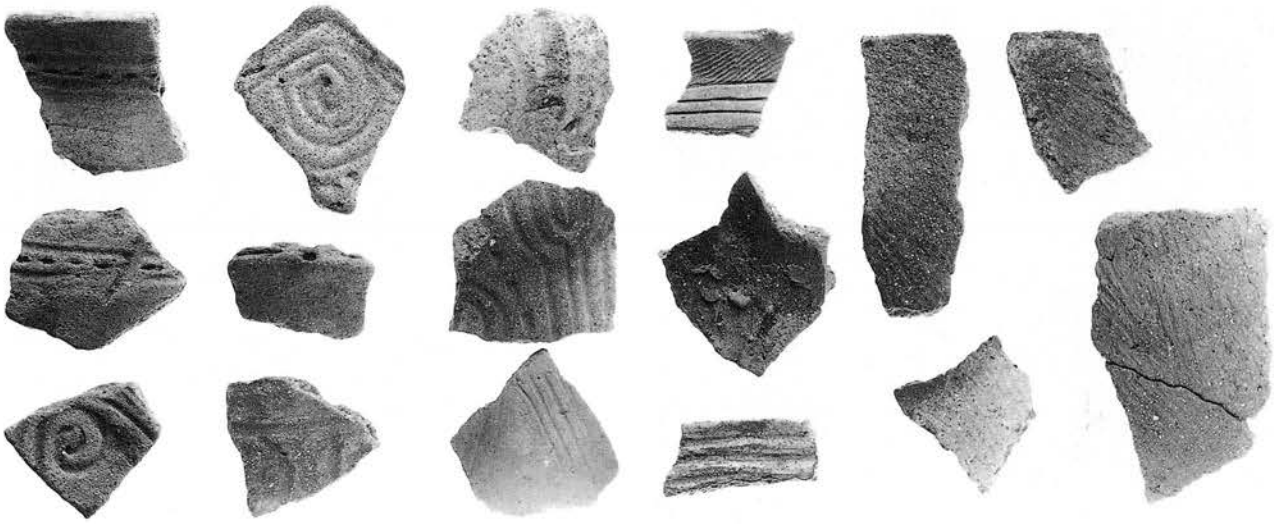
高台・中谷井

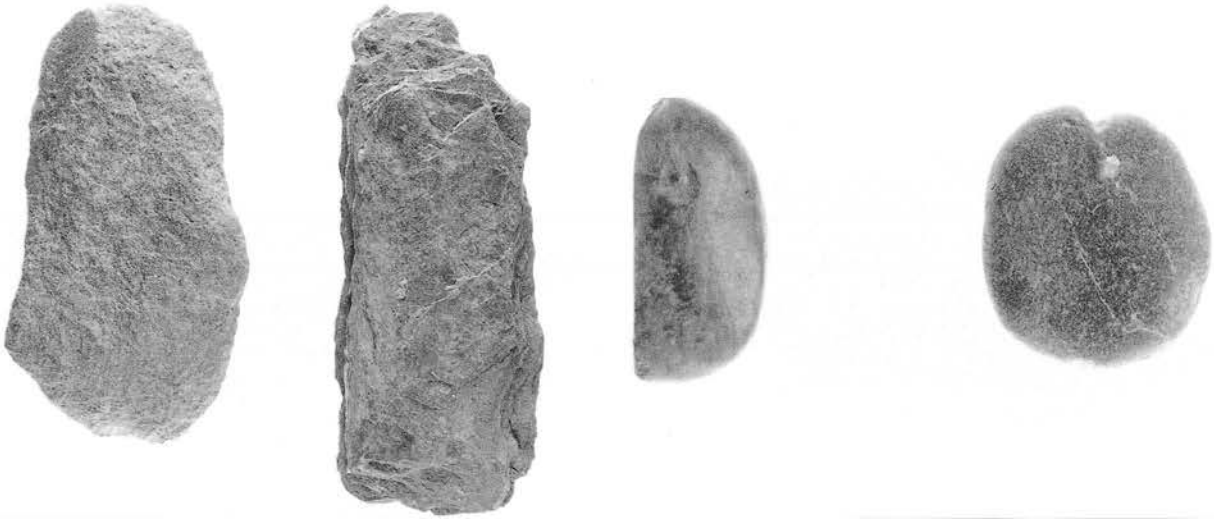
遺構外出土遺物
縄文時代の土器
（4図）

写真図版20

高台・中谷井

遺構外出土遺物
縄文時代の土器
（5図）





縄文時代の石器
（6図）

写真図版21

高台・中谷井

2号住居

2号住居遺物出土状況（左）

2号住居出土土器
右；7図－1

左；7図－2
右；7図－7

写真図版22
高台・中谷井
3号住居

2号住居出土土器
（左：7図－9）

3号住居カマド
（右）

4号住居出土土器
左：9図－1
右：9図－5

写真図版23
高台・中谷井

5号住居

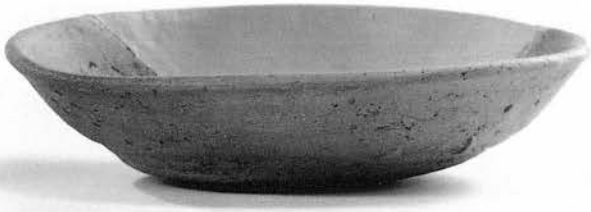
6号住居

写真図版24

高台・中谷井

5号住居カマド（左）

6号住居カマド（右）



6号住居出土土器（左：12図－3）
8号住居出土土器（右：14図－2）

9号住居

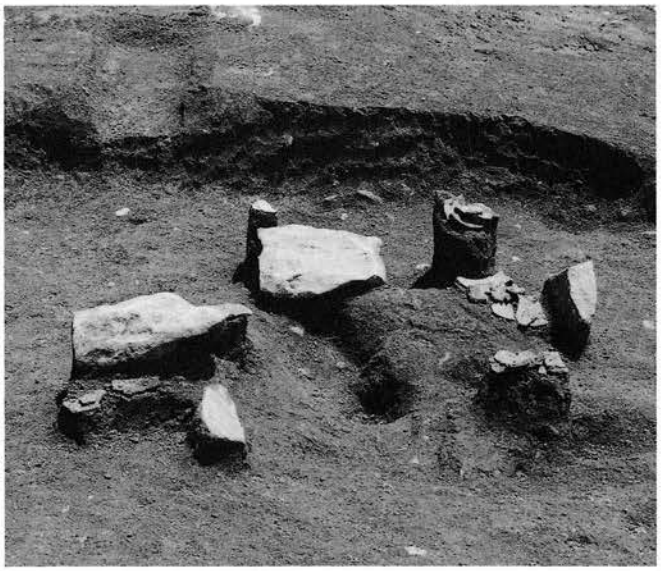
写真図版25
高台・中谷井

10号住居

10号住居遺物出土状況

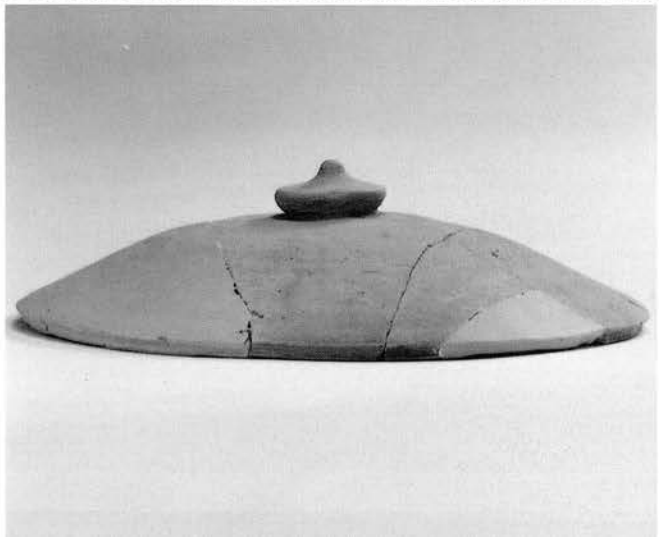
10号住居出土土器
左：17図－1
右：17図－2

10号住居出土土器
左：17図－4
右：17図－3



11号住居（左）
11号住居遺物出土状況（右）

11号住居遺物出土状況（左）
11号住居出土土器
右：18図－2



11号住居出土土器
左：18図－4
作業風景

写真図版27
高台・中谷井
12・13号住居

12号住居

写真図版28

高台・中谷井

12号住居遺物出土状況（左）

12号住居カマド（右）

12号住居出土土器
左：22図－28
右：22図－29

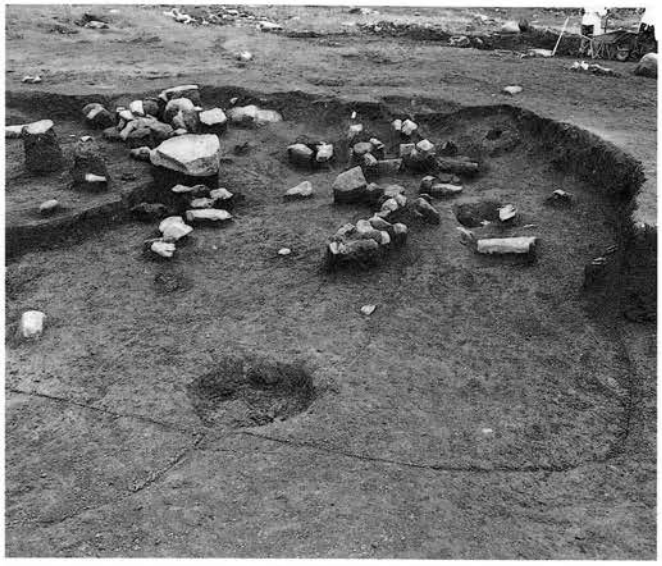
13号住居

写真図版29

高台・中谷井

12号住居出土土器（左：21図－7）

13号住居遺物出土状況（右）

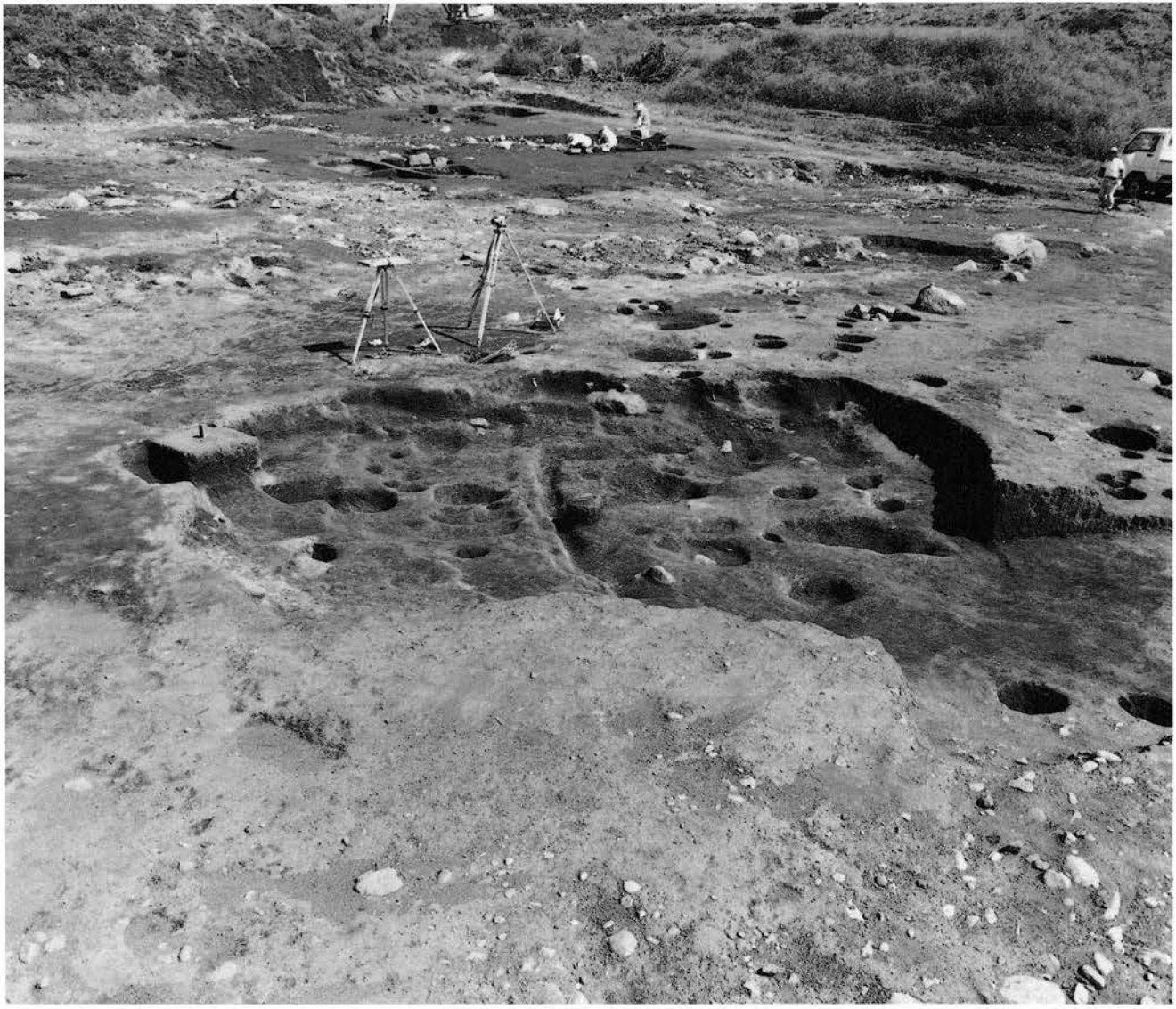


13号住居カマド（左）

13号住居出土土器右：23図－1

13号住居出土土器
左：23図－2
右：23図－3

作業風景
12・13号住居カマド（右）



写真図版30

高台・中谷井

12・13号住居完掘状況

1号土坑

写真図版31

高台・中谷井

墨書土器（左）
上 左：8図－1、
上右：8図－2
下 左：17図－9、
下右：21図－2

1号土坑出土土器（右）

土坑出土遺物（左：25図 2・7～10）

土坑出土遺物（右：25図－5・6）

発掘調査参加者

報告書抄録

ふりがな	むらのうちII・IIIいせき　たかだい・なかたにいいせき
書名	村之内II・III遺跡　高台・中谷井遺跡
巻次	
シリーズ名	明野村文化財調査報告
シリーズ番号	第9集
編著者名	佐野　隆
編集機関	明野村教育委員会
所在地	〒407-02　山梨県北巨摩郡明野村上手5219-1　TEL 0551-25-2311
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むらのうち 村之内II・III遺跡	あけのむらうえで 明野村上手 4,552ほか	194026	AN052・053	35°46′30″	138°26′10″	19930520～ 19930719	7,600	県営圃場 整備事業
たかだいなかたにいいせき 高台中谷井遺跡	あけのむらうえで 明野村上手 9,646ほか		AN003	35°46′00″	138°27′00″	19930614～ 19930916	10,700	県営圃場 整備事業

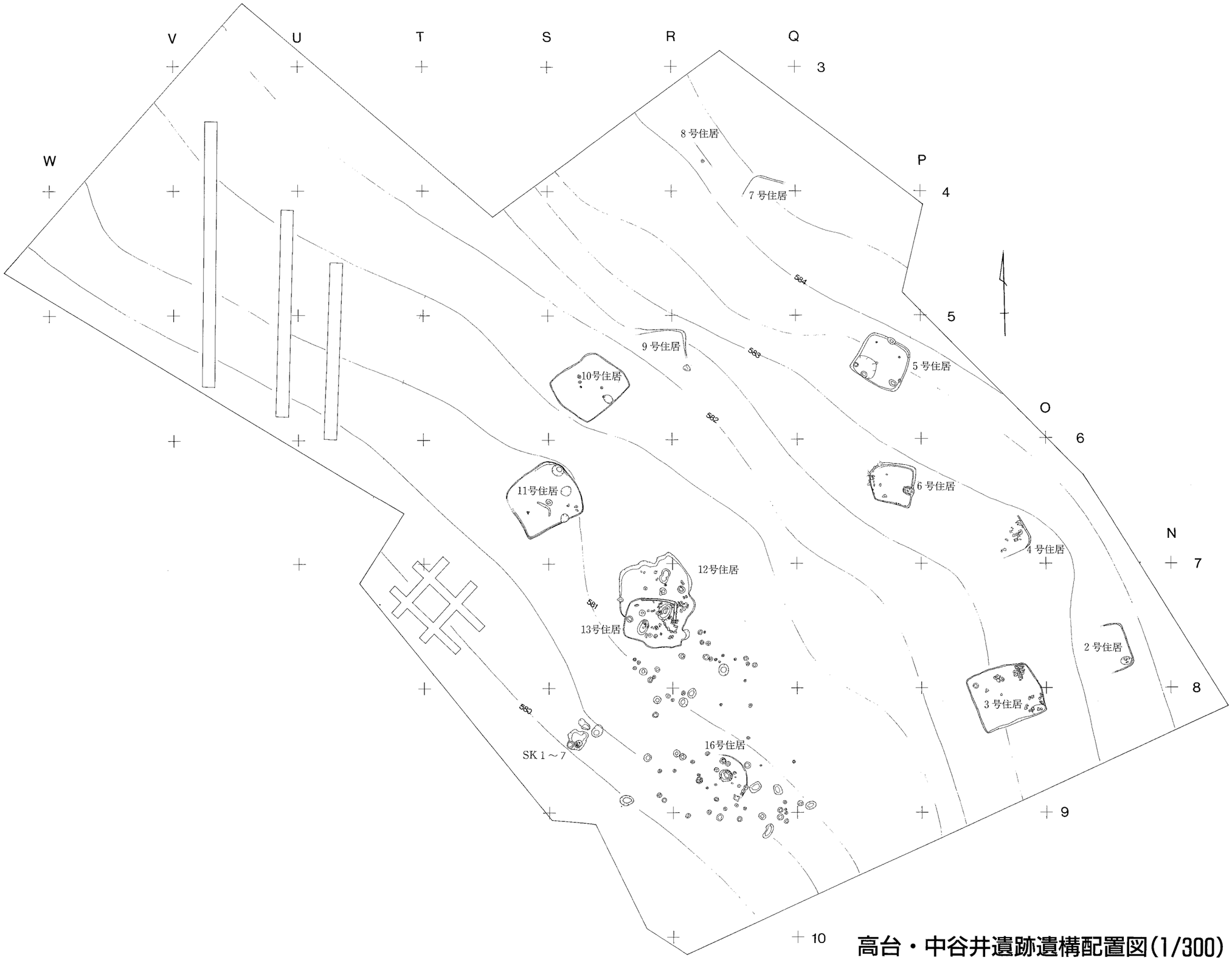
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
村之内II・III遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居　24軒 溝址　1条	土師器・須恵器・灰釉陶器 土師質土器	鍛冶施設付住居1軒
高台中谷井遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居　1軒	土器・石器	三十稲葉式模倣土器
		平安時代	竪穴住居　12軒	土師器・須恵器・灰釉陶器 緑釉陶器・土師質土器	

明野村文化財調査報告　9

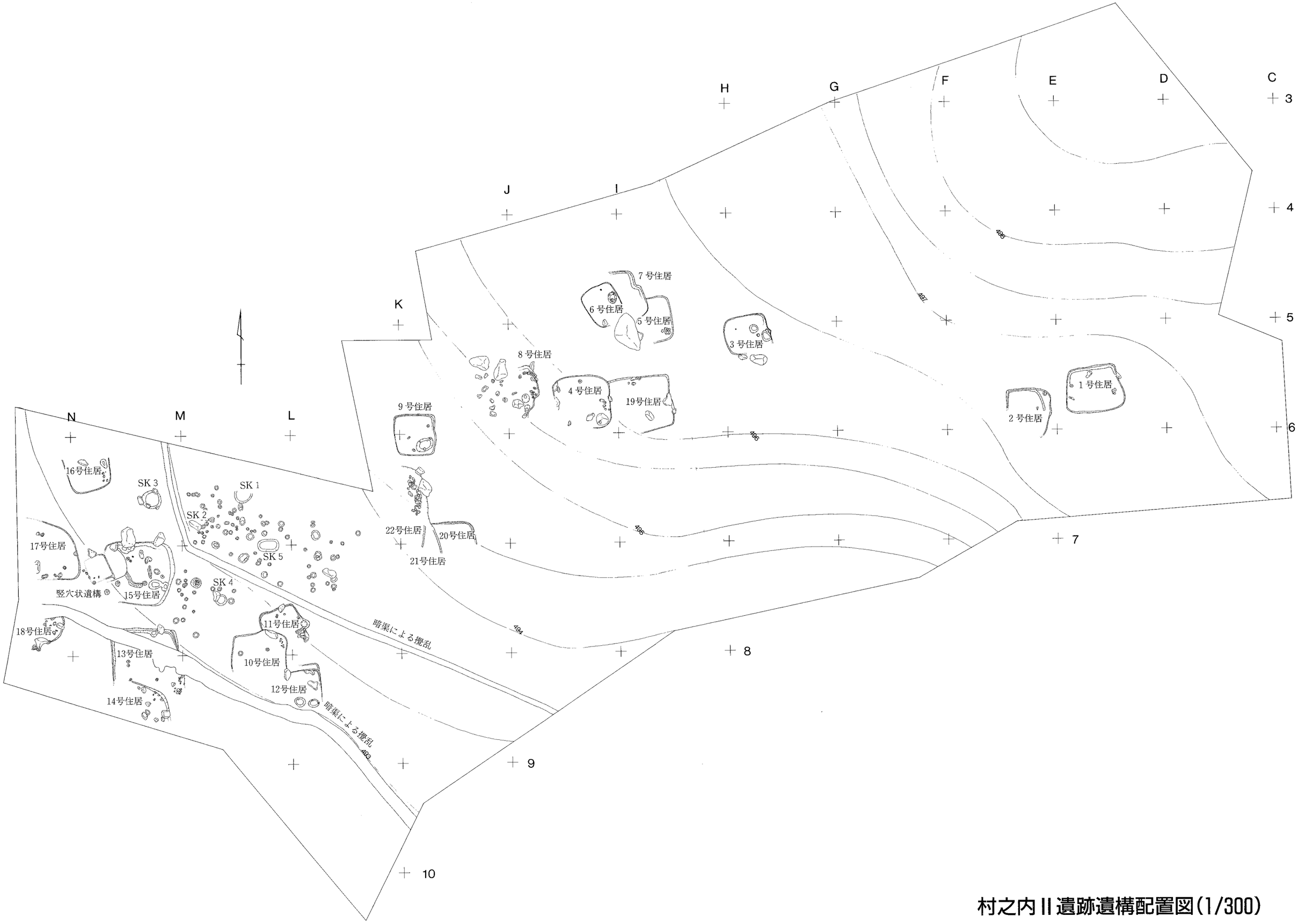
村之内II・III遺跡
高台・中谷井遺跡

1995. 3. 31発行

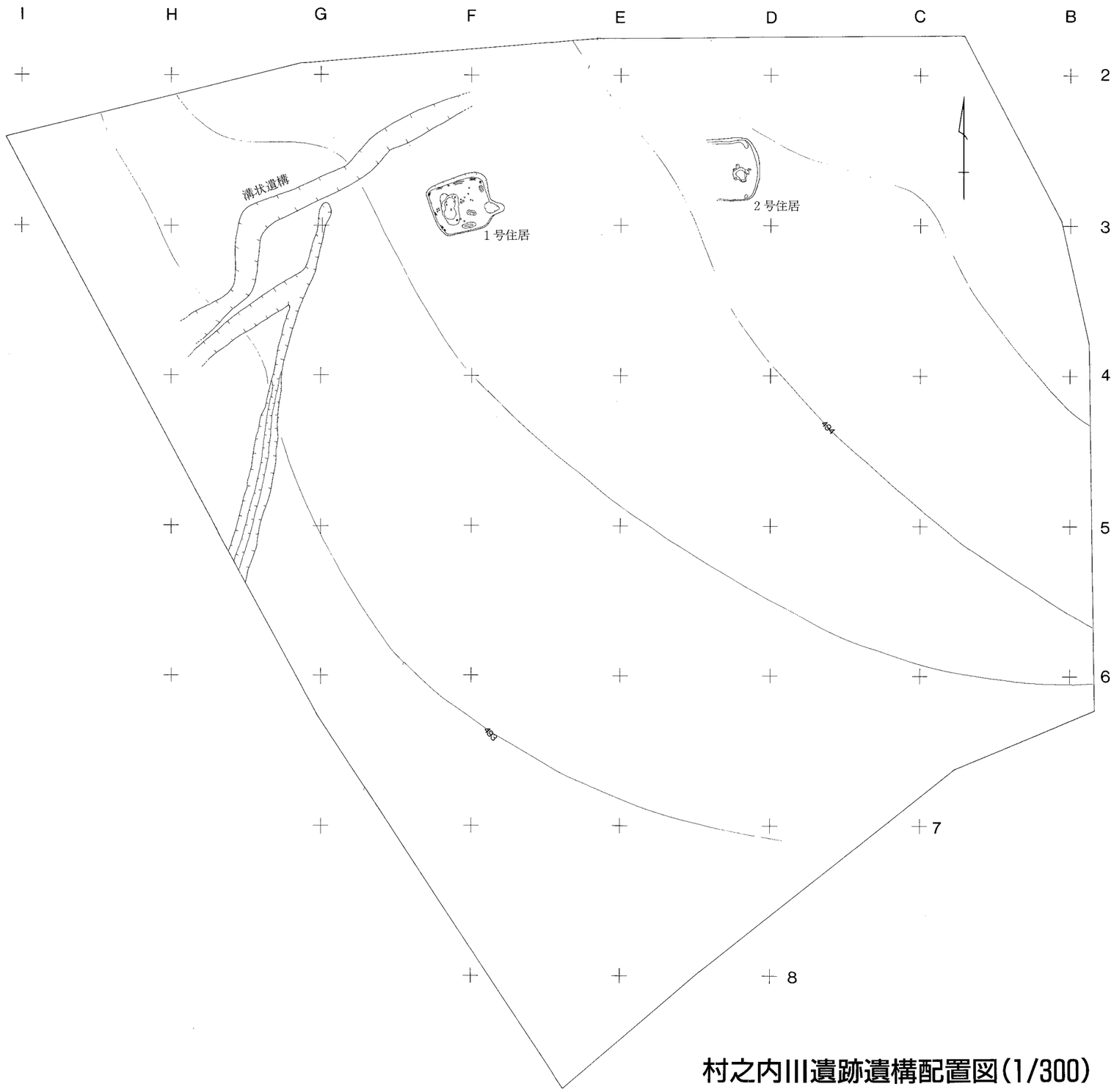
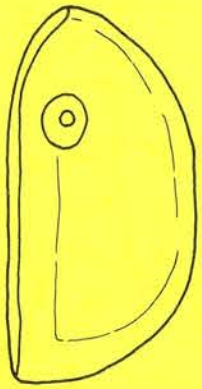
発　行　明野村教育委員会
　　峡北土地改良事務所
印　刷　ほおずき書籍株式会社
　　〒381 長野県長野市柳原2133-5
　　電話（0262）44-0235㈹



高台・中谷井遺跡遺構配置図(1/300)



村之内Ⅱ遺跡遺構配置図(1/300)



村之内III遺跡遺構配置図(1/300)